
沈黙の人形

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙の人形

【Nコード】

N2230L

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

19世紀半ば、英国に若き天才探偵家がいた。

そして、同じころ、仏国には正体不明の大怪盗がいた。

2人の天才に翻弄される未来の小説家ジョン・コール。

ジョンは思う。

世の中に『普通』なんてものはない。だけど、きっと彼も僕もみんな『普通』なんだ。

1 天才は退屈に殺される

君が『悪』で、僕が『善』だなんて、
いったい誰が言っただい？

退屈を紛らわすために、あらゆる事件に首を突っ込んでいる、
ただそれだけの僕よりも、

欲深い者どもから金を巻き上げ、貧しい者たちに振る舞う君の方
が、

よほど正義だと、僕は思うよ。

R・F

▲

彼は退屈を持て余していた。

そして、彼曰く、『退屈』というものは、人を殺すことができる
らしい。

実際そうして死んだ者を僕は知らないが、目に見えぬ殺人鬼から
逃れるために、彼は両腕一杯に新聞を買い占めて、僕を絶句させた。

面白い事件が起きていないかと、活字を貪り（むさぼ）読む姿は、薬の切れた中毒患者のように凄まじく、元がヴィーナス（美の女神）の息子のような容貌をしているだけに、その顔ときたら、彼の方こそ人を殺してきたみたいな酷い形相だ。

そんな彼と同じ部屋で過ごさなければならなかった数日間を、僕はこの先の人生において『牢獄看守の数日間』と呼ぶことを決めた。ついに彼が力尽きたのは昨日のことだ。彼はベッドに倒れ込み、僕を呼んだ。

「ジョン、僕はもうだめだ。退屈に殺される。君は鈍感だから分らないかもしれないが、退屈ほど疲労するものはない。何もすることができないというのは、何かを過剰にしている時と同じくらい苦痛で、精神面ではむしろそれ以上の拷問なんだ。——ああ、ここから動けそうにない。指一本だって動かせやしない。それなのに、まさか君。君は僕にあのフランク教授の講義に出るとか言うつもりではないだろうね。あの九十分間は体調がいい時でさえ苦痛なんだ。この僕の状態を見て察してくれ。とても出席できそうにないだろう？　僕は欠席するからね。君の方から教授にうまいこと言っておいてくれ。今日一日じつとしていることにしたんだ。だからいいかい？　もし誰かが僕を訪ねてきても絶対に起こさないでくれよ。僕は重病だ。今にも死にそうなんだ。絶対だよ、ジョン。たとえば女王陛下の命令であろうと、君の友人の頼みを優先してくれ」

こんな風に言われては苦笑するしかない。もう勝手にしてくれと、こちらから頼みたい気分で、昨日一日、彼を放っておいた。

そして今朝、いかにも怠そうに彼は自室から出てきた。お気に入り

りの揺り椅子に腰かけると、わざとらしく大きなため息をつく。

「頭が重い。いや、痛い。肩が、背中が、腰が。……ともかくそこら中が痛い。あのベッド、僕にいたいどんな恨みがあると言っただ？」

勝手に怒り出した彼に僕は呆れた。

「寝過ぎだよ。七時間から八時間が正しい睡眠時間だって本に書いてあったよ。それ以下ではちゃんと疲れが取れないし、逆にそれ以上では脳細胞が衰えてしまうんだって。それを君ときたら二十四時間、いや三十時間はベッドの中にいただろう？」

「小言は結構だ。頭に響く」

彼は眉を歪ませ、実に怠そうに額を抑えた。

「ああ、それと僕の机の上にある課題。あれ、君がやってくれ」

「はあ？」

思いがけない言葉に僕が反射的に疑問の声を上げると、彼は更に眉を歪ませた。

「君が貰ってきたんだろ。君がやれ」

「何を言っているんだ。あれは君が昨日講義を欠席したから、代わりに貰ってきてあげたんじゃないか」

「あげただって？ 恩着せがましい！ 君は教授に僕のことをどう伝えたんだい？」

「風邪だよ。風邪をこじらせて寝込んでいるって」

「そうさ。それで、いったいどこの世界に風邪で寝込んでいる者に課題を出すバカがいる？ 寝込んでいるんだ。やれるわけがないだろ。——だから、あれは君に出された課題だったのさ。勝手に僕の机に置かないでくれ」

そんなバカな話があるものかと僕は彼を睨んだ。悲しいことに、こんな時、睨むしか手がないのは、口論では彼に勝てないと分かっているからだ。

一年前のあの日、学生寮のルームメイトとして彼と知り合ったあの時から、僕は諦めることに慣れてしまっている。

そうでなければ、彼とはやっていけない。

彼、リチャード・フォークスは、僕たちの学年では少し浮いた存在だ。

二学年も飛び級した秀才であること。皆が認める美形であること。そして、もちろん、その毒舌ぶりも原因の一つだろうが、何よりも彼を周囲から孤立させているものは、彼の探偵業に他ならない。

皆の『探偵』に対する認識が低いため、何をしているのか分からないヤツだと思われるのだ。

対して彼は、己が周囲からどのように見られているかということに無関心だ。むしろ、静寂を良しとして、孤独を楽しんでいるところがある。

他者に歩み寄ろうという気持ちが指先程度もない彼は、ますます探偵業に没頭しているわけなのだが、困ったことに、彼への依頼はそう年がら年中来るというものではない。

そんな時こそ真面目に学生をしていれば良いものを、彼は退屈だと言つて何もしようとしない。いや、何もしないどころか、僕に当たり散らすのだ。

「ジョン、君も暇な奴だな。僕に紅茶でも入れてくれないか」

一見頼んでいるようだが、これは命令だ。

「暇なものか。明日の講義の予習をしているんだ」

「それなら、なおさら紅茶を入れるべきだ。一息入れた方がいい。見えなかったことが見えて分かることもあるからね」

彼と言い争う気がない僕は、仕方なく席を立った。キッチンに立つと、彼のために食器棚からカップを取り出した。

特においしく入れようとは思っていなかったわけ、葉の量だつて考えずに適当に流し込んでやった。湯だつて、いつ沸かしたか分からないヤカンに入っていたもので、ずいぶん冷めかかっているものを使った。

だから、彼が文句を言うだろうことは予測できていて、それに対する覚悟も十分にできていた。

それでも、実際言われてみると腹が立つ。

「まずい」

一言言い放った彼に、だったら自分でやれと思わず怒鳴りそうになった。いや、怒鳴っていたかもしれない。その時、ドアがノックされていなかったら。

「誰だろう？ 朝っぱらから」

『朝』と言うが、今日は二人とも一時限目の講義がないので限りなく昼に近い。

「ジョン、開けてやってくれ」

言い捨て、そそくさと自室に戻った彼は、どうやら今日も風邪で寝込んでいることになっているらしい。

怒りよりむしろ呆れてその後ろ姿を見送ると、僕はドアを開けた。

「やあ、ジャン。リシャルが風邪でまいつているんだって？」

そこに立っていたのは太陽みたいに明るい少年で、フォークスの数少ない友人の一人だった。

アルベール・ルクレール。

生粋のフランス人である彼は『リチャード』をフランス風に『リシャル』、『ジョン』を『ジャン』と呼ぶ。

フォークスとルクレールの仲は、僕が二人と知り合う以前からの

もので、いわゆる幼馴染みだと聞いている。

だが、なぜ、イギリス人であるフォークスとフランス人のルクレールが幼馴染みなのかというと、実はフォークスの祖母もフランス人で、彼が幼少期のほとんどをフランスで過ごしたからだ。その時に、二人の家が隣同士だったとか。

それにしても、ルクレールを太陽と言うのならフォークスは夜空だ。それも真冬の雲一つとしてないような寒々とした空。

どうやって彼らの間に友情が成り立っているのだろうかと疑問に思うほど、二人は正反対な存在だった。

フォークスは同級生たちから孤立しているが、ルクレールはまるで人間磁石。常に人々の中心にいる。

すらりと背が高く、他の同級生たちよりも頭一つ分の差がある。

誰よりも陽の光りを受けてキラキラと輝くプラチナブロンド。縹色の瞳は知的だ。

対するフォークスの髪や瞳は漆黒。世界中の闇を背負っているかのように黒い。

けれど、肌は陶器のようで、その黒と白の対比はハツとするくらいに妖艶だ。

そんな彼らは端から見て、特別仲が良いように見えない。月に数度、ふらりとルクレールがフォークスの部屋にやって来るくらいで、その他の交流はまったくくないのだ。

しかも、二人は、ただ静かにお茶を飲んで時間を過ごすといった具合だ。

ふざけあったり、思いつきり体を動かして遊んだり、一緒に買い物に出かけたりといった普通の友達付き合いではない。

ルクレールの声を聞きつけて、フォークスが自室の扉を開いた。

「うるさい奴が来たな」

憎まれ口を叩きながら、彼は再び揺り椅子に腰を落ち着かせた。ルクレールは肩を竦めた。

「なんだ、ずいぶんと元気じゃないか」

フォークスのズル休みに気が付いて、苦笑し、持参してきたバラの花束をフォークスに投げやった。

バラはフォークスの膝の上に収まる。

「仕方のない奴だ。出席日数大丈夫なのか？ 大概にしておけよ。本当に病氣した時に困るだろ」

「君も夜遊びは大概にしとくんだな。妙な病氣になるかもしれないよ」

バラを弄びながらフォークスは意味深に笑う。ルクレールは眉を歪ませた。

「ああ言えば、こう言う」

口調は怒っているようだが、本気ではない。どちらかと言えばルクレールは、フォークスの毒舌を好んで聞いてやっている。

彼に言わせると、憎まれ口もガキ臭くて可愛いのだそうだ。——なんて酔狂な。

ルクレールはソファに腰掛けると、足を組んで、実は、と口を開いた。

「俺も今日から風邪で寝込んでいることになっている」

「ふーん。どこか行くのかい？」

「まあな」

自分から振った話題だというのに、短い答えのみで黙り込んでしまった彼を、フォークスは訝しげに振り返った。

だが、すぐに、じっと自分を見つめている彼の瞳に気付き、手元のバラに視線を落とす。

悪戯なフォークスの指が鮮やかに赤い花びらを一枚、また一枚と摘んでは千切る。

くると、舞いながら落ちたその花びらは、花の一部だった時よりも美しく、妖しい。

触れるもの全てを己の色に染めようとしているかのように赤く、側にあるすべての者を酔わせてしまうほどに甘い香りを放っている。

「一緒に来てくれないか？」

しばしの沈黙後、ルクレールが言葉を放った。驚いて、フォークスは彼を振り返った。

縹色の瞳。そこからルクレールの真意を読み取ることは不可能だと悟ると、フォークスは苦く笑みを浮かべた。

「どついう風の吹き回しだい？ 君が僕を誘うなんて。——それで？ どこへ行くんだい？」

「我が母国、フランスさ」

「フランス？」

呟くように聞き返したフォークスに、ルクレールは頷く。

「俺の家の別荘がある辺りに――」

ルクレールの実家は指折りの金持ちで、パリ郊外にある巨大な本邸の他、フランス国内にいくつもの別荘を持っている。

フォークスが幼少期に住んでいたのは、ルクレール家本邸の隣だ。そこでの思い出に何か嫌なものがあるらしく、フォークスはフランスと聞いただけで顔色を変えた。ルクレールの言葉を遮る。

「オルレアンでもマルセイユでも、どこにだって行けばいいだろ。いつものように一人で、勝手にどうぞ。だいたい僕は君のやることだけには関わらないようにしようと考えているんだ。君はろくなことをしないからね。面倒はごめんだよ。僕を巻き込まないでくれ」

ふいつと、フォークスは顔を背けた。

ルクレールはやれやれと頭を横に振る。

「まあ、聞けつて。お前の好きそうな話があるんだ」

そう言っつて、彼はフォークスが横目で自分をチラリと見たのを確認し、口元に笑みを浮かべ、続けた。

「半年前、ジゼルという名前の少女が死んだ。毒物による自殺だったらしい。その死体があまりにも綺麗だったもので、初め、誰もが彼女の死を受け入れられなかった。眠っているのだと思い、声を掛ける。体を揺する。だが、いくら呼んでもジゼルは目覚めず、次第に人々は彼女の死を認めていったんだ。——だが、たった一人だけ未だに認めない者がいる」

マルキード・ボードレール。

ジゼルの父親だ、と、彼は声を低めた。

「彼は、娘の埋葬を拒否し、死体をガラスケースに入れた」

「なんだって？ 死体を埋めないで、ガラスケース？ ……腐らないのか？」

「腐るさ。——皮膚は黒ずみ、内臓はドロドロだ」

「死んで半年も経てば当然だな。その腐った死体を見れば、そのマルキードとやらも娘の死を受け入れざるを得なかった。そうだろ？」

表情を歪めて発せられた疑問に、ルクレールは頭を左右に振った。

「いや。彼はジゼルの目覚めを信じて、その体を美しいままに保っている。崩れたところは蠟で塗り固め、補修しながらな」

「なんて男だ！」

ルクレールは話し上手で、予習をする振りをしながら二人の会話

に聞き耳を立てていた僕も背筋をぞくぞくさせた。

彼がいつも多くの友人に囲まれているわけが分かった気がする。人の気を引き、楽しませる話し方だ。自然と耳が彼の声を拾ってしまふ。

僕は教科書を閉じて、ルクレールの話に耳を傾けた。

「ところで、ここ最近、ジゼルの死体が消えるらしい。ガラスケースを抜け出して村を歩き回っているという噂だ」

「まさか！」

フォークスは呆れ顔になる。ルクレールも苦笑して、肩を竦めた。

「俺だって信じてはいない。だが、そういう噂が流れていることは確かだ。更に、マルキードが妙なことを言い出した。娘は自殺ではなく、何者かに殺されたのだ、と。——マルキードが言うには、ジゼルを殺した犯人は殺害現場に忘れ物をしたらしい。そして、その遺留品には、『A・L』と彫られていた。そこでマルキードは、イニシャルがA・Lである者を村中から集めることにしたんだ。生きていれば十八歳になるはずだった娘の誕生日に、彼女のためのパーティー・パーティーと称してな」

そこでルクレールはいったん言葉を切った。

どうしたのだろうか。僕が彼の方を見やると、彼は苦笑して上着のポケットから一枚の封筒を取り出した。

「愉快的ことに、俺にもその招待状がきた。マルキードが犯人探しのために人を集めるというのは、村では知らない者なんていない

つてくらいに有名な話になっている。そんな状況で、招待状を受け取っておきながら、パーティーに欠席したら、自分が犯人だと言っているようなものだ。だから、俺は何が何でもこのパーティーに出席しなければならぬ」

自分に殺害容疑が掛かっているというのに、彼はなんてことないように、へらへら笑って肩を竦めてみせた。
対して、なぜか大あわてをしたのは僕だ。

「大変じゃないか！」

ガタンと音を立てて椅子から立ち上がる。

「こんな所でのんびりしている場合じゃないよ！　ちゃんと容疑を晴らさない！」

突然の僕の大声に、ルクレールは一瞬、驚いた表情をしたが、すぐに悪ガキめいた笑顔に戻って口を開いた。

「そうさ、俺は一刻も早く容疑を晴らさなければならぬ。いや、晴らしたいのさ。そこで、リシャル、お前の出番だ。俺のために一緒に来てくれないか？」

「嫌だね。面倒だ。何で僕が君のために？」

事もあるうちに、フォークスは即答した。

だが、そんな返答など予想内のことだったようで、ルクレールは怯まない。

「リシャール、俺はお前の親友だろう？ それに、よく考えるんだ。死体が動くんだぞ？ マルキードの言うとおりジゼルを殺した犯人がいるのだとしたら、その犯人は、半年前、どんなに調べても誰にも分からなかったんだ。それをお前がいとも容易く解決できたら、面白いと思わないか？」

「思わないね。馬鹿らしい」

フォークスの言葉に僕はぎょつとしてルクレールを見たが、彼は不機嫌になるところか、相変わらず笑顔でフォークスの言葉を聞いていた。

「くだらない。こんなくだらないことは、これっきりにしてもらいたいね」

フォークスは、すくつと立ち上がった。そして、くるつとルクレールに振り向き、言い放つ。

「午後には出るだろ？ すぐ支度をしよう。君はそこのまずい紅茶でも飲んで待っていてくれ」

言い終わるか否かで、フォークスはものすごい勢いで自室に入っていた。

何やらガタゴトと物をひっくり返している音がする。

—— な、なんだあ？

呆気にとられてしまっている僕にルクレールは吹き出した。

「あいつ、素直じゃないだろ。本当は、事件と聞いただけでウズするくせにさ」

そう言うのと、例の紅茶が入ったカップに手を伸ばした。あわてて、僕は彼より素早くカップを取り上げた。

「入れ直すよ。これ、フォークスの飲みかけなんだ」

「だと思った。けど、別にいいさ」

彼は僕の手からカップを取ると飲んでしまう。

——彼が飲むことになるのと知っていれば、ちゃんとおいしく入れたのに。

僕は後悔した。

しばらくして、大きなトランクを引きずってフォークスが現れた。そして、大げさに呆れた声を上げる。

「アル、君はよくそんなまずいものが飲めるな」

「お前が飲めって言ったんだろう。それに、言うほどひどい味じゃない」

「君は頭だけじゃなくて、味覚もおかしいのかい？」

さらりとひどいことを言っただけのフォークスは、今度は僕の方に向き直り、わざとらしく驚いた顔をする。

「なんだい、君はまだ支度をしていなかったのかい？」

本気で驚いたのは僕の方だ。

「君は僕の風邪がうつって寝込まなければならなくなっただ。何をゆっくりくつろいでいるんだい？」

彼の口調から推測して、僕も一緒に行ってもいいのかい？ と尋ねてみると、あたりまえじゃないかと笑われる。

「行かないのかい？ 僕はてっきり君がアルの話を夢中で聞いているものだから、一緒に行くものだと思っていたよ」

「行くよ！ 行きたい！」

思わずそう叫んでから、自分の野次馬根性にほとほと呆れた。自ら面倒なことに首を突っ込んでしまったのだ。

トラブル好きなフォークスの側にいると、関わらないようにしようと思っただけ、いつの間にか、嵐の真っ只中にいたりする。

彼と同部屋になってしまったがために、何度大変な目にあっただとか。

ただ一方的に面倒に巻き込まれたというのなら、苦情も言うだろうし、もっと彼を拒絶しただろう。だが、僕にはそれができないわけがあった。

一つには、後々後悔するようなことになるとしても、彼が難事件をいとも容易く解決する姿を見たいという欲求で、それは自分の知らない場所で彼が事件に巻き込まれることを許さないのだ。そしてもう一つは――。

「今回の事件はどうやら僕好みというよりも君好みの事件だから、君の小説ネタになると思うよ？」

フォークスがにやけて言うと、ルクレールは意外そうな声を上げる。

「へえ、ジャンは小説を書くのか？」

「推理小説さ。主人公は探偵で、医学の心得がある助手と難事件を次々と解決していく一連の小説なんだ」

そこまで聞くとルクレールも、ほおーっと、にやけて僕に目をやる。

面と向かって話したことがなかったのに、とつくに本人が気付いていたのだと分かると、僕の顔の熱は上がった。

つまり、僕の書く小説の主人公はフォークスがモデルなのだ。僕は彼のせいで事件に巻き込まれる度に、その事件をネタにして小説を書いていた。

もちろん、事件の関係者のプライバシーを守る為に少しフィクションを加え、地名なども名前を変えている。

フォークスにかぎっては、年齢も三十歳半ばくらいで、本人よりいくぶんも大人っぽい。いかなる時でも冷静で、理屈屋だが、多くの人々を魅了するものをどこかに持つ、そんな人物になっている。

そして、何よりも顔を赤らめなければならない理由は、医学の心得がある助手とかいう存在だ。実は、僕は自分をその助手に重ねて書いている。

フォークスと対等でありたい。彼にとって意味のある存在になり

たい。彼の仕事に少しでも役に立つ力が欲しい。それら僕の願いすべてを叶えた存在がそれだ。

おそらく、フォークスは僕の気持ちに気付いているに違いない。そう思うと顔の熱は収まりそうになかった。

フォークスは、どかりとトランクに腰を降ろし、意地の悪い顔で僕を見上げる。

「何をのたくさしているんだい？ さつさと支度をしたまえ。汽車の時間に間に合わなくなる」

そう言つと、少し考えて、

「ところで、アル、何時の汽車だい？」

と、ルクレールの方に振り向いた。

すると、ルクレールは、フォークスの問いに即答せず、上着のポケットに手を入れると、なぜかハツとしたような顔になり、視線を漂わせる。

少し離れたところの壁に、時計が掛かっているのを見つけると、ルクレールはそれをちらりと見て、まだ時間があるからゆっくりできると答えた。

その彼らしからぬ行動にフォークスも僕も、うつすらとした疑問を感じた。

だけど、僕の方は、それほど気に止めることなく、荷造りの忙しなさの中で、忘れ去っていった。

2 “あたりまえ”の当たり前じゃないこと

遠くで波のざわめきが聞こえる。

ルクレールに案内されてやって来たのは、フランスの北方に位置する小さな村だった。晴れた日なら、海の方こうにイギリスを眺めることができるのだという。

十九世紀半ばのフランスと言えば、イギリスより百年遅れた産業を發展させている最中である。

ルイ十四世の絶対王政時にあれほど輝いていたフランスは、まだ統一もかなわないドイツや、建国して間もないアメリカ合衆国に、いつの間にか遅れをとっていた。

とは言っても、社交界で話される言語は相変わらずフランス語で、それなりの職に就きたい者は、まずフランス語を自在に操れなければならぬということに変わりはない。

そういった事情で、ほとんどの学生は学校でフランス語を習う。もちろん、僕もその一人だ。習い始めて数年の僕のフランス語は、フォークスに言わせると、少し『怪しい』らしい。

「大丈夫かい？ いちいち通訳なんて面倒なこと、僕はしないからね。自力でなんとかしてくれよ。だいたい君は英語だってろくに話せないじゃないか」

フォークスが言うには、アメリカ生まれ、アメリカ育ちの僕の英語は、訛っているらしい。

僕自身にはその自覚がないのだが、フォークスが時々その訛りに眉を歪ませ、指摘するのだから、そうなのだろう。

ところで、フランスの近代化政策と言えば、ナポレオン三世のもとで進められたものだが、それは、首都パリの街並みをガラリと変えるものだった。

暮盤の目のように整備された道路は有益的で、少しの隙間なく立ち並ぶ家々は活気にあふれている。二百年先の世にも通じる立派な都市がつくられたのである。

だけど、そんな近代化の波が届いていない場所もある。

どこまでも広い空。一面の麦畑。ひんやりとした風は心地よい。

——じつにのどかな村だ。

ルクレールの別荘だという屋敷の門の前に、僕らを乗せた馬車が止まった。

ポードレール家のパーティーは明晩からなので、今晚はルクレールの別荘に泊まることになったのだ。

僕はすぐに外に飛び出し、青空に向かって両手を伸ばした。大きく伸び上がる。

「はあー。空気が澄んでいて気持ちがいいな。本当に良いところじゃないか」

笑み満面で馬車の方に振り返ると、フォークスが気怠そうに降りてくるところだった。

地面に足を着けた彼は、土に靴が埋もれる感触に眉を顰める。

「ロンドンの空気が異常なほど悪いから、余計にそう思うのさ」

ヴィクトリア女王時代のイギリスは、『世界の工場』という地位を得て、最盛期を迎えている。十九世紀は『イギリスの時代』と称されるほどである。

だが、その一方で、工場の煙は大気をひどく汚し、ロンドン市内を流れるテムズ川までも汚染したため、コレラやペストなどの感染病がスラム街に蔓延し、多くの死者を出している。

「こついう田舎でも、たまに来るといいものだろ？」

御者に代金を払い、ルクレールが馬車から降りてきた。

「一つの場所にずっといると、次第に、その場所にあるものだけがあたりまえになってしまう。そうになると、見え方が狭くなってしまう恐れがあるんだ。『あたりまえ』っていうのは、ものを感じさせなくする力がある。例えば、ここで暮らしている者たち。彼らは、この澄んだ空気をあたりまえだと思っている。だからさっきのジャンみたいに『空気が澄んでいて気持ちがいい』なんてことは言わない」

「こんなに澄んでいるのに？」

信じられないと聞き返した僕に苦笑して彼は続けた。

「では、聞くけれど。ジャン、君はロンドンをどう思う？」

「どつって、べつに」

「そうさ。君は何も感じていない。だが、ここの者たちは言うだろうよ。『なんて汚い所だろう。こんな所で暮らすなんて考えられない。ロンドンに住む奴らはいかれている！』ってな」

ルクレールは、何が気に入らないのか、しきりにシルクハットをいじっている。角度を直し被っては、また取るといふ行為を何度か

繰り返す。

「だけど、ジャン。君は自分がいかれていると思うかい？ 暮らせないほど汚いと思うかい？ 思わないだろ？ ロンドンに住んでいる君は、その汚さがあたりまえになっているから、そんなこと思ひもしないのさ。それだからこそ君はこの空気に『澄んでいる』という感想を持つことができた。つまり、この空気が君の『あたりまえ』に反していたから、君の心に残るものとなったというわけだ。人は、自身の『あたりまえ』の領域を越えた時に初めて、何かしらのことを感じるができるのさ」

「なるほど……。だけど、それじゃあ、もしも毎日毎日同じことだけを繰り返して生きている者がいたとしたら、その人は無感動な人間になってしまうってことかい？」

「そうだな。機械のような人間になってしまいかもしれない。だが、毎日同じことだけを繰り返し生きていきたいと願っていても、そうそううまくはいかないものだ。晴れの日もある。やたら霧が多い日もある。その人を取り巻く環境は絶えず変わっていくものだ。だから、無感動な人間など、めったにいない。それでも、まあ、感受性が鈍っていくのは否めないだろうな」

「やっぱり、そうなのかあ」

僕は不安げに息を漏らした。

はたして自分は、無感動な機械人間にはなっていないだろうか。毎日毎日同じことだけを繰り返し、ノルマーをこなすかのようになただだ生きてはいないだろうか。

——近ごろ感動したものはいったい何だっただろう？

必死に思い出そうとして眉間に皺を寄せた僕を見て、ルクレール

は僕の肩を軽く叩いた。片目を、パチン、と閉じる。

「だから、たまにはこういう田舎もいいだろうって言ったのさ」

つい見とれてしまうほどのきれいな笑顔だった。どんな不安だろうと、ぶっ飛んでいってしまうような。だが、すぐに固い顔をつくって僕を見据える。

「『あたりまえ』っていうものは、人それぞれによって異なるものなんだ。ここの者たちがこの澄んだ空気をあたりまえだと思っているのに対して、ジャンはロンドンの汚れた空気をあたりまえと思っている。ほら、少なくともここの者たちとジャンの『あたりまえ』は違うだろ？ それを、あたりまえでないことをしている者たちが、自分には理解できないからといって、『奴らはいかれている』と言ってしまうのはどうだろう？ 汚いロンドンに住む君をここの者たちはいかれていると言うが、君もここの澄んだ空気に何も感じない彼らを信じられないと言う。さて、本当にいかれているのは？ 信じられないのはどちらだろう？ どちらの『あたりまえ』の方が正しいだろうか？」

黙り込んだ僕にルクレールは両腕を広げ、肩を竦めた。

「そんなこと誰にも分からないのさ」

彼は苦笑した。そして、シルクハットの位置を定めると、僕から視線を外し、正面を見据えながら続けた。

「ただ、君はいつも頭の片隅においておけばいい。人それぞれだつてな——それぞれにそれぞれの常識があつて、時には他人とその常識を共有したり、時には違えたりする。そのことを心しておけば、

人付き合いも少しは楽にできる。違う考えを言われても、それに反発するのではなくって、そう言う考え方もあるのかと耳を貸すこと。そうすれば、君の『あたりまえ』を越えた広い世界を知ることができるはずだ」

ルクレールの声は耳に心地よく響く。彼のその声は、たとえ理不尽なことを言っているとしても、聞き手にその通りなのかもしれないと思わせる力があると思う。

ただでさえそんな力があるというのに、彼はその声を使って、本当に自分と同じ年なのかと疑問を抱かせるほどの大人びた話をするから堪らない。

僕はひたすら感心するしかなく、まるで音楽を聴くかのように、ルクレールの話に聞き入っていた。

すると、その時。僕のすぐ横で不機嫌そうな顔をしたフォークスが手にしていたステッキを振り回した。

「いい加減にしたまえ」

トントンと、ステッキで地面を突く。

「いったい、君はいつまで客を門の前に立たせておくつもりなんだい？ こんな所に突っ立っているくらいなら、フランク教授のくだらない講義に出席した方がいくらかましだった」

フォークスの機嫌は最悪で、僕なんて縮み上がっているというのに、ルクレールは、彼を我が儘のひどい子どもくらいにしか思っていない様子だ。

「悪かったよ。疲れたんだろ？ お前はいつも疲れると、他人にあたる。ほら、むくれてないで中に入れよ」

ルクレールは門を開き、フォークスを中に招き入れた。

「今日はゆっくり休めよ。ジャンもな」

門の中には、手入れのよく行き届いた庭が広がっていて、続いて入った僕は思わず声を上げた。

「すごい」

門から玄関まで続く細い道は数メートルほどあり、その両側にはバラが咲き乱れている。玄関を正面に右側に赤バラが、左側に白バラが。まるで絨毯を敷いたようだ。

「すごいだつて？」

僕の溜め息混じりのその声を耳にして、例によって、皮肉屋が口を開く。

「この悪趣味な庭を見てすごいだつて？ ジョン、君も相当な成金野郎らしいな。見る、バラばかりじゃないか」

「バラのどこがいけないんだい？」

そう尋ねた僕を彼は冷ややかに見つめる。口を動かすのも面倒だが、この、物を知らない哀れなヤツに仕方ないから説明してやろうと、わざわざ言葉にしなくとも読みとれるような表情をしている。

「成金野郎はやたら金のかかるものばかりを集めたがる。なぜなら、彼らはしょせん成り上がり者だからさ。見かけだけでも貴族ぶりたいんだ。本当の価値も分らないくせに、金のかかる物ばかりだった

分だけ高価なのだと、買い漁るのさ。ほら、見る。バラは花の中では値が高いだろ。それなのにこんなにも庭に咲かせている。なんて羽振りのいい家なんだろうと思われたいんだよ。そうして自分自身も高価な存在になった、偉くなっただという気になるのさ」

「リシャール。それ、誰のことだ？ 俺か？」

「なぜそう思うんだい？ まだ君だなんて、一言も言っていないじゃないか」

いけしゃあしゃあと言つてのけたフォークスにルクレールは苦笑を漏らす。

「そうは言つが、きれいだろ？ うちの庭師は腕がいいんだ」

ルクレールは辺りを見渡して、ほら、と少し前の方を指した。

「うちの庭師のブリュノとその息子のギヨームだ」

彼らはバラの陰で見えたり隠れたりしていたが、ルクレールが自分たちのことを話していると察し、陰から出てきて頭を下げた。

父親の方はそれだけでまたすぐにバラの中に姿を消したが、息子の方をこちらに駆け寄ってくる。同じ年頃だろうか。親しみやすい感じのする少年だ。

「お帰り、アル」

「ああ、ただいま。ギヨーム、紹介するよ。彼があのリチャード・フォークスだ」

ルクレールはいかにも楽しそうにフォークスをギョームの前に押し出した。

「ああ、あのリシャールだね」

ギョームの方も目を細め、泥が付いた手で口元を押さえている。笑いを堪えているようだ。

「あの、だなんて、君はいつたい僕のどんな悪口を言いふらしているんだ！」

「悪口なんて言わないさ」

「そうそう、違うよ。前に、赤バラの行方を尋ねたら、アルの口から君の名前が出てきたことがあってね。それで覚えていただけだよ」

「ふーん」

納得のいかない顔をしているものの、フォークスの文句は打ち止めらしい。ルクレールは次に僕の肩に手を置く。

「こっちはリシャールのルームメイト、ジョン・コール。——ジョンほど忍耐強い奴はちょっといない。なんたって、リシャールと一日中一緒にいられるんだからな」

フォークスがどんなに睨みつけようと、彼には関係ないようだ。怒らせるようなことを敢えて口にして、楽しんでいるところがある。

「ギョーム、例の物は？」

「明晩、指示通りに」

声を潜めた彼に、ギョームも声を潜めて答えて、父親の元へ駆け戻って行った。少し前から彼を呼ぶブリュノの声が聞こえていたのだ。

二人があまりにも仲が良いから忘れていたが、ルクレールはこの屋敷の主で、ギョームは雇われ庭師の息子だ。

フランスでは、革命後、王や貴族がいなくなり平等になったと言うが、それは単に裕福な者たちのみが言っているだけのことだ。確かに身分制はなくなったかもしれないが、貧富の差がなくなっただけではない。

裕福な者は資本家となり、貧しい者を金で使う。貴族社会が終わり、そのような社会が始まっていた。

金持ちが偉いとは言わないが、雇われている以上、それなりの節度がある。いくらルクレールが気にしていないからと言っても、ブリュノには息子の主に対する馴れ馴れしい態度が許せないのだろう。――それにしても。

先ほどのルクレールの言葉に疑問を感じた僕はすかさず尋ねてみた。

「例の物ってなんだい？」

だが、彼は片目を、パチン、と閉ざしただけだった。



翌朝、大きくあくびした僕の口めがけて、フォークスがパンの欠片を弾いた。

「食事中にあくびはやめないか」

「冗談じゃないよ、フォークス。君が早く目覚めてしまったからって、僕まで叩き起こしたりするからじゃないか。僕はもう少し眠っていたかったのに」

「何だつて？ それでは、君は僕に八時間以上ベッドで眠っていると言っのかい？ 寝過ぎはいけないと言ったのは君じゃないか」

僕は頭を押さえながら、フォークスのがなり声を聞いた。

「それとも何か？ 僕に君が起きるまで、何もせずぼんやりと持っているだけでも言う気かい？」

——ぜひ、そうして貰いたかった。

彼は昨夜、疲れたからと言って早々に寝入り、そのため、今朝は異常なほど早起きをしてしまったのだ。

そして、目覚めているのが自分一人だけと知るや否や、隣のベッドで熟睡していた僕を叩き起こした。

その理由が、朝食と一緒に取ろうと思ったからだと言うから迷惑な話である。

「それこそ冗談じゃないね。僕はお腹が減っていたんだ。だから目が覚めてしまったのさ。君が目覚めるのを待っていたら、僕は飢えて、死んでいた！」

——ハイハイ。これ以上何か言っても、倍にして言い返されるだけだ。もう、何も言うまい。

だからせめて、起きたばかりで食欲がないのと、あくびくらい大目に見て欲しい。

食事を終えた僕らがコーヒーを啜り始めたころ、ルクレールが姿を現せた。

「早いじゃないか」

目覚めたばかりらしく、まだ寝巻き姿である。洗顔もしていなければ、髪もボサボサ。どうやら朝が苦手らしい。これほど怠そうにする彼を初めて目にした。

ルクレールはフォークスの手からコーヒーカップを奪い取ると、それにそつと口付けた。だが、すぐに遠ざける。

「熱っ」

舌を出して顔を顰める彼を、フォークスは嘲笑いながら、彼の手からカップを取り戻した。

「ルクレールが猫舌だったなんて初めて知ったよ」

意外な事実を知った僕は、驚きの声を上げた。

「全然そんな風には見えなかったから、気付かなかったよ。昨晚の食事の時だって」

「あれはひとえに努力の賜物さ。ばれないように振る舞っていたのさ。猫舌っていうのは、甘やかされて育ちましたと風潮しているよ。うなものだからね」

「リシャル」

やめてくれと言いたそうな顔だったが、フォークスの口を塞ぐような言葉を言うつもりはない。それなら僕としては、ぜひ話の先を聞いてみたい。

「それはどうということだい？」

「何、単純なことさ」

フォークスの方も僕が聞き返してくるのを待っていたようだ。機嫌良く、楽しそうに答えてくれる。

「猫舌っていうのは、長男長女、一人っ子に多い。大抵の親は、初めての子どもほど喜んで世話をするだろ？ 何かとすぐに手を出したがる。熱いご飯などは息を吹きかけてよく冷ませてから与えたり。そうやって幼い頃、熱いものを食べさせられなかった者が猫舌になる。慣れないものは受け付け難いってことだ。熱いものに免疫がないのさ、彼らには。——世間の汚いことを教わることなく育てられた子どもが、大人になって世間に出た時に、その醜さに絶望するのと一緒に。それはまた、予防注射をしなかったために病気にかかる

のと同じこと」

何だか、昨日のルクレールの話に似ている気がした。

自分にとって『あたりまえ』でないものと出会った時、それをすぐに受け付けられないのは、そのものに対する免疫がなかったからなのかもしれない。

幼いうちに熱いものを口にしていた者は、あたりまえに熱いものを食べることができる。

幼いうちからロンドンで育った者は、ロンドンの空気に疑問を持つことなく暮らしていける。

要するに『あたりまえ』というものは、『慣れ』みたいなものなのかもしれない。

僕が考え事をしている間もフォークスの話は続いていた。彼は飲み干したカップをテーブルの上でくるくると回し、弄んでいる。

「つまり猫舌つていうのは、可愛がられ、甘やかされて育った証拠なのさ。それをアルは必死に隠してきたってわけだ。熱さに耐え、平然を装い振る舞う姿は、唯一知っている僕としては、涙が滲むね」

そう彼は、わざとらしさ見え見えの哀れみの声を上げた。実に楽しそうである。

僕はちらりとルクレールを盗み見た。

つまり、ルクレールがフォークスの飲みかけに手を出したのは、飲みかけならば冷めていると思ったからなのだろう。僕は昨日の紅茶の一件を思い出す。

あの時もそうだ。新しく入れ直したのでは熱すぎて彼には飲めなかったに違いない。

不意に僕はおかしくなった。格好良く、賢く、話し上手で、いつも多くの友達に囲まれている彼の意外な一面だった。

それにしても、フォークスの言い様は、何か僻んでいるように聞

こえた。おそらく、彼は、自分とルクレールの生い立ちを比較してしまったのだろう。

フォークスは両親に可愛がられた記憶がないのだという。彼には人間的に優秀な兄がいて、常に両親はその兄を溺愛していた。

兄が人間的に優秀なことに對して、自分は人間的に欠陥があるのだと言ったのは、フォークス自身だ。

人間的にどうのと言うのが、僕にはよく分からなかったが、名探偵であるフォークスが、幼少時代は普通の子どもでしたというのは信じがたいことだから、おそらく並はずれた子どもで、両親にとっては扱い難かったのだろう。

フォークスの両親は彼を自分たちの手で育てることを拒絶した。そのため彼はフランスで一人暮らす祖母の元で育てられることになったのだという。

彼の祖母は、彼を拒絶こそしなかったが、けして甘やかせてはくれなかったようだ。

その祖母が亡くなり、やむを得ずイギリスに戻された彼は、今度は全寮制の学校に入れられた。彼の家族は、彼が自分たちと共に暮らすことを許さなかったのだ。そうして、現在に至っている。

そんな彼にとって、ルクレールはどんなにか羨ましく思える存在だろう。

彼は何不自由のない、財力のある家に生まれ育った。幼い頃に両親を亡くしているが、莫大な財産が残されていたし、彼の乳母を始め多くの使用人たちが彼を際限無く可愛がってくれた。

その、多くの人に愛され育ったのだろうことは、彼の明るい性格から容易に想像がつく通りなのだ。フォークスが僻みなくなるのも少し分かる気がする。

フォークスは家族の話をする時は、いつも辛そうに笑う。笑うしかないのは彼が家族のことで泣けないからだ。

「泣くと、さらに惨めになる。自分が可哀相だなんて、思いたくない」

と、彼は笑う。

「中途半端にいられるよりも、アルのところのようになっそう死んでいてくれれば、清々しくて良かったのに」

自分を想ってくれない両親に対して、彼のコメントはそれだけだった。

しばらく他愛もない話題で時間を潰していた僕らだったが、少し早めの、ルクレールにとっては朝食兼用の昼食を取り、ルクレール家の別荘を出た。

3 興味がない、それも興味

丘の上に立てられた巨大な屋敷が次第にその姿を現した。僕たちの乗った馬車は高くそびえた門をくぐり、庭園の中を走った。

門から玄関までの距離は、まるで世界の果てから果てへ行くようなものだ。

途中、豪華極まりないバラ園を突っ切り、ようやく玄関に着いた。馬車を降りた僕らを迎えてくれたのは、ボードレール家の執事ジョゼフ・シャルダンという中年男だった。

長身だが、影が薄く、黒いスーツを禁欲的そうに着込んでいるせいもあるのか、暗闇の中に立たれては、どこにいるのかさえ分からないほどである。

ルクレールが彼に招待状を見せると、彼は頷き頭を下げた。

「ルクレール様、ようこそお越しくございました」

だが、すぐに顔を上げ、ルクレールの後ろに隠れるように僕らに細長い目を向ける。

「そちらは、お連れの方ですか？」

「はい、友人のリチャード・フォークスとジョン・コールです」

「さようですか。では、御二方にも客室を用意させていただきます」

シャルダンは近くに控えていた侍女を呼ぶ。

「御二方を東棟の客室にご案内しなさい」

「はい」

ルクレールは顔を顰めた。

「友人たちと近い部屋を用意して頂けないでしょうか？」

「できません」

シャルダンはその言葉をきっぱりと切り捨てた。

「主の命令で、招待状をお持ちの方は西棟の客室を、お持ちでない方は東棟をご用意しております」

西棟と東棟と言えば、もはや違う屋敷だと言えるほど、かけ離れた距離にある。それを行き来しろだなんて。

不安げに見上げると、ルクレールは仕方ないさ、と肩を竦めて笑った。

「荷物を下ろしたら、すぐにでもそっちの部屋に行く。ジャンはともかく、リシャルルは絶対、俺に会いにはるばる来てくれそうにないからな」

そう言っつて、彼はシャルダンの案内で玄関を去って行った。

▲

フォークスと僕が案内されたのは三部屋続きの立派な客室だった。入ってすぐの部屋は居間のようにくつろげる空間となっており、左右それぞれに寝室が設けられている。

その造りは学生寮の二人の部屋と同じだが、広さは倍、いや四倍以上で、家具などは全て比べものにならないほど高価なものだ。

「どうぞ、ご自由にお使い下さい」

「ありがとうございます」

僕らを客室に案内した侍女は、一度、頭を下げて下がろうとしたが、何か思い出したようで付け加え、言った。

「他に何か御必要なものや御用の時には、私、ネリーに何でも言い付けください」

マニュアル通りのことを言い終わると、ネリーはにっこりして、再びペコリとお辞儀をした。

彼女は、僕たちとそうそう変わらない年頃の少女で、まだ慣れていない仕事を懸命にこなそうとしている様子が、何ともかわいらしい。そして、元気滂刺として、気持ちのいい娘だ。

そのネリーが客室から出ていき、その気配が完全になくなってからしばらく、フォークスが不機嫌そうにステッキを振り回し始めた。不機嫌な理由は簡単だ。すぐにでもそっちの部屋に行くと言ったルクレールがちっとも姿を現さないからだ。いったいどうしたのだろつかと思いながら、僕はネリーが入れてくれた紅茶を啜る。

持て余された時間は、じれったいほどゆっくりと過ぎていった。



他者とまったく変わらないつくりのタキシードを着ていても、生まれ持った顔立ちの違いで、まるで違った印象を持たせるものだ。

色白の肌に、漆黒の髪。長身ではないが、明らかに胴よりも脚の方が長い。

そこの少女たちよりも細身で、よほどきれいな顔造りをしているフォークスは、普段から着慣れているかのようにタキシードをうまく着こなしていた。

対して、僕はどう鼻屑目で見ても、似合っていない。

平均的な体型はまず良しとしても、パサパサの茶色い髪や童顔はどうしようもない。しかも、フォークスの隣にいと、彼のいい引き立て役になってしまふのだ。

不服な顔をフォークスに向けた僕だったが、すぐにその顔を凍りつかせた。——と言うのも、彼がある一点を世にも恐ろしい形相で睨み付けていたからだ。

僕はフォークスから素早く目を逸らし、見なかったものとし、彼が睨んでいる先を探した。

するとそこには、真っ白いタキシードを優雅に着こなす少年の姿があった。

まるで王冠でも被っているかのようなプラチナブロンド。サファイヤを埋め込んだかのような瞳。すらりと伸びた背。バランスの良い身体。

なぜ、こんなにも人目を引く存在がこの世に存在するのだろうか。

僕は神の不平等さを呪いなくなった。

この少年の名前をいちいち言う必要はないだろう。アルベール・ルクレール。彼だ。

彼はフォークスの鋭い視線に気付き、着飾った少女たちの熱い視線をその身に受けながら、駆け足で僕らの元にやって来た。

彼が自分の前を素っ気なく通り過ぎてしまうと、少女は物言いたげな表情を浮かべ、そして、悔しそうな、悲しそうな表情を浮かべる。

やはり彼は、鼻屑目でも何でもなく、誰の目から見ても格好いいのだ。僕はため息を漏らした。

だけど、そんなため息など吹き飛ばしてしまうような罵声がすぐ隣から発せられる。

「君は約束も守れない最低な奴だったのか！」

フォークスは手にしていたステッキでドンドンと床を突いた。

「帰る！ 君に振り回されるのはたくさんだ！」

くるりと背を向けたフォークスに、ルクレールは慌てて彼の前に回り込み、押し止めた。

「まあ、待てつて。落ち着けよ、リシャール。言い訳を聞いてくれ」

「言い訳だって？」

疑わしそうな顔をしたフォークスの肩を抱いて促し、僕について来るように目配せをすると、ルクレールはダンスホールの片隅に寄った。

彼は壁に背を預けると、前髪を掻き上げる。

「鍵を掛けられたんだ」

「鍵？」

間抜けに繰り返した僕にルクレールは頷く。

「あの執事、案内した部屋に俺が入ったとたん、ボタンってな。扉を閉めて、鍵まで掛けたんだ。まあ、一応俺はジゼル殺しの容疑者なわけだから、それが当然の扱いだとは思うが」

——当然だなんて！

僕は左右に頭を振った。

容疑を掛けられているだけでもひどい話なのに、部屋に鍵までされても、尚、何てことないようにへらへら笑う彼を、なんだか怒鳴りたくなってきた。

僕は口を開きかけた。だが、僕の耳に怒鳴り声は、意外なところから発せられ、聞こえてきた。

「君は、そんなことが言い訳として通用するとも思っているのかい？ 鍵を掛けられ、閉じ込められていただって？ 君が？ 鍵くらいいんだい？ ぶち破つてでも出て来れば良かったじゃないか。そのくらい君にできないってことはないだろ！」

——む、むちゃくちゃだ！

簡単にぶち破れて、外に出られるような鍵なら、掛ける意味がないじゃないか！

この、フォークスの身勝手な発言に僕は怒鳴る言葉を忘れ、ルクレールに目だけを向けた。

すると、彼はあれだけフォークスにむちゃくちゃ言われたというのに、まだへらへらと笑っているではないか。しかも、実に楽しそうに、嬉しそうに。

だが、さすがの彼も、いつまでもフォークスを不機嫌のままにさせておくのはまずいと思ったらしい。

「ほら、リシャル。あそこを見る」

ルクレールはフォークスの怒りを逸らそうと、壁から背を離し、人々の集まる中心を指さした。

「彼がマルキード・ボードレールだ」

白いものが頭に目立つ、初老の男だった。どんなに立派なものを着重ねていても、やつれ果てた体は隠せていない。こけた頬、骨のような手足はカマキリを思わせた。

「彼の横にいるのは、息子のセルジュ。ジゼルの弟だ。それから……」

ルクレールの目がホールを泳ぐ。そして、他の誰よりも華やかなドレスに身を包んだ女性の元に行き着いた。遠目で見えるが、かなりの美女だ。

「マルキードの妻、リリアーナだ」

「ふーん、彼女が」

「ん？」

何やら納得したフォークスに、ルクレールと僕は怪訝な顔を向けた。フォークスが女性に関心を持つなど、今までにないことだった。僕らの視線に気付いて、フォークスは肩を竦め、苦笑した。

「さつきから、チカチカしたものが動いているな、って思っていたんだ」

——まっ、フォークスのことだ。そんなところだろう。

これが、さつきから美しい女性がいると思っていたんだ、などと言われた日には驚きのあまり凍りつくところだ。

僕がほっと胸を撫で下ろした時、マルキードの隣で客人と挨拶を交わしていたセルジュが僕らに気が付いて、こちらに近付いてきた。

「アル！」

セルジュはルクレールの名前を呼んだ。どうやら彼ら二人は親しい仲らしい。

「来てくれると思っていた」

「当然だ」

手を握り合った後で、セルジュは僕らに気が付いてルクレールに紹介を求めた。

「友人のリチャード・フォークスとジョン・コールだ」

「ああ。彼があ……。僕はセルジュ・ボードレール。こんなパーティーだが、パーティーであることには変わらない。楽しんで欲しい」

そう言うと、セルジュは淡く微笑んで別の客の元へと去っていった。

——こんなパーティー。

確かに、このパーティーは、ジゼルを殺した犯人を捜すためのパーティーだ。そして、死んだはずのジゼルの誕生日を祝うもの。主役のいない奇妙なパーティーに違いない。

ところで、と僕はルクレールに振り返った。

「君の他に招待状を受け取った者は、何人いるのかい？」

「正確には知らないが、数人の顔と名前は把握している。あそこにいる男、アレクサンドル・ロラン。それから、あそこにいる少年、アンドレ・ラマルディヌ。それから、アントワーヌ・ラプラス」

ルクレールは視線だけで彼らを指して、僕に教えてくれる。

それから、ルクレールの視線は少女たちに移動して、アンリエット・ランボー、オーギュスト・ラシーヌの名前を告げる。僕は深く息を吐いた。

——この中に犯人がいるのだとしたら、いったい誰なのだろうか。いや、そもそも本当に犯人なんて者がいるのだろうか。

まずは、夜な夜な歩き彷徨うというジゼルの死因について調べる必要があるのではないだろうか。

不意に、視界が暗くなった。

驚いて辺りを見渡すと、暗くなったのは僕の視界だけではないと分かった。ホール全ての明かりが一瞬で消え、その場、全体が暗くなったのだ。

——なんだ？

おそらく全ての者がそう思い、ざわめき始めた時、何者かが、あ

そこを見ろ、と、そのざわめきを消し去るほどの大声で叫んだ。

声につられるようにして、大きく開け放たれたガラス張りの扉を見る。すると、やけに大きい丸い月と、その光を背に受け佇む長身の男の姿があった。

逆光位置のため、男の顔は全く見えないが、タキシードにシルクハットという正装姿に、足首まであるマントを夜風になびかせている姿が、ぼんやりと見える。

皆が呆気にと取られていると、その男は右手をかざした。とたん、どこからともなく、強い風がホールに吹き込んできた。

バラの花びらが舞う。その甘い匂いと、勢いよくと舞う白い花びらに思わず目を閉じる。

—— いったいこれは何の余興だろう。

その場にいた者たちは皆、おそらくマルキード以外の者たちは、これはきつと屋敷の主が用意させた余興に違いないと思っていた。

だが、皆が再び目を開けた時、先程の男の姿はなく、他に何が起こるわけでもなかった。

静まりかえったホールによやく明かりが戻った。磨き抜かれたホールの床に散りばめられた白い花びらが妙に鮮やかに、眩しく目に飛び込んできた。

—— いったい何が起こったのだろうか？

僕が眉を歪ませながらフォークスを振り返ると、彼は肩についた花びらを不機嫌そうに振り払い、顎で上を指した。

見ると、花びらとは違う白いものがヒラヒラと空を舞っている。

—— 紙？ カードだ！

僕はそれを目で追った。それはゆっくりとマルキードの足下に落ちていく。マルキードは怪訝な顔で、それを拾い上げ、そして叫んだ。

「なんだと！」

その叫び声で今晚のパーティーは、急遽、お開きとなった。

4、『大』がつくと、一味違う

客室に戻ったフォークスと僕は、ネリーに入れて貰った紅茶を飲みながら、それぞれの表情を付き合わせていた。

「いったいどうしたって言うんだらう？」

ソフォーに深く座り、眉をひそめた僕は腕を組んでいる。

「あのカードに何が書いてあったんだらう？」

君には分かるかい？ とフォークスの方に目をやると、彼は、何がそんなに気に入らないのか、相変わらずムスツとしていて。

しかも、僕の問いに答えようとする様子がない。こんな時は何を言っても仕方がないので僕も黙っていることにした。

しばらく重たい沈黙が続いたが、それは、不意にドアがノックされる音で破られた。横目でフォークスを見やると、彼は僕が応じるのが当たり前だというように微動だにしない。

しかたなく、僕はドアの外に向かって返事をし、開けてやった。

「失礼致します」

廊下にいたのはネリーだった。

「あのお。フォークス様は探偵だと伺ったのですが、本当でしょうか？」

その唐突な質問に僕は一瞬言葉を失った。

「えーと、一応そうだけど……？」

しどろもどろに答えた僕の背に、フォークスのステッキが食い込む。

「一応とは何だ。僕は立派に探偵だ！」

自分の話題だと気付いて、思考の世界から帰って来たらしい。フォークスは腰に両手を当て、少し首を傾げて僕の背後に立つ。

——立派に探偵って。

背中の痛みとその場にしゃがみ込んで、フォークスを見上げる。微妙に機嫌が治っているのが不思議だ。僕をど突いて、回復したのだろう。いい迷惑である。

「フォークス様を名探偵だと見込んで、リリアーヌ様からお話があるそうです。ぜひ、リリアーヌ様のお部屋にいらして下さい」

リリアーヌ様とは、リリアーヌ・ボードレールのことで、彼女はマルキードの妻だ。先程の華やかなドレスが脳裏に甦る。

『名探偵』という言葉に、更に機嫌を良くしたのか、フォークスはパチンと指を鳴らした。

「伺いましょう」

ネリーはあからさまにホッとした。

では、こちらにいらして下さい、と言って、フォークスをリリアーヌの部屋に案内する。当然、僕もついて行く。

フォークスを名（！）探偵と見込んで話があるといえば、それは事件の始まりを告げる。野次馬ジョン・コールが黙っているはずがないのだ。



「お連れしました」

ネリーに促されてリリアーヌの部屋に入ると、背後で扉が閉まる音が聞こえた。振り返ると、ネリーの姿がない。どんな些細な音も漏らすまいとする扉が固く閉ざされていた。

「お待たせして申しわけございません。僕がリチャード・フォークスです」

僕にしてみれば不気味でしかないような笑顔で彼は部屋の主に深々と頭を下げた。

リリアーヌはパーティーで着ていたドレスとは違うが、やはり華やかな服を身に付け、ソファにゆったりと腰掛けていた。

僕らの姿を認め、夫人はゆったりとソファから立ち上がった。

「そう、あなたが噂の名探偵さん？ 思っていたよりもずいぶんお若いのね」

フォークスを品定めするかのように上から下までジロジロと見回す。

「噂と言いますと？」

フォークスはそんな彼女の視線を無視する。彼女は再び腰を下ろすと、フォークスにも自分の向かいに座るように勧めた。そこで僕の存在に気付く。

「そちらは？」

「彼は僕の友人で、優秀な助手。ジョン・コールです。彼も同席して構いませんか？」

フォークスに優秀な助手だと言われて、僕は恥ずかしいやら、照れくさいやらだったが、僕の存在の有無などリリアーナにはあまり関係がないらしい。

「どうぞ」

短い答えを貰って、僕はフォークスの隣に座った。フォークスが先程の質問を再び繰り返した。

「自分がフランスまで伝わるほどの探偵だなどとは思えないのです。失礼ですが、どなたから僕のことをお聞きになったのですか？」

「息子の良き友人、アルベール・ルクレールからです」

ぴきつ。

フォークスの表情が怖いように固まる。

「アルベールは、よく我が家に遊びに来てくれるものですから、気

心が知れていて、わたくしにとって息子同然ですの。その彼が優秀な探偵と言ったあなたを信頼してお願いがあります」

フォークスはガリガリと頭を掻いた。

「いいでしょう。ご用件をうかがいます」

そう、フォークスが承知したにも関わらず、夫人は妙な沈黙をつくった。彼女はこの期に及んで、この若すぎる探偵にすべてを任せ、良いものが迷っているようだ。

いくら息子同然のルクレールに『名探偵』だと言われていても、実際目の前にしているのは十六歳の少年だ。迷うのは仕方ない。

そして、その、依頼者の迷いはいつもフォークスを不快にさせる。

「ジョン。君の小説の中の僕だったら、こんな気持ちになることはないのだろうな」

この後、何度となく彼はそうぼやくことになるが、この時の彼は、まだおとなしく沈黙に耐えていた。

「実は」

意を決し、リリアーヌが話し出す。

「予告状が届いたのです」

「予告状？」

「ええ、先程のパーティーの最中に」

——まさか。

僕は思わず息を呑んだ。そうして、思った通り、マルキードに大声を上げさせたカードこそリリアーナの言う予告状だったのだ。

「これを」

夫人が差し出したものをフォークスが受け取る。僕もそれをのぞき込むと、そこには『十五日の晩、海の娘たちの涙を拭いに参上します。その際は凍りついた時間を解かして見せましょう。怪盗R』と書かれていた。

「怪盗ローズ！」

気が付くと僕は大声を上げ、立ち上がっていた。

「なんだいローズって？」

座れとフォークスは僕の袖を軽く引く。さすがに一人大騒ぎしすぎたと思い、僕はすぐごと席に着いた。だけど、この興奮は収まりそうにない。

「知らないのかい、フォークス。今、フランスを騒がせている大怪盗だよ」

「へー、大怪盗ねえ」

『大』というところに強いアクセントをつけてフォークスは僕の言葉を繰り返した。

「だが、ジョン。本人は『R』と名乗っているじゃないか。それを

勝手に『ローズ』と改名するのはどういいう見だい？」

「知らないよ、僕が名付けたわけじゃない。だけど、案外、本当に『ROSE』の『R』かもしれないよ。だって、彼は毎度予告状にバラを添えていくんだ。今回だってバラの花びらが添えられていたじゃないか」

「あれは添えられたんじゃない。ばら蒔かれたんだ。まあ、それは後で直接本人に聞くとして……。ボードレール夫人、少しお尋ねしますが、この予告状の内容に心当たりはありませんか？ 怪盗は一体何を目的としているのでしょうか？」

怪盗からの予告状であるからには何かを盗むと言うことを記してあるはずなのだが、『海の娘たちの涙を拭いに来る』では、不明確過ぎて何ことだかさっぱりだ。

リリアーヌは唐突に口を開いた。

「あなた、セイレーンをご存じ？」

「え？」

フォークスが僕を振り返る。それを受けて、僕は夫人に向かって頷いた。

「ギリシア神話でてる、あれですよ。海神フォルクユスの娘たちで、美しい声で人を惑わせるとか言う」

「それがどうかしましたか？」

「我が家に『セイレーンの涙』と呼ばれる紫のダイヤがあるのです」

「紫の？ 紫のダイヤなんて聞いたことがない。そんな物が存在するなんて！」

僕の言葉に夫人は深々と頷く。

「実は、私もまだ見たことがないのです。いえ、ですが、確かに我が家にあるのです。きっと夫がどこかに隠し持っているのでしょう」

夫人はフォークスに深々と頭を下げた。

「どうか、お願いします。怪盗の手から『セイレーンの涙』を守ってください」

ところが、フォークスは彼女に冷ややかな目を向ける。

「これは奇妙なことですね。あなたは一度も見たことのない物を必死で守ろうとなさっている」

「それは……」

夫人が息を呑む音が聞こえた。

「夫が不甲斐ないからです。もうご存じかと思えますけど、夫は半年前に娘を亡くしています。名前はジゼルといって、夫が愛人に産ませた子です。ジゼルが死んでからというもの、夫はすっかり鬱ぎ込んでしまつて」

忌々しそくに彼女は口を開いた。

どうやら、ジゼルはリリアーヌの娘ではないらしい。すると、ジ

ゼルとセルジュは異母姉弟ということになるのか。

「夫はジゼルを溺愛していました。我が家の大切な秘宝『セイレーンの涙』をジゼルに渡した程です。けれど、ジゼルは亡くなりました。おそらく『セイレーンの涙』は夫の手元に戻っているはずですよ」

いいでしょう、と、フォークスが立ち上がる。

「お受けしましょう」

つられて夫人も立ち上がり、頭を下げた。

「よろしく願います」

少し遅れて僕も席を立つが、それにしても、どうも腑に落ちない。怪盗Rは、有るか無いかもはっきりしないダイヤを、はたして盗めるのだろうか？ リリアーヌでさえ、その在処を知らないと言うのに。

そして、フォークスはダイヤを無事守り抜くことができるのだろうか。

—— いったいどうやって？

あっさりと依頼を受けてしまったフォークスの計り知れない横顔を見ながら、僕はため息をついた。

リリアーヌの部屋を出て、ネリーの案内で用意された客室に戻る
うとした途中、何人かの警官と擦れ違った。

「あれは？」

「セルジュ様が呼ばれたようです」

窓の外に目をやると、さらに大勢の警官がいる。

「ずいぶんと大げさな警戒態勢じゃないか」

『セイレーンの涙』がほど大切な物だということと、怪盗Rの
凄さが分かる。

紫のダイヤという世にも珍しい物は言うまでもなく、怪盗Rは未
だかつて失敗のない大怪盗だと聞く。これくらい当然なのかも知れ
ない。

そんなことを思っていると、不意に僕の視界が陰った。

「貴方が探偵さんかね？」

ガラガラ声が頭の上から振ってきて、僕は驚き、見上げる。ヨレ
ヨレのスーツをきた大男が僕の目の前に立ちはだかっていた。

「いえ、探偵は彼です」

びくつきながらフォークスを指すと、彼はギョロリとフォークス
に目を移す。

「ほほう。これはまた、ずいぶん若い」

「どちら様ですか？」

人前では猫を被るようにしているフォークスは、恐ろしいほどさわやかに尋ねた。

「おっと、これは失礼。自分はドルー工警部であります」

そう言っ て形通りの敬礼をすると、彼は髭の伸びかかった顎に手をやり、ジヨリジヨリ触りながら、再びフォークスを上から下まで無遠慮に眺めた。

何でもドルーエとかいうこの男は、怪盗Rを追いつけて早四年、彼からの予告状と聞けばフランスの端から端まで、何が何でも真つ先にすつ飛んで行くという執念の持ち主だ。

今や、『怪盗R』と言えば『ドルー工警部』と言われるほどだと聞く。

「いやー、しかし、本当にお若い。おいくつですか？」

「怪盗を捕まえるのに、僕の年齢を知る必要がありますか？」

「いやいや、必要ありませんなあ」

彼は誤魔化すようにガハガハと大声で笑った。明らかにフォークスのことをよく思っていない。何も知らないガキは引っ込んでいろう、とでも言いたげである。

「ボードレール夫人に何やら依頼されたようだが、怪盗は自分がこの手で捕まえるんで、まあ、貴方の出番はないでしょう。怪盗Rのことはお気になさらず、パーティーを楽しんでくれていて結構ですぞ」

——なんて失礼な刑事なんだ。フォークスの名探偵ぶりを知りもしないくせに！

ぶん殴ってやりたい衝動をなんとか抑え、さぞかし怒っているだろうと思われたフォークスを横目で確認した。だが、以外にも彼は僕よりもはるかに冷静であった。

「では、僕がパーティーを心の底から楽しめるように、警部の方針をお聞かせ下さい。どのように怪盗を捕らえるのですか？ ダイヤの在処はご存じなのでしょう？」

フォークスがそう尋ねると、ドルーエの笑顔は急激に凍りついた。だが、それも一瞬で元通りの自信に満ちた顔に戻った。

「ダイヤの在処？ そんなもの知る必要はない！ 怪盗R、奴を捕まえさえすればいいのだ。奴が現れたところ、そこがつまりダイヤの在処。奴さえ捕らえればダイヤも無事。万事解決だ！」

再び豪快に笑い出したドルーエに、ほとほと呆れる。

確かに怪盗Rさえ捕まえられれば万事解決かもしれない。だが、どうやって？

怪盗Rは十五日、つまり三日後と日付は指定してきたが、時刻までは明確に指定していない。晩とだけ、曖昧に記したのみだ。姿を現す場所についてだって、ダイヤの所在が分からなければ分からない

いではないか。

それでは、捕まえられるものだって、捕まえられっこない。

この広い屋敷中を一晚中監視し続けるなど、不可能に近いだろう。それより、ダイヤを探し出し、ダイヤを見守り続ける方がよほど効率的ではないか。怪盗Rは必ずダイヤを盗みに、ダイヤのある場所姿を現すはずなのだから。

5 死後六ヶ月も経てば、きっと

ボードレール家での長い夜が明けた。これから怪盗が現れるという屋敷で、ぐーすか眠れるほど僕の神経は太くなかったのだ。

大きすぎるほど大きく口を開けて、僕はパンを口の中に押し込んだ。

だが、今朝に限っては、あくびを隠すためのそんな下手な芝居など必要ないようだ。

コトンと、フォークスの手からスプーンが抜け落ちる。彼は彼で色々と考えることがあつたらしく、眠れぬ夜を過ごしたらしい。

「フォークス」

「んー？」

目を開けるのも辛い。声を出すのも苦労だといった感じである。昨日の仕返しにパンの欠片でも投げつけてやろうかと思つたが、さすが思い止まった。

フォークスの頭がちゃんと機能し始めたのは、朝食を終えてから更に二時間が経過した後だった。

よしっと、突然言い放ち、勢いよくソファから立ち上がった。

「ジョン、ジゼルに会いに行こう」

「え？」

「僕は初心に返ることにしたよ。そもそも僕は、ジゼル殺しの犯人を暴きに來たんだ。それなら、まずジゼルの遺体を調べに行くべき

だろう」

「ちよつと待つてよ、フォークス」

今にも飛び出して行つてしまいそうな彼を僕は慌てて止める。

「確かにジゼルの死の真相を暴くのも大切だよ。ルクレールの無実証明がかかっているからね。だけど、怪盗Rはどうするつもりだい？　彼が現れるのは十五日だよ。あと二日しかない。君はボードレール夫人の依頼を受けてしまったじゃないか。ダイヤを守るって。一刻も早くダイヤを探して、怪盗Rに備えないと……」

そこまで言つて僕は、はたと考えた。

「フォークス、君は、怪盗Rと対決できることに、わくわくしていないのかい？」

「わくわくだつて？」

「怪盗Rはフランスーの大怪盗だ。もしも君が彼を捕らえることができたなら、それほど凄いことはないよ」

目を輝かせている僕をフォークスは軽く鼻で笑つた。

「凄いものか、怪盗Rなんて、その気にさえなればいつだつて捕まえられる」

さらりと大事を言つてのけたフォークスは、それに対する言葉を僕に言わせる余地もなく、さっさと部屋を飛び出した。慌てて僕も後を追う。

「ジゼルの遺体は彼女の寝室にあるらしいよ。死後六ヶ月の遺体だからね。見て倒れるなよ、ジョン」

怪盗Rの話題よりも死後六ヶ月の遺体の話の方がよほど楽しいらしい。

フォークスは満面の笑みを浮かべていた。

自然、歩みも早くなる。ジゼルの部屋に着く頃には、もはや早足だった。



彼女の部屋は主を失ってからというもの誰の手にも触れられず、半年前の状態のまま時が止まっていた。

生前のジゼルの世話をいっさい任されていたという侍女がフォークスとジョンの姿を見つけて軽く頭を下げた。

「僕はリチャード・フォークス。探偵です。ご遺体を見せて頂いてもよろしいですか？」

フォークスは口の利き方さえ何とかすれば、きれいな顔のおかげで、良家の坊ちゃんに見えないこともない。

侍女——イレエヌはいとも容易く承知してくれた。

彼女は僕らをジゼルの寝室に招き入れた。部屋の中央に大きなガラスケースが置かれている。

「あれが……」

「ジゼル様です」

なぜか小声で尋ねると、イレエヌも小声で答えた。

近づく足もなぜか忍ばせる。どんなに小さい物音も、この部屋の空間では鐘の音以上によく響きそうだ。

——大きな音を立てたら、ジゼルが起きてしまう。
なぜか、そんな気がした。

遺体を前にして尻込みする僕に対して、フォークスは真っ直ぐガラスケースに近付き、無遠慮に中をのぞき込んだ。

とたん、彼の口から、息が漏れる音が聞こえる。

僕も覚悟を決めてケースをのぞき込む。

まさに蠟人形のようなであった。

これまで遺体というモノをいくつも見てきたわけではないが、知る限りの遺体とは似ても似付かないそれは、生きていた者が死んだと言ふよりも、元々生きていなかったモノのようだった。

蠟で塗り固められた肌は不気味に白く、冷たそうで、いかにも無機的だ。艶を失った金髪はごわごわになって首回りに固まっている。

「イレエヌ、ジゼルの死について聞かせて下さい」

フォークスはジゼルから目を逸らさずに言った。まるで貴重な遺跡でも目の前にしているかのように、遺体を観察している。

「半年前、私がジゼル様のお部屋に伺いますと、ジゼル様が床でお休みになられていて、側にグラスが落ちていました。様子がおかしいと思い、ジゼル様に声をお掛けしたのですが、その時すでにお亡くなりになっていました」

「つまり、貴女が第一発見者なのですね？」

「はい」

「グラスはどこに？」

「すでに片付けられています。割れていましたから。おそらく、その中に毒が入っていたのではないかと言われています」

フォークスは唇に人差し指を当てて考え込む仕草をした。小さく唸る。

「亡くなった時もこのドレスを着ていたのですか？」

豪華なドレスだ。眩しいほどに白く、所々に金糸で刺繍がしてある。普段着には相応しいとは思えない。

思った通り、フォークスの問いにイレエヌは首を横に振った。

「では、亡くなった時に着ていた服を見せてください」

フォークスは推理を楽しんでいる様子だ。僕はルイーズの遺体から目を離し、隣で満面の笑みを浮かべているフォークスを見て肩を竦めた。

不機嫌な顔をされるよりむしろ、遺体を見て喜んでいるというのは人として少し問題だと思う。

しばらくして、イレーヌは薄緑色の服を持ってきた。

「これです」

そう言つて、ドレスを差し出すイレーヌの顔はなぜか怪訝そうである。

「何か？」

「首の後ろの辺りに、染みができているのです。前、見た時はなかったはずなのですが」

指し示された部分を見ると、彼女の言う通りにコインほどの大きさの染みができている。

「前、見た時と言いますと、ジゼルを着替えさせる時ですか？」

「ええ。汚れたものをそのまま片付けるはありますがありませんから、その時は、確かにこのような染みはございませんでした」

フォークスは彼女からドレスを受け取ると、顔を近付けてその部分を慎重に観察した。そして、一人納得する。

「なるほど」

「何かなるほどなんだい？」

フォークスの場合、聞かれるまで自分から言おうとしないので、僕の方から聞いてやる。

「見たまえ、ジョン。ここに穴があるだろう」

目の前に差し出された服を僕は食い入るようにして見つめた。

——穴？

目を細めると、フォークスの言う通り、染みの中心に穴があることが分かった。ごく小さい穴だ。

「この穴がなんだって言うんだい？」

「これは針の穴だ」

「針？」

妙に自信ありげに断言した彼は、僕が聞き返したことで更に得意げになって説明し始めた。

「ここには毒針が仕掛けてあったのさ。仕掛けた犯人は、針さえ抜き去れば証拠を隠滅できると思ったのだろう。だが、毒は服の生地に着していた。そして、それは半年の歳月をかけて生地を変色させ、このような染みとなって証拠を残すこととなったのさ」

「つまり、フォークス。君は、ジゼルは自殺ではなく他殺で、犯人は毒針を使ったと言いたいのかい？」

僕はイレエヌに振り返った。すると彼女は驚いたことにフォークスに大きく頷き、拳を作った。

「私もジゼル様は何者かに殺されたのだと思います。自殺だなんてそんな罪深いことをされる方ではないのですから」

「けど、毒はグラスの中に入っていたのでは？」

僕が聞き返すと、イレエヌは首を横に振った。

「そうだと言われていますが、科学的に調べられてはいないので」

「なぜ調べなかったんだ。フランス警察も落ちたものだな」

フォークスが鼻で嗤うと、イレエヌは再び頭を左右に振った。

「実は、ジゼル様の死は警察に調べられていません。旦那様がジゼル様は死んでいないと言い張って、警察の介入を拒んだのです」

「なるほど、どおりで。自殺でないことは少し調べればすぐに分かることだ。ずさんな調査どころか、まったく調べられていなかったわけだ」

ふとフォークスは、何か思いだしたような表情をしてイレエヌに振り返った。

「そう言えば、犯人の遺留品があると聞いたのですが」

「はい、懐中時計です」

フォークスの問いにすぐ答えを返した彼女に、彼は怪訝な顔で聞き返した。

「懐中時計？」

どうしたっていうのだろうか。フォークスの顔が急に強張った。

「私は気が付かなかったのですが、旦那様がジゼル様の部屋に落ちていたとおっしゃって……」

「それは、どういう懐中時計ですか？」

「銀色の懐中時計で、裏に『A・L』と刻まれてありました。旦那様が保管されています」

ふーん、とフォークスは鼻を鳴らした。

さっきまでの機嫌の良さはどこへ言ってしまったのだろう。イレヌの前なので、表情こそ笑ってはいるが、明らかに瞳に怒りを宿している。

「長々とすみませんでした。大変参考になるお話でした。どうもありがとうございます」

ぞつとするほど丁寧なお礼を述べ、フォークスはイレヌに深くと頭を下げた。

いったい何が彼の気に障ったのだろうか。ジゼルの部屋を出た僕は、ズカズカと先を歩いて行ってしまうフォークスを必死で追いかけた。

「フォークス、いったい何があったんだい？」

普段なら不機嫌彼はできるだけ放っておくことにしているが、ここまで怒っている彼をさすがに放置することはできない。

「それに、僕たちの部屋はこっちじゃないよ」

いくらボードレル家の屋敷が広くて複雑な造りをしているからと言っても、僕と違い、方向感覚の優れた彼が道を誤るはずがなかった。

「いったいどこに行こうっていうんだい？」

しつこいほどに聞いてやると、フォークスは吐き捨てるように答えた。

「君は先に戻っていてくれて構わなよ。僕は文句を言いに行く」

「文句？ 誰に？」

「この世で一番最低な奴にだよ」

——だ、誰？ まさかとは思うけど。

フォークスの怒りの矛先にいる人物を思って、僕は顔を引きつらせた。

6 隠したわけではなく、話さなかっただけ

嫌な予感ほどよく的中するもので、フォークスが向かった先は、予想通り、ルクレールの部屋だった。

ノックすることなく、けたたましい音を立てて扉を開いた。

「リシャル？」

さすがのルクレールもこれには驚いたのだろう。突然開かれた扉に目を大きくして、手にしていた本を床に落とした。

だが、さすが彼である。すぐにいつもの何でもないという顔を取り戻す。

「リシャル、鍵はどうしたんだい？閉まっていただろ？」

西棟の客室は全部屋外側から鍵が掛けられ、その鍵はシャルダンが持ち歩っている。

「丁重にお借りしてきた」

フォークスはそう答え、何の断りもなくソファに腰を掛けた。

——正しくは『丁重に』奪い取ってきたのだ。

血相を変えて乗り込んできた彼に、シャルダンは鍵を渡さざるを得なかったのだろう。

フォークスは背もたれに体を傾けたかと思うと、寝転び、一度ぐつと手足を伸ばしてから、ソファからはみ出ることがないように小さく丸くなった。

その様子はまるで巨大な猫がくつろいでいるみたいだ。

「そうか」

ルクレールは頷くと、図々しいの域を軽く越しているフォークスに呆氣に取られ、立ちすくんでしまった僕を手招きした。

「やあ、ジャン。よく来てくれた」

なんて、涼しげに笑う彼に僕は思わず顔を引きつらせる。

「僕はただフォークスについて来ただけなんだ」

「ん？」

僕が物言いたげな顔を見ると、彼は少し頭を傾けて僕に片耳を寄せた。

「フォークス、君に文句があるみたいなんだ。ものすごく怒っているよ。いったい何をしたんだい？」

そう耳打ちすると、彼は低く呻いた。

「ルクレール？」

「うん。まあ、大丈夫さ。なんたって俺は、リシャルとは長い付き合いだからな。あいつの文句、愚痴、罵声、嘲笑なんて慣れっこだ」

と、苦笑。

あんまり慣れたくないものばかりである。
ルクレールは不安げな顔をしている僕に、再び大丈夫さと片目を

閉じて、ソファに寝転ぶフォークスに歩み寄った。

「リシャール、ソファは寝る所じゃないだろ。ほら、起きろ。ジャンが座れないじゃないか」

彼はそう言いながら、ポンポンとフォークスの頭を軽く叩いた。

——フォークスの頭を叩くなんて！

そんな恐ろしいことができるのは、おそらく彼くらいだろう。僕はもちろん、例えフォークスの両親だってできやしない。

しかも、彼はよりによってフォークスの機嫌が最上級に悪い時にやってのけたのだ。これは凄いとしか言いようがない。

ルクレールに言われたように体を起こしたフォークスは、やや上目遣いに彼を見つめた。

文句があるらしいのだが、いつこうにその文句を言う様子がない。ふいつとルクレールから目を逸らす。俯いた黒い瞳は何か考え込んでいるようだ。ルクレールはフォークスと視線を合わせようと床に膝を着いた。

「リシャール？」

どうかしたのか？ と彼が顔を覗き込んでやると、ようやくフォークスの口が開いた。

「アル」

フォークスは俯いたまま声を発した。

「今、何時だい？」

「え？」

突然の問いにルクレールは動揺する。いや、その動揺は、突然の問いだからだけではなかった。

「時計なら、その棚の上にあるだろ？」

「君はいつも上着のポケットに懐中時計を入れているだろう？　ちよつと見せてくれないか？」

「時計なら、そこにあるじゃないか、リシャール」

後退ったルクレールの腕をフォークスが掴む。それは一瞬の出来事だった。

フォークスの手から逃れようとしたルクレールが身を翻すより早く、フォークスは彼の上着のポケットから懐中時計を抜き取ったのだ。

そうしてフォークスは、自分の片手にすっぽりと収まった懐中時計をじつと眺めて、ため息をついた。

「僕が君にあげた物じゃない」

「リシャール、これにはわけが……」

「この懐中時計も銀色で、よく似ているけれど、僕があげた物は裏側に『A・L』って、君のイニシャルが刻んであった。僕が刻んだんだ！」

フォークスは手にしていた懐中時計をきつく握り締め、その拳を振り上げた。そして、

「これじゃない！」

と言い放ち、投げ捨てた。

懐中時計は、壁に打ちつけられ、無惨にも床に転がる。

これほどのひどい仕打ちを受けて壊れていなかったら奇跡だろう。

——何も投げることはないだろうに。

ルクレールはゆっくりとした動作でかがみ、時計を拾い上げた。

やはり時が止まっている。

「ぜひ聞かせて貰いたいね。僕があげた時計はどこにあるんだい？」

「……」

フォークスの問いにルクレールは口を閉ざした。

——ま、まさか！

その様子を見て、僕は血の気が引く。

——まさか犯人の遺留品である懐中時計というのが、ルクレールの懐中時計なのでは？ ということはジゼル殺しの犯人は、ルクレール？ そんな馬鹿な！

おろおろと二人を交互に見比べていると、二人はほぼ同時にため息を付いた。

「とりあえず座って話さないか？」

「そうだな」

フォークスは先程寝転んでいたソファに腰を下ろし、ルクレールも向き合うように座った。

「ジョンもそんなところに突っ立っていないで、座ったらどうだい

「？」

「う、うん」

言われるままに僕がフォークスの隣に腰を下ろしたところで、ようやくルクレールが重々しく口を開いた。

「どこにあるかって？ もう、分かっているんだろ？ ジゼルを殺した犯人の遺留品と言われている物が、俺の懐中時計だ。リシャールから貰った、あの懐中時計だよ」

「なんで。まさかルクレール……」

ルクレールが犯人なのか、という言葉を読み込んだ僕に向かって、ルクレールは首を横に振った。

「俺じゃない」

「じゃあ、なんで？」

——なぜ、常に上着に入っているはずの懐中時計が犯人の遺留品にされているのか？

僕は黙り込んでいるフォークスの代わりにルクレールを問い詰めた。

「ジゼルが殺される一週間くらい前、俺は彼女に呼ばれてこの屋敷に来たんだ。その時に奪われてしまった。彼女は初め、ほんのおふざけで、俺から懐中時計を取り上げたんだ。彼女は、俺がその懐中時計を大切にしていることを知っていたから、それを取り上げたら俺がどんなに困るか興味があったんだろう。そうして、俺が彼女の

予想以上に困り果て、返してほしいと懇願するものだから、おもしろくなつたのさ。もっと困らせたいと、ある条件を出してきた」

ルクレールはそこで一度言葉を切り、前髪を掻き上げた。

「返して欲しければ、俺に懐中時計をくれた人物を連れて来い、つてな」

「フオークスを？」

「リシャルルのことをジゼルに話したことはない。だが、この世で一番大切な奴から貰ったと言つてあつた。だから、恋人から貰ったものだと勘違いしていたのかもしれない」

——大切。この世で一番大切な奴。そんな風にルクレールはフオークスのことを思っていたのか。

ルクレールはさらりと言つてのけたが、なんだか愛の告白を盗み聞いてしまったようで、僕は照れてしまう。

この世で一番大切な奴だなんて、普通、そうそう簡単には言えない。しかも、友人に対して。

「貰つた懐中時計を奪われたなんて言えば、リシャルルは激怒するだろ？ うまくばれないようにリシャルルをここに連れて来るにはどうしたものか、考えているうちに、ジゼルが殺されてしまったんだ。しかも、事もあるうか、俺の懐中時計が犯人の遺留品として扱われている。本当に、どうしようかと思つたよ」

困り果てた顔をして見せたルクレールにフオークスは穏やかに微笑んで言い放つた。

「どうしようかって、盗めばいいじゃないか」

さっきまでの怒りはどこにいつてしまったのか？

やはり、『この世で一番大切な奴』という発言が効いたのだろう。彼の機嫌は著しく良くなっている。

「奪われた物は奪い返せばいい。だいたい君は人の物を奪うことにかけては一流じゃないか。盗めばいいのさ」

しかし、言っていることは相変わらずむちゃくちゃである。

——盗めだなんて、できるわけがない。だいたい親友に犯罪を勧めてどうする！

だが、ルクレールはフォークスの言葉に平然と頷いた。

「俺も考えたんだが、ジゼルは友達だからな。友人の物を盗むほど俺は落ちてはいない」

「ああ、そうか。君は自称『紳士的な怪盗』なんだっけ。そこの盗人とは違う。誇り高き怪盗ってわけか」

「そうさ、ぜひ『怪盗紳士』と呼んで貰いたい」

「それで？ ジゼルが死んでしまった今、どうするつもりだい？ まさかジゼルの死体に向かって僕を紹介するつもりじゃないだろうね。君のことだから当然知っているとは思っけど、今、懐中時計はマルキードが保管しているらしいよ。彼からなら盗めるだろ？」

「できるだろうけど、そう簡単な話でもないんだ」

「ダイヤを盗むのと、どちらが、骨が折れるかい？」

「それはもちろん、時計の方さ」

いったい何の話をしているのだろう？

どうしたわけか、僕は気が付くと、話の流れからおいていかれていた。

よく意味が分からない。

「フォークス、ルクレール、ちょっと待ってよ。二人の話を聞いていると、なんだが、ルクレールが怪盗をやっているように聞こえるんだけど？」

遠慮気味にそう尋ねた僕に、フォークスは信じられないといった表情で振り向いた。

「そう聞こえなかったのなら、君の耳がおかしいんだよ」

「え？」

——意味が分からない。

僕は深く考えることをやめ、自分の耳に聞こえてきた通りに聞き返した。

「つまり、ルクレールは怪盗だってことかい？」

「そうさ」

——そうさ、って。

僕はルクレールを見つめ、少し目を閉じて、再び彼をじっと見つ

めた。やがて、先程ブチ切ってしまった思考回路が復活した。

——なんだって？ まさか。

本当に？ と顔を引きつらせながら尋ねると、ルクレールはいともあっさり頷いた。

「えっ、えっ、ええっ、えーっ」

僕の慌てぶりに大満足したフォークスは、初めて合わせる人を紹介するかのように、僕に顔を向けたまま、ルクレールの方に手をかざした。

「ジョン、紹介するよ。彼が、あの、人騒がせな怪盗Rだ」

——う、嘘だ！

絶叫寸前をなんとか堪える。

——まさか、ルクレールが。そんな！

恐る恐るルクレールを振り返ると、今度も彼はあっさり頷く。

だが、そう簡単に信じることなど、僕にはできなかった。たとえば本人がそうだと言っても、よりによって怪盗Rだ。あのルクレールが怪盗Rだなんて、誰が信じられる？

僕は二度ほど深呼吸して落ち着きを取り戻すと、改まって彼に問い直した。

「だけど、マルキードに予告状が届いた時、ルクレールは僕たちと一緒にいたじゃないか」

——そうだ。確かにあの時、怪盗Rの影を見た。月を背に、マントを風になびかせ佇む男の姿を、僕はフォークスやルクレールと共に見たのだ。

僕たちと一緒にいた彼が、あの大きな窓の外から予告状を放った

怪盗Rのわけがない。

だが、僕の問いに答えたのは彼ではなく、肩を竦めたフォークスだった。

「だから、あれはギョームだったのさ。怪盗Rって言うのは、アルを中心とした盗人集団だからね。ルクレール家は代々盗みをして栄えてきた家なんだ。当主から使用人の端くれまでみんなグルだよ。まったく根深いつたらないよ」

そう言えば、と僕が思い出したものは、昨日のルクレールとギョームの会話だ。

——ギョーム、例の物は？

——明晩、指示通りに。

つまり、あの時の『例の物』というのは、怪盗Rの予告状だったのだ。

「ジョン・コール君、納得して頂けたかな？」

ふざけたように言ったフォークスに不本意ながら僕は頷いた。

僕のそんな様子にフォークスは満足そうに微笑み、ところで話題を変えた。

「アル、君に聞きたいことがあるんだ」

「ん？」

「怪盗Rの『R』ってなんだい？」

それは昨夜、フォークスと僕の間で宙ぶらりんになった疑問だった。

あの時、僕は、直接本人に聞いてみようなどと言ったフォークスにほとほと呆れたのだが、今になってみれば、それもフォークスにとって不可能なことではないということが分かった。

そして、まさに今、それが実現している。

「いきなりだなあ」

ルクレールは困惑した表情を浮かべながら前髪を掻き上げた。

「ジョンがね、ROSEのRだって言うんだ」

「ああ、世間ではそう思われているらしいな」

「世間では？ ほら、やっぱり違うじゃないか、ジョン」

威張りながら振り返ってきたフォークスに僕は少しムツとする。

「それじゃあ、ルクレールのRってわけかい？」

ルクレールに直接尋ねるが、彼は首を振った。

「バカだな、ジョン。ルクレールのスペルはLECLERCだ。やつぱり君のフランス語はなってるない」

冷静になって考えれば、分かったことだ。それをフォークスに指摘されて僕はカチンとなった。

「じゃあ、なんなんだい？」

僕にしては少々乱暴な口調である。するとルクレールは頭を少し

傾けて、口元に手をやり、考える仕草をする。

ちらりとフォークスを見る。

「それは、やはり、Richard・FawkesのRだろ」

彼はにやけた笑いを漏らした。

——なんだって？ リチャード・フォークスのRだって？

その答えは十分疑わしく思えたが、案外本当にそうだったのかも知れない。彼が怪盗Rだと知ってしまったて、今までの彼がなんだか信じられない気がする。

自分が見知っている彼は、まさに氷山の一角に過ぎないのだ。

掴み所がなくって、どこまでが本気で、どこからが冗談なのか分からない。誰よりも正義に近いと思っていた彼が、まさか怪盗Rだったなんて。

僕は、フォークスに自分の名前を勝手に出すなと責められているルクレールを横目に、ゆっくりと頭を左右に振った。

7 無知でもいい。探求心があれば。

こちらの部屋の方が居心地が良いというわけではなく、単に自分たちに与えられた部屋に戻るのが億劫で、フォークスと僕はルクレールの部屋で昼食を取った。

そして、今、僕の視線の先には、くつろぐフォークスとルクレールの姿がある。

ソファに寝転んで新聞を読んでいるフォークス。その向かいでは、ルクレールがコーヒーを片手に、きちんとソファに座って本を読んでいる。

何とかという哲学者の本らしいが、興味のない僕には作者名でさえ記憶できないし、当然内容もさっぱり分からない。それを娯楽本と変わらない感覚で読めちゃうルクレールは凄い。

学友たちで、時計や腕輪同等のアクセサリーのように、やたらめたら分厚い哲学やら経済学やらの本を持ち歩いている者がいるが、ルクレールは彼らとは違った。

そういった本を持ち歩くことで自分を賢く見せようとしている彼らの中でも、まだマシな者たちもいるが、彼らともルクレールは違う。

まだマシな者たちは、それらの本に目を通して、さも分かったような素振りをし、同じようなレベルである者たちを集い、意味不明な討論を始める。

その中でも最もタチが悪い者となると、わけが分からないことこそ哲学なのだと、筋も何もない意味不明を追求したような本をめ得太く出版してしまう。ルクレールはそんな彼らとは違うのだ。

どう違うのか、それについて僕に言い表せる言葉はないが、とにかく彼は本をアクセサリーにしないし、内容だってちゃんと把握し

ている。その証拠に、彼が本の内容を噛み砕いて説明してくれると、僕にだって理解できる。

不思議なもので、あの堅苦しい文章が彼の口から飛び出るとなぜか興味深い話になってしまう。おそらくそれは、きちんと内容を把握していない者でなければできないことだろう。

また何よりも、分からないから教えてくれと頼まれて、すぐに教えることができるのも、彼が本当に内容を理解している証拠だ。

本をアクセサリー代わりにしているような者たちだとそうはいかない。分からないことを軽蔑し、

「あの本を読まないからだ。なぜ読まなかったんだい？ ぜひとも読むべきだよ」

と言って、明確な答えをくれない。

だから僕は『分からない』と言う相手を選んで言っている。もちろん、それは家族や尊敬する教授、そしてフォークスとルクレールだ。

家族はもちろん、教授に限っては大抵の場合、逆に質問してやると大歓迎される。

ルクレールは丁寧に教えてくれるし、フォークスも『分からない』と言うこと自体を馬鹿にしたりしない。

「分からないことを分からないと言って何が悪い？ 分からないくせに分かった振りする方が、自分や回りの者に嘘をついているわけだからよほど悪いじゃないか」

そう、彼なら言うだろう。

ただ、フォークスの場合、分からないものを分からないままにしておくことを嫌う。自分自身についてもそうだが、他人がそうして

いても許せない。

そういったわけで、僕は先程からずっと今回の事件について頭を悩ませていた。少しでもフォークに追い付きたい一心だ。

僕の視線に気付いてルクレールが本から顔を上げた。

「どうかしたのか？」

「ちっとも分からなくて」

彼は苦笑した。

「そういう時は声に出して考えた方がいい。相手をしてやるから、俺に話しかけるつもりで今まで分かっていることを言ってみるといいさ」

「分かっていることって言っても…」

僕は僅かに考えて、一語一語選びながら声にしていった。

「半年前、マルキード・ボードレールの娘ジゼルが自殺した。けれど、本当は自殺ではなく、他殺で、服に付いていた毒針によって彼女は死んだんだ」

「毒針？」

「うん。さっきフォークスがジゼルの服に染みがあるのを見付けて、おそらく毒針だろう、って」

「ほお。それで？」

「調べれば他殺だって分かるはずのことなのに、自殺だと片付けられてしまっているのは、マルキードが警察に彼女の死を調べさせなかったから。——そして、半年経って、ジゼルが夜な夜な彷徨い歩いているという噂が流れ、マルキードも突如として犯人捜しを始めた。手がかりは遺留品の懐中時計」

そこに刻まれていた『A・L』という文字に従い、イニシャル『A・L』の者が集められた。

だが、肝心の懐中時計は、実は、死ぬ一週間くらい前にジゼルが奪い取ったルクレールの持ち物。つまり、犯人の遺留品ではなかった。

「ジゼルはマルキードが愛人に生ませた娘で、リリアーナとは血が繋がっていない。セルジュとは異母姉弟だ」

「俺が聞いた話では、ジゼルの母親は彼女を生んだ時に亡くなったそう。だから、ジゼルはリリアーナに育てられた」

「それじゃあ、ジゼルとリリアーナの仲は良かったってわけかい？」

「セルジュが生まれるまではな。実の子ができれば、どうしたってそちらの方が可愛くなる」

「セルジュとの姉弟仲は？」

「良かったさ。ジゼルは弟を可愛がっていたし、セルジュもジゼルの慕っていた」

母親が良く思っていない相手に対して、子も同様に悪く思ってしまうのは、仕方がないことだ。子にとって母親は大きな存在である

し、特に幼い子にとっては絶対だ。

だが、どうやらセルジュはリリアーナの想いに囚われることなく、ジゼルに接していたらしい。

ルクレールが不意にフォークスの方へ目を移した。つられて僕もフォークスに振り返る。

僕らが話し込んでいる間に彼は眠ってしまったようだ。

うつ伏せに寝転んでいる彼の腕はソファから滑り落ち、手にしていた新聞紙はバラバラになって床に散らばっている。

僕もそうだが、フォークスは昨夜ほとんど寝ていない。色々考え事をしていたようで、ずいぶん遅くまで部屋に明かりが灯っていた。寝不足の状態で寝転がっていれば、自然と瞼が落ち、意識を手放してしまうのも仕方ないだろう。

ルクレールはやれやれといった風に頭を横に振った。

「リシャールは人前じゃ絶対寝ない奴だったんだけどな」

「そうなのかい？」

「ああ、人の気配がするとすぐ目が覚めてしまうと言っていた。それに慣れない場所では寝ても、眠りが浅い、って」

「フォークスはそんなに神経質な奴じゃないよ。寮の僕たちの部屋では、どこだつて寝るし。この間は入り口近くで床に転がっていたよ。僕がどんなに揺さぶっても起きないし、放っておくと丸一日は起きないんだ」

「……それ、本当にリシャールの話か？」

「うん、そうだけど？」

「そうか」

ルクレールはフォークスの寝顔を見下ろして苦笑する。

「リシャールの奴、ジャンには相当心を許しているんだな」

心なしか、その声に寂しさのようなものが含まれているように思えた。

——それは、そうだろう。

僕はルクレールからそつと目を逸らした。

以前のフォークスは、友達どころか話し相手さえ、ルクレール以外にはいなかったような有様だった。

人間嫌いもいいどころで、犬や猫はもちろん、その他の動物すべてと植物さえ、側に置こうとしない。

とにかく自分以外の生き物が側にいるということが煩わしいのだ。そんな彼をルクレールがどれほど心配に思ったことか。

フォークスの祖母が亡くなり、彼のイギリス行きが決まった時、一緒について来てしまったほどだ。

だが、フォークスは彼の心配をよそに僕と出会い、何とかうまくやっている。

良かったと言うべきであり、心から安心するべきなのだが、なぜか寂しい感じがするルクレールなのだ。

そんな彼の想いを汲んで僕は目一杯に首を振った。

「そんな大層なもんじゃないんだよ。フォークスにとって僕は……空気、そう、空気みたいなもんなんだ。いてもいなくても同じと言うか、いても気にしないし、いなくてもどうでもいいという感じだよ」

どうでもいいだなんて、自分で言っていてなんだか悲しくなってきたが、ルクレールが苦笑してくれたことによって救われる。

「空気はなければ困るな。確かにあっても目に見えないし、あることが当然のように思ってしまったているから、気に留めることはないかもしれないが、ないと生きていけない。ジャンがりシャルにとつてそういう存在になってくれたことを俺は嬉しく思うよ。本当に」

感謝している。ありがとう、ジャン」

「ルクレール……。」

困ったような複雑な顔を向ける僕に彼はきれいに微笑んだ。

8 心配してる。けど、脅してもいる。

ルクレールに宛がわれた部屋は、一見、優美なんだけど、窓がない。扉には鍵が掛けられていることだし、閉塞感と言うか、圧迫感がある。

どうにかしてルクレールの部屋を換えて貰えないだろうか。

マルキードは未だに犯人のイニシャルは『A・L』だと信じている。

——フォークスが説明して、それは違うと言ってあげればいいのに。懐中時計は犯人の遺留品ではありません、って。

そうすれば、ルクレールの容疑は晴れるのに。いや、彼だけではない。彼のように招待状を受け取ってしまった者たちもだ。

だが、フォークスは言う。

「そんなに単純にはいかないものだよ。今、あの懐中時計がアルの物だと言ったら、アル一人に容疑がかかるだけさ。いくら遺留品じゃないと言ったところでそれを信じてくれるかどうか。——なんだって？ 警察に事情を話すって？ さあ、どうだろうね。あの懐中時計が犯人の遺留品でなくなったら、犯人の手がかりは何もなくなってしまう。そうなっては困るから、警察もあれを遺留品だって言い張るに決まっている。間違っていると分かっているても、事件を解決するために無理矢理真実にしてしまうのが、警察って奴らなのさ」

警察は真実を突き止めようとする者たちではない。自分たちの真実に現実をいかに近付けようとする者たちの集まりなのだ。

そうはつきりと言ったフォークスに、僕は返す言葉を知らなかった。

反論した気持ちはあったのだ。だが、言葉がない。

読書に戻ったルクレールの向かいでソファに寝転ぶフォークスを

見つめて、僕は小さくため息をついた。

その時、コンコンという軽い音が響いた。考え事をしていたため、一瞬それがどこから発せられた音なのか分からなかった。

「誰だ？」

ルクレールがドアに向かって声をかける。それでようやく誰が来たのだと分かった。

「アル、僕だ」

扉の向こうから返ってきた言葉はごく短いものだったが、ルクレールにとっては、その人物が誰であるかを知るには十分だったらしい。彼は手にしていた本を閉じ、テーブルの上に置くとゆっくりと立ち上がり、扉を開けた。

扉の向こう側にいた人物は、セルジュ・ボードレールだった。

「先客だった？」

セルジュが遠慮気味にフォークスと僕を見る。ルクレールもばつが悪そうな表情をした。

「出直すよ」

彼が背を向け立ち去ろうとした時、不意に僕の隣から声が發せられた。

「必要ない」

驚き振り返ると、フォークスが体を起こし、じつとこちらを見つ

めていた。その顔はすつきりとしていて、とても寝起きには見えな
い。

フォークスはソファから床に足を降ろすと、僕の腕を引っ張った。

「僕たちの用は済んだ。もう部屋に帰るところだ」

半ば引っ張り上げられるように僕を立ち上がらせると、そのまま
引きずるようにしてルクレールの前を素通りする。

「リシャル」

「ジョン、自分で歩け。重い」

フォークスは、ルクレールの引き止める声を無視してドアの外に
出、セルジュを部屋の中に押し入れた。

ボタン、と扉を閉める。そうして僕の腕を解放すると、先に立つ
てズンズン歩き出した。僕は慌てて後を追う。

「どのくらい寝ていた？」

振り返りもしないフォークスは、当然後を追ってくるだろう僕に
向かって問いかけた。

「二時間くらいかな」

「ふーん、そんなもんか。もっとよく寝た気がしたんだけど」

「よく寝てたよ。気持ち良さそうに」

「夢を見ていたんだ」

フォークスの歩みがゆつくりとなった。僕が横に並ぶと、彼は僕に向かって苦笑する。

「幼い頃の夢さ。アルと初めてあった時の夢。僕が五歳、アルは七歳だった。アルが初めて盗みをやったのは六歳の時だ。それから十二年、彼は未だかつて失敗のない大泥棒『怪盗R』だなんて言われているけど、彼は以前に一度だけしくじったことがある。僕の家に泥棒に入った時にね」

えっ？ と、驚いた瞳を向けると、フォークスはずっと目を逸らした。

「僕がパリに住む祖母の家に預けられたのは五歳の時。その晩、さっそく泥棒が入ったんだ。その泥棒っていうのがアルだよ。彼は、僕がイギリスから持って来た物が目当てだった。盗む物盗んで彼は窓から出って行ったよ。来た時と同じようにね。それはもう見惚れるほど鮮やかなお手並みだったんだ。七歳とはとても思えないほどのね」

僕はフォークスの横顔を見やった。彼は淡く微笑み、俯く。

「翌日、僕は街を歩き回った。彼を捜すために。なんと言っても、盗まれた物を返して欲しかったのさ。一目で彼だと分かったよ。だけど、彼は初め素知らぬ振りをした。彼の友人もグルでね。なかなか白状しなかったんだ。それで僕は切り札を出したのさ」

「切り札？」

「彼の懐中時計さ」

「懐中時計？」

「彼が僕の物を盗んでいるうちに、僕も彼の物を盗んでやったのさ」

そう言つて、フォークスはさもおかしそくに笑い出した。

「あの時のアルの顔つたら、今思い出しても傑作だ。泥棒が入った家で物を盗まれるなんて間抜けすぎる。それで彼は白状したつてわけさ。別に盗まれた懐中時計が惜しかったわけじゃないよ。彼はそれが自分のではないと言い張ることもできたわけだし。それでも白状したのは、泥棒から物を盗んだ僕に対して敬意を示したかったのさ。彼なりにね」

「その懐中時計が今回の懐中時計つてわけかい？」

「違う。僕がアルから盗んだ懐中時計はそのまま僕が貰つて、今でも僕が持っている。今回問題となっている懐中時計は、僕がアルのために新しく買ってやった物だ」

二人にとって懐中時計は特別な物だったに違いない。それを、どんな事情だろうが、他人の手に渡してしまったルクレールをフォークスは許せないのだ。

ルクレールの巧妙な言葉で一時はその怒りを忘れてしまっていた彼だったのだが、夢を見たことで思い出し、再び怒りが湧き上がってきたらしい。

だが、普段のように僕に当たり散らすような様子もなく、それつきり口を閉ざしてしまった。



再び彼がその饒舌ぶりを披露したのは、夕食を済ませた直後だった。

食事をしながら、口をほぐしていたのだろうかと思ってしまう。

「さあ、ジョン、行こう」

そう言って、すくつと立ち上がった彼はいつも唐突だ。

「行ってくて、どこに？」

「それは決まってるない」

「……」

「けど、この部屋にいても全く意味がない。そうは思わないかい？」

フォークスにとって僕は、自分の意見に反対するはずのない人間だった。

『そうは思わないかい？』と言った後には、声としては省略されてしまうが、必ず『そう思うだろ？』と続く。

困ったことに、事実、僕は『そんなこと思わないよ！』と、彼の

意見を否定したことがなかった。

「そつだらうけど……」

「よし、行こう」

フォークスは僕がまごついている内にさつさと部屋から出ていってしまう。

「待つてよ、フォークス」

慌てて彼を追いかけて、横に並ぶ。

「どこに行く気だい？」

「決まっていなくて言うただろ。ただ屋敷をぶらつくだけさ。屋敷の構造を知っておく必要があるしね」

もつともそんなことを言っているが、彼の場合、単に一つの場所にじっとしているのが嫌なのだろう。

「とりあえず行ったことがない部屋を回ってみよう」

ボードレール家の屋敷には、家の者が暮らす建物の他に、その東西に小さい二つの棟がある。

小さいと言っても中央にある建物に比べてのことだが、とにかくその二つの棟はすべて客室になっている。東には歓迎する客を、西には歓迎しない客をそれらの部屋に押し込めるのだ。

フォークスとジョンは東棟を歩き尽くし、中央の建物に行く渡り

廊下に差し掛かった。

「東の客は成金野郎ばかりだったな」

うんざりしたように呟いたフォークスに僕も力無く頷いた。

東の客室を一つ一つのぞいて回ったのだが、どの部屋も今回のパーティー客に使用されていたのだ。

そこでフォークスは行く先々で、

「ほほう。君が、夫人が雇った探偵かね。どうだね、怪盗は捕まえられそうかね？」

などと言われ、いちいち引き止められたのだ。

彼らはマルキードからの正式な招待を受けた客ではなく、ただのパーティー好きか、好奇心の塊か、よほどの暇人だった。

それが、怪盗Rからの予告状のためにパーティーが中断され、かの有名な怪盗が現れるらしいと聞いて帰宅できず、ボードレール家に留まっている。

怪盗Rが現れるのは明晩。それまでいくらか時間があるため、彼らは恐ろしいほどに時間を持て余していた。

そんなところに、ボードレール夫人が怪盗R対策に雇ったと噂の探偵がひよっこり現れたのだ。これはぜひ、いかにして怪盗Rに立ち向かうのか聞いてみたい！ そう彼らが思うのも当然だ。

だけど、その思いはフォークスにとって迷惑以外の何者でもなく、彼は笑顔を引きつらせながらも必死でここまで逃げてきたというわけだ。

「僕を暇つぶしの道具にしようだなんて、どこまでも恐ろしい奴らだ」

「まあまあ、フォークス」

「ジョン、君もよくないんだぞ。僕が奴らに対して無視を決め込んだというのに君ときたら、馬鹿丁寧に……」

文句を言い出したら、言い尽くすまで止まらないフォークスに有効な対策は、とにかく早く謝ることだ。

「悪かったよ。だけど、いろんな話が聞けたじゃないか」

野次馬というものは、総じて、おしゃべりなものだ。

僕らは拘束される見返りとして、ジゼルの母親について情報を得ることができた。

オンディーヌ。——マルキードがどこからか連れて来た娘だ。

たいそう美しかったらしいが、当時マルキードにはリリアーヌという両親に決められた婚約者がいたため、二人の関係は親族うち揃って反対されたそうだった。

どこの生まれかも分からない娘。きつと財産目当てに決まっている。口汚く罵られたオンディーヌは、マルキードの前から姿を消した。

やがてマルキードは親の言い付け通りにリリアーヌと結婚したが、オンディーヌのことも諦めきれず、彼女を捜し続けた。

そして、ついに彼女を見付ける。

海の近くにある街。そこに小さな教会があつて、その隅に身よりのない者たちの墓がある。マルキードはそこでオンディーヌの墓を見付けたのだ。

オンディーヌはボードレル家を去る時すでにジゼルを身籠もっており、逃げた先の教会で、命がけの出産を果たした。

生まれながら孤児になったジゼルは、教会の近くに建てられた孤児院に入れられていたが、そのことを知ったマルキードが彼女を迎

えに行き、ボードレール家に引き取られたというわけだ。

それより、と僕はフォークスの横顔を見やった。

「ずいぶん遅くなってしまったけど、まだぶらつくのかい？」

あっちこっちで引き止められたせいで、時刻はもうじき十一時になる。

「なんだいジョン。もう、お寝むのかい？」

確かに眠い。それもそのはずで、昨夜ほとんど眠れなかったのだから。

「うん、眠い」

そう言つて、僕はその場に立ち止まった。その気配に気付かないはずのないフォークスなのに、彼は足を止めない。

「戻りたければ、お一人でどうぞ」

「ひどいよ。僕が方向音痴だって知っているだろ？ 一人でなんて戻れっこないよ」

僕の悲鳴に近い声を背中に受けて、彼はぴたりと立ち止まった。

「ああ、情けない」

くるりと後ろを振り返る。

「分かったよ。ジョン、君のために部屋に戻ろう。まったく君は実

に優秀な助手だよ」

冷ややかに言い放たれたフォークスの言葉に僕は慌てた。

「や、やっぱり、まだ、大丈夫だよ。ほら、全然眠くない。元気元気」

「……」

「さあ、行こう！」

フォークスがすんなり僕の言葉を受け入れてくれた時は、その後が怖いのだ。後々になって何を言われるか分かったものではない。僕はフォークスを追い抜かして先を突き進んだ。

「ジョン・コール君、無理はやめたまえ。僕は君の体が心配なんだ」

すぐ後ろから聞こえてきた、いかにも優しげな声音に僕は冷や汗をかく。

——怖い、かなり怖い。

その恐怖から逃げるように早足をしていた僕だったが、不意に後ろの気配が遠ざかっていくのを感じて立ち止まった。

振り返ると、フォークスも数メートル後ろの方で立ち止まっていた。

「フォークス、どうかしたのかい？」

彼はその廊下の壁をじっと見つめながら、僕に来るように手を招いた。僕はわずかに頭を傾け、フォークスの元に駆け戻る。

「いったい……」

「これを見る」

フォークスが指差したのは壁にかけられた一枚の絵画だ。

「僕はこの絵を見つげるためにうろうろしていたのかもしれない」

その絵は若い女性の肖像画で、僕が見る限り、これといって特別なものではない。

「誰かに似ているとは思わないかい？」

——誰かに、似ている？

僕は絵の中の女性をじっと見つめた。金色の髪、白い肌。身につけている衣装は質素な感じのするドレス。

——ああ、そうか！

僕は気が付いて、手のひらを打った。

「ジゼルだ。ジゼルに似ているんだ」

彼女を十歳ほど成長させたら、彼女のようになりそうだ。

「そうか。この女性はジゼルの母親、オンディーヌの肖像画なんだ」

言っ、僕はフォークスに振り返った。すると、彼は唇に人差し指を押し当てて、何やら考え込んでいる。

「フォークス？」

「……そうか、なるほど」

何やら一人で納得をしたフォークスに僕は首を傾げる。

——なるほど、って言うのなら、それをちゃんと説明してほしい。

「ジョン、明日、ちょっと出かけてもいいかい？」

「出かけるって？」

「調べたいことがあるんだ」

「僕も行くよ」

「君はだめだ。この屋敷にいてくれないと」

「なんでだい？」

「なんで、って。僕が逃げたと思われるからじゃないか。大事な右腕の助手を置いていけば、まさか逃げたとは思わないだろ？」

「なんだか人質みたいだなあ」

不服そうに言った僕にフォークスは、そうさ、と、くすくす笑う。

「君は人質だ」

その笑いにどんな意味が込められているのか、僕には計り知れなかった。

そんな彼から目を逸らした僕はもう一度絵の中のオンディーヌを見つめた。

彼女を一言で言い表すとしたら、おそらく『美しい』という言葉が一番よく当てはまるだろう。『かわいい』とか『きれい』とかではなく、『美しい』なのである。

それも、健全な美しさではなく、フォークスが時折見せるような妖しげな『美しい』だ。先のくすくす笑いもそれだ。

考えが読めないというか、人を不安にするような、魅了するような、そんな『美しい』だ。

フォークスとはかく、絵である彼女のどこにそんな力があるのだろうか。僕は彼女の瞳に見入る。

「あつ」

紫だ。瞳の色が紫に描かれている。

驚き、ますますその目に見入る僕の袖を不意にフォークスが引っ張った。

「行こう」

「あ、うん」

目的を達成したらしいフォークスなのだが、まだぶらつくのをやめる様子はない。この分だと、中央の建物を回り、西棟の客室を全て回り尽くすまで部屋に帰れそうにない。僕は頭を左右に振り、眠気を吹き飛ばした。

9 死者は黙って寝ているものだ

渡り廊下から中央の建物に足を踏み入れたフォークスと僕は、夜も遅いと言うことで、さすがに一つ一つの部屋を回るとはやめて、誰がどの辺りに位置する部屋を使っているのかだけを確かめながら回ることにした。

ちなみにこの建物の部屋を使用しているのは、主であるマルキード、その妻のリリアーナ、彼らの息子のセルジュである。もちろん、ジゼルの部屋もここにあり、執事のシャルダンの部屋も小部屋だが、ある。

他の使用人たちの共同部屋は地下にあつて、パーティーホールやいったい何のために使われるのか分からない部屋も、この建物内にいくつかある。

それらを見て回った僕らは、次の棟へ行こうとそこへの渡り廊下に向かった。

その時である。向かう先、西棟の方から悲鳴らしい声が聞こえたのだ。

「フォークス、今」

「ああ」

互いに目を見交わすと、二人は駆けだした。

一気に渡り廊下を駆け抜けて西棟へ向かう。悲鳴が聞こえたのはルクレールたち、招待を受けてパーティーにやってきた者たち、つまり、ジゼル殺害の容疑がかかった者たちの部屋がある方からだった。

再び悲鳴が上がった。今度はさっきより近いところで。そして、

また。

悲鳴が上がる位置が徐々に二人に近付いているようだ。
そうして、ついに。

「フオ、フォークス。今！ 今！」

悲鳴こそ上げなかったが、僕が大声を上げる番となった。
僕は口をパクパクさせながら廊下の先の方を指差した。

「見たかい、フォークス。ジゼルだよ。今、ジゼルがあそこを駆け抜けていったよ！」

それはほんの一瞬だった。

さあーっと白いものが僕らのずっと前を横切って行ったのだ。よく考えて、その姿を思い出してみれば、その白いものはジゼルだったと思えない。

足首まである真っ白いドレスと腰まである金髪を、ふんわりと風になびかせ駆け去ったモノは、ガラスケースに横たわっていた、あのジゼルだ。

「フォークス、どうしよう。やっぱり噂は本当だったんだよ。ジゼルは夜な夜な生き返って、彷徨っているんだ」

「馬鹿な」

慌てふためく僕に対してフォークスは冷静だった。

「いいかい、ジョン。あれはジゼルじゃない」

「な、なんでそうだって言い切れるんだよ。ジゼルだったじゃない

か」

「君こそ、よくもちろりと見ただけで、そうも断言できるものだ」

フォークスはさも呆れたようにため息をついた。

「死体が動くわけがない」

「けど、フォークス……」

「ああ、分かった。そうまで君が言つのなら、これからジゼルの部屋に行ってみようではないか」

言つて、フォークスは踵を返した。再び渡り廊下を進む。

「今のあれはあちらに向かった。ジゼルの部屋とは逆方向だ。だから、もしあれがジゼルだったとしたら、彼女の部屋から遺体が無くなっているはずだ。そうだろう？」

「うん……うん」

僕は言葉を呑み込むように頷いた。フォークスの後を追う。



ジゼルの部屋の前でイレエと鉢合わせになった。彼女も廊下を駆けてきたらしく、肩で息をしている。

「ジゼルの遺体は寝室の中にありますか？」

「私もそれを確かめに。どうぞ、中へ」

イレエ又は扉を開くと、僕たちをジゼルの寝室に招き入れた。明かりを灯す。

「フォークス」

「ああ」

僕はガラスケースを覗き込み、フォークスに振り返った。彼は、やはり、と言って息を付く。

「ジゼルはずっとここにいた。当然だ。死体が動くはずかない」

「すると、さっき僕らが見たあれは？」

「おそらく……」

フォークスは押し黙った。考え込むように俯いた。



翌朝、僕が目覚めた時、すでにフォークスの姿はなかった。けど、けして僕が寝坊したわけではない。思い立った時のフォークスの行動が異常に早いのだ。

出かける前に一声かけて欲しいとは言わないが、せめてどこに行くのかくらい書き置きしてくれてもいいのではないだろうか。

そう思い、念のために部屋中を見て回ったが、やはりそのような物はない。

僕は二人分の朝食が整えられた机を見やり、重々しいため息をついた。

真っ白いテーブルクロスに大小の銀色の器。テーブルの中央には淡い碧の花瓶が置かれ、数種類の花々がいけられている。まだ湯気のあるコーヒーからは、なんとも香ばしい良い香りが漂う。

これらをネリーが僕たちのために思い、用意してくれたのかと思うと、一人分の朝食が無駄になってしまうことがひどく申し訳ない。

——朝一番に出かけないとならないようなことなのだろうか？
朝食くらい済ませてから出掛ければいいものを。

一人、部屋でのんびりとくつろいでいると、ネリーが慌てたようにやって来た。どうしたのか、と尋ねると、リリアーナがフォークスを呼んでいるのだと言う。

だが、生憎フォークスは出掛けたまま帰ってきていない。僕とネリーは顔を困って、見合わせた。

「とにかく、コール様だけでも奥様とお会いになって下さい」

おそらくリリアーナの用とは、怪盗Rのことだ。『セイレーンの涙』は見つかったのかと尋ねてくるに違いない。

——ああ、どうしてこんな時に。
フォークスの不在を恨みながら、僕はリリアーナの部屋へと向かった。そして、彼女は僕を見るなり言ったのだ。

「ダイヤは見つかりましたか？」

——まだです、夫人。

僕はその場に平伏したくなった。そうして、視野の端のキラキラ輝く物に気が付いた。

指輪、腕輪、髪飾り、首飾り。ダイヤはもちろんのこと、ルビー、サファイヤ、エメラルド、そして、真珠至るまで、あらゆる宝石が、僕の目の前に並べられている。

「ど、どうされたのですか？」

店でも開くのか、と、思わず尋ねそうになった。

リリアーナは何食わぬ顔でそれらを見やり、口を開いた。

「あなた方のお手伝いになればと思ひまして、この家にある宝石を

そこに並べてみました。まだすべてではないのですけど……。さあ、ご覧になって下さい。そこに『セイレーンの涙』はございますか？」

——そんなこと言われても。

僕は背筋に冷たいものが流れ落ちるのを感じた。

万人が知つての通り、僕は宝石商人ではない。こんな風に大量に並べられても、目がチカチカするだけで、分かるわけがないのだ。

——だいたい。紫のダイヤなんて聞いたことがない！

ダイヤと言えば、ホワイ ト フルホワイ ト無色や青白色が普通で、ごくわずかでもイエローやブラウンなど、色味がかつてしまうと価値が下がってくる。

だが、ブルー、カナリー・イエロー、ピンク、グリーンなど色を持つものは、ファンシー・カラー

変わり色と呼ばれ、その色の美しさから、むしろ、ホワイ トよりも珍重され、高価値だと聞いたことがある。

無色でないダイヤが存在することは知っているが、紫とは……。はたして本当に存在するのだろうか？

仕方が無く、僕は手袋をはめて、一番近くにあったダイヤを摘み上げてみた。

10 眩しくて瞼が開かないし、暗くても何も見えない。

しばらく経って、扉を軽く叩く音が響いた。重苦しい沈黙が破られて、僕は金縛りから解放されるかのように、扉を振り返った。すると、そこに立っていたのは、ボードレール家の執事シャルダンだった。

「失礼いたします」

彼は機械的に挨拶をしてから、感情の読めない瞳を僕に向け、それから夫人に向かって軽く会釈する。

「仰せの物を持って参りました」

いつの間にか、廊下に人だかりができていて、皆、覗き込むように部屋の中の様子を見守っている。

シャルダンが夫人に命じられ、僕の前に宝石を並べていった。鑑定しなければならぬ宝石が更に増えてしまつて、僕はもううんざりだ。

これだけの量の宝石を見ると、宝石なんて大したものではないように思えてくる。

そこらの石と同じ。ただちょっとキラキラしているだけだ。そう見えてくるから、大変だ。

僕は途方に暮れたい思いで、手に取ったダイヤを焦点の合わない瞳で懸命に見つめた。

その時。

「失礼します」

耳に覚えのある声が部屋に入ってきた。

声の主のさわやかな顔を連想し、僕は扉の方に振り返る。想像通り、声の主は涼しげな笑顔を皆に送っていた。

「宝石に関しては多少知識を持っています。お役に立てるか」と

ルクレールだ。僕は彼に抱きつきたい衝動に駆られた。

——だって、まさに彼は天の助けだ。フォークスのいない今、彼だけが僕の不確かな目を知っている。

僕の目は、それらしくカットされているガラス飾りをダイヤだと間違いかねない目なのだ。

お気に入りの彼の姿を認め、リリアーヌは彼に歩み寄った。

「まあ、アルベール。貴方が手伝って下さると言うのなら、これほど頼もしいことはないわ。さあ、中に入って。こっちょ」

何やら夫人から信頼されている彼を目の当たりにして、僕は顔を引きつらせた。

——恐るべき怪盗！

夫人は彼が怪盗Rだということを知らないから仕方がないのだが、それにしただって、仮にも彼女は怪盗Rを捕らえるように探偵に依頼しているのだ、そこまでルクレールに心を許していなくとも良いではないか。

「母様」

リリアーヌを呼ぶ声が聞こえ、彼女は廊下の方へと振り向く。彼女の息子、セルジュが木箱を抱えて立っていた。

「遅くなりました。これを」

「ああ、そんな物もありましたね」

リリアー又はセルジュから木箱を受け取ると、中の物を僕の前に放った。

それは蜂蜜黄色の地味な石だった。

大きさは、親指の爪ほど。いや、それよりも幅細く、縦長い楕円形であった。

未カットのせい、輝きは少ない。見て、即座にきれいだと思えなかったのも、そのためだ。

玩具のようだ。そこらに落ちている小石のようだとさえ思った。だが、その透き通った石の中央に、白い一本の光条が細く、くつきりと浮かび上がっていて、それがただの石ではないのだと分かる。

「キャッツアイだ」

誰かが言った。僕はその声に振り返ることなく、その石を摘み上げ、高くかざした。

確かに、石の縦方向に延びた線は、猫の瞳を思わせた。

——なぜだろう？ 目が逸らせない。今まで見てきた宝石のような華やかさの欠片もないような石に、どうしてだろうか。

まるでその石が本当に猫の瞳で、その瞳に睨まれているかのように、僕は身動きが取れなくなった。

「クリソベリルだ」

さっきの声とは違う声が僕のすぐ側で発せられた。

長身の彼の声は、ちょうど僕の耳近くで響くので、妙にドキッとさせられる。

「キャッツアイじゃないの？」

僕は、誰かが言った言葉を繰り返し言い、ルクレールに振り返った。

「そうとも言う。けど、正確に言えば、キャッツアイというのは、宝石それ自体の名前じゃない。キャッツアイ効果が現れた宝石のことを言うんだ」

「キャッツアイ効果？」

「光の帯が、まるで猫の目のように見える、宝石の特殊効果の一つだ」

その簡単な説明に、僕は更に怪訝な顔をする。ルクレールは苦笑し、今度は丁寧に説明しだした。

「あの宝石自体の名前はクリソベリルと言う。キャッツアイはクリソベリルの変種の一つで、半透明から亜透明の蜂蜜黄色、帯褐色黄色の石だ。化学成分はベリリウムとアルミニウムの複合酸化物で、微量の酸化鉄と酸化クロムを含有する。黄色から帯緑色を含む褐色までの色は、この鉄分による。クリソベリルは結晶中にインクルージョンがしやすい。——まあ、『異物』と言った方が分かりやすいか？ それらが結晶の上下軸に平行に、それも密に入っている時、それらからの光の反射によって、一本の光条が現れる。この光条に移動性があるのがキャッツアイの特徴で、光源を動かすと、それに連れて光条も移動する。この現状をキャッツアイ効果と言う」

「へー」

化学成分だの、何とか効果だの、堅苦しく説明されると、とたんに魅了ある宝石もつまらない物になってしまう。

聞かなければ良かった、と僕は後悔する。

もつとも、聞いたのは僕自身なので、文句を言える立場ではないが。

——ああ、だから彼は最初、簡単な説明で済ませようとしたのだ。

「キャッツアイ効果はクリソベリル以外の宝石にも現れる。それらは『・キャッツアイ』というふうに、効果が現れた宝石名の後ろにキャッツアイとつけて呼ぶ。けど、単に『キャッツアイ』と言った場合、大抵、あのクリソベリル・キャッツアイを上げるな」

宝石のことを語るルクレールは、宝石にも負けないくらい瞳を輝かせている。さすが怪盗と言うべきか。きつと彼もきれいな物には目がないのだろう。実に楽しそうに話し続けた。

「ところで、ジャン。クリソベリルにはもう一つの変種があるんだ。知っているか？」

僕は首を振る。

「アレキサンドライトだ。名前くらい聞いたことがあるだろ？ 昼間光では緑色、電灯光の下では赤色に変化する変色性効果を持つ宝石だ。キャッツアイ、アレキサンドライト、どちらもクリソベリルの変種で、希少性が高く、ものすごく高価な物だ。そもそもクリソベリル自体が宝石として最も高価な種類にランクされているのだから、それも当然だろう」

今にも『手に入りたい』と言い出しそうな彼の口調に、僕はハラさせられる。

何度も思い起こされるが、彼は怪盗なのだ。

——それにしても。

なぜセルジュはこの宝石だけを木箱に入れて持ってきたのだろうか。さも大切そうに。まるで、この部屋にあるあらゆる宝石よりもそれが高価であるかのようなうだ。

確かに、貴重で高価な物には変わらないのだけど、他にも高額な物はいくらでもある。

僕はもう一度その宝石に目を向けた。

不思議だ。

珍しい、高価な物などと人に言われると、それまでは玩具みただと思っていた物が、どうしたわけか、ひどく貴重な物に見えるくる。

——キャッツアイか。

宝石中央に入った白い一筋をじっと見入る。

——猫の目。

ふと、僕はオンディーヌの瞳を思い出した。絵画の中の彼女は紫色だった。

キャッツアイ。猫の目。オンディーヌの瞳。紫の瞳。紫のダイヤ。

……。

——『セイレーンの涙』？

僕は、はっとして顔を上げた。リリアーヌに振り返る。

「ちょっとお尋ねしますが、オンディーヌの瞳の色は、絵画の通り、本当に紫だったのですか？」

夫人は唐突な僕の問いに眉を顰めた。しかも、夫の愛人の話題だ。機嫌を損ねてしまっても致し方ない。

夫人は鋭く細めた眼を僕にぶつけながら、言い放った。

「あの女は魔女です。瞳に悪魔を宿していました」

「どついつ意味ですか？」

「おっしゃる通り、紫だったのです」

「では、重ねてお尋ねします。ジゼルの瞳の色は何色ですか？」

「……深い青です。けれど、光りの具合で、オンディーヌのように紫色に」

「紫」

やはり、と僕は頷き、ところで、と続けた。

「普通、動物などをはく製にする時つて、眼球は取り除いて、代わりにガラス玉を入れますよね？ ジゼルの場合、蠟で塗り固めてあるので、はく製とは違うようですが、それでも眼球は取り除いたのではないのでしょうか？」

今度の問いには、リリアーナの代わり、シャルダンが答えた。

「はい、取り除き、代わりの物を入れたと聞いております」

「代わりの物。——今聞いたところによりますと、ジゼルの瞳は紫に輝いたとか。だとしたら当然、入れた物は紫色に輝く物ですよ？ 紫色で、ガラスのような物……。僕が思うに『セイレーンの涙』は、『涙』と言うのだから、瞳に関係あるのではないのでしょうか」

ここまで言えば大方の者は察したようで、さっと眼の色を変えた。こんな言い表し方は適切ではないかも知れないが、それはまるで、獲物を見つけた獣のような眼だった。

その鋭い光にぞつとするが、口から出た言葉は今更どうにもならない。したがって、僕は決定打を言わざるを得なかった。後戻りはできない。

「紫のダイヤ『セイレーンの涙』は、おそらくジゼルの瞼の中にあります」

11 正しくない道具の使い方

はたして、僕が言い終わるのが早かったのか、彼らが駆け出したのが早かったのか。我先にとジゼルの部屋に駆けつけた者たちは、イレエヌの悲鳴も制止も聞かず、ジゼルの眠るガラスケースに詰め寄った。

僕は早くも後悔していた。自分の言葉がこれほどまでに影響力を持ったのは初めてだった。

重い音と共に、ガラスケースの蓋が横に滑らせるように開けられた。

異様な臭いが漂う。得体が知れないモノが腐った臭いと、それを紛らわせる為の臭い。そして、咽に焼きつくような蠟の臭い。

ハンカチを口元に当てたりリアーヌが無言でシャルダンを見、顎をしやくった。

シャルダンは無表情のまま僅かに頷き、手袋をした手をジゼルの顔にゆっくりと近付けた。

いくつもの瞳が固唾を呑んで見守る中、シャルダンの手はジゼルの右目の睫毛を摘むようにして、その瞼を持ち上げた。

「紫」

誰かが呟いた。いや、誰もが心の内で呟いたのだ。

「これが『セイレーンの涙』なのか？」

ジゼルの瞳として収まっていた物は、きれいな球体にカットされた紫色のガラス玉のように見えた。

——これが？

僕は一瞬思考が停止した。

ジゼルの瞼を開いたら、見慣れたダイヤモンドの形をした紫の物が中に入っていると心の底で思っていたからだ。

それは、例えば、ダイヤを含めた宝石類が、店に並んでいるような姿そのままで、鉱山で発見されるのだと信じているようなもので、一般人がダイヤらしいと思うような姿になる為には、そのように力ツトしなければならぬのだということを失念していた。

——では、やはりこれが『セイレーンの涙』なのか。

僕が考え込んでいるうちに、シャルダンの手は左目をもこじ開けていた。そちらにも同様の物が入っていることが確認される。確認されれば、次の行動は決まっていた。

「何かないかしら？ 細い棒とか」

キヨロキヨロと辺りを見回す彼らに、僕は、さあーと血の気が引く思いがした。

彼らが次に起こす行動は十分に予想できていて、そして自分にはその行動を止める力がないのだ。

恐ろしさに膝が笑う。まさか、自分の言葉一つでこんなことになるとは。

「これはいかがですか？」

シャルダンが指し示したのは、銀色の小さいスプーンだった。

それは生前のジゼルの物で、彼女の机の上にカップと共に置いてあった物だ。

「それでどうなさるのですか？」

青ざめた顔のイレーヌは、シャルダンの手からスプーンを取り返そつと震える手を伸ばした。だが、彼は素早く身を翻す。

ますます顔色を失ったイレエ又は、おそらく、そのスプーンで彼らがこれから何をするのか、ちゃんと承知しているようだった。だが、どうすることもできない。

彼女は、永遠に眠り続けるジゼルのために、毎日毎日、飲まれることのない紅茶を用意してきた。

本来なら、ジゼルが飲むであろう時間に紅茶を入れ、受け皿に角砂糖を二つと銀のスプーンを添え、彼女の机の上にそっと置く。そして、夕刻には、冷めきったコーヒーとそれらを片付けるのである。そんな彼女のジゼルへの想いの象徴であるそれを、シャルダンの手によって汚されようとしているのだ。それも、ジゼルさえも傷つけて……。

「あら、いいんじゃない？」

リリアー又は執事を労うように微笑んだ。そして、再びジゼルに向かつて顎をしゃくる。

シャルダンはい長い指を持て余すかのように小さなスプーンを手にして、その丸みを帯びた先端をジゼルの顔に近付ける。

そして、先程と同じように瞼を開き、いよいよその先端が目の中に差し込まれたのだ。

僕は自分の目に痛みを感じたような気がして、グツと目を閉じた。だが、本当に痛みを感じているのは目ではない。胸だった。

いくらジゼルが死んでいるからって、眼球を刳り抜くなんて。いや、亡くなっているからこそ、その体を敬うべきで、こんな行為が許させるわけがない。

僕は固く唇を噛み締めた。

自分のせいでこんな事になってしまって、それを止めることさえ敵わなかったのなら、せめて、全てを見届けなければならない。そう思い、瞼をこじ開けた。

すると、ちょうど、シャルダンが手にしたスプーンをぐるりと回

し、ダイヤを穿り出したところだった。

取り出されたダイヤは、先程のコーヒーの受け皿に置かれ、彼はもう片方の目に取りかかった。同様に、ぐるりと回し、穿る。

コトンッと軽い音を立てて、もう一つのダイヤも受け皿の上に置かれる。

「これが……」

「『セイレーンの涙』」

眼球を失ったジゼルはもはや人々の関心を失い、その視野からも意識的に外されていた。

彼らは二つの小さな球体が入った受け皿を尊い物のように持つて、臭いのきつい部屋から足早に出て行く。残された者は、ジゼルの傍らにしゃがみ込んだイレールだけだった。

彼女のすすり泣く声が耳に痛い。

僕は頭を勢いよく何度も左右に振ると、先に出ていった彼らを追いかけた。



彼らが向かった先はリリアーヌの部屋であった。彼女は二つの球体をきれいに洗わせると、それらを手袋越しに摘み、自分の額の高さまで持ち上げ、満足げに見入った。

「ほほう、これがボードレール家の秘宝ですか」

「なんて素晴らしい」

「カットし直したとしても、これはかなり大きいダイヤですぞ」

どこでどう伝え聞いたのか、暇を持て余した金持ち客がハイエナごとく集まってきていた。

彼ら相手に夫人はますます得意げになって、声高らかに言った。

「そうですとも。これが我がボードレール家の秘宝『セイレーンの涙』ですの。今までにこれほど素晴らしいダイヤを、みなさん、見たことがありますか？ ああ、なんて美しいの」

僕は金持ちたちが作る人垣の中に入り込めず、また、部屋の中さへ入り込むことが敵わず、遠巻きにその様子を眺めていた。

その時、視界が陰る。

予感がして見上げると、思った通り、ドルーエがそこに立っていた。

「この忙しい時に、何を騒いでいるんだ。まったく金のある連中は理解し難い」

僕に話しかけているわけではなく、単なる独り言のようだが、その割には大きな声である。

だが、得てして、独り言とは本当に一人の時は声に出して言わな

いものである。そこに誰かがいるから、声にするもので、その本心は人に聞いてもらいたいのである。よって、声の大小はこの際問題ではない。

僕は横に立つ男を少し見上げて、聞き返した。

「そんなに忙しいんですか？」

すると、それまで僕の存在など無視しているかのようにあったドルーエは、僕にジロリと目を向け、答えた。

「あたりまえだ。怪盗Rが現れるまでにそう時間がない」

「ですが、予告では明日と……」

「馬鹿者！」

ガラガラ声で怒鳴られて、僕はびっくりと肩をすくめた。それを見て、彼は決まり悪く咳を一つ付く。

「君の言う明日というのは、寝て起きた次の日のことかな？」

「違うんですか？」

「君にとって一日は二十四時間じゃないのかね？」

質問に質問を返し、さらに返されて僕は、はっとする。

「午前0時から午後二十四時までです」

「その通り。今回の予告状には時刻が記されていないかった。よって、

二十四時間のいつたい何時、奴が現れるか、わからんだ」

「警部はずっと見張られるのですか？」

「むろん」

言い切ったドルーエに僕は絶句する。

そんな僕に構わず、更に彼は、

「もつとも、肝心のダイヤがみつかったのな。当初より楽ができたのでない」

と、ガハガハ笑った。

そして、人垣を押し分け、ずかずかと部屋の中に入っていく。

「ボードレール夫人、それが噂のダイヤですか？」

僕も慌てて彼の後を追う。

「そのダイヤ、ご存じのように、怪盗に狙われておりましてね。我々が責任を持って怪盗の手からお守りいたしますんで、ちょっとばかり、お預けください」

ドルーエは使い慣れないのか、妙な敬語でリリアーヌに一方的に話しかけた。

「せっかく見つけた、大切なダイヤを怪盗なんぞに持って行かれたくはありませんでしょう？」

「え、ええ」

彼の勢いに圧倒され、それでも気のなさそうに頷いた夫人は、ドルーエの手に二粒のダイヤを手渡した。

「必ず……」

「はい、必ず守り抜きます。どうぞご安心を」

ダイヤを失って急に意気消沈したその場を後にしたドルーエは、その足でパーティーホールに向かった。もちろんそこは、最初の晩にパーティーが行われた場所である。

なぜ、こんな場所に？　と思いながら後をついてきた僕は首を傾げる。だが、すぐにそのわけが分かった。

広く、見晴らしの良いホールに数十人あまりの警官が壁に沿うようにずらりと並んで立っていて、ホールのどこにも隠れる場所はない。

ドルーエの姿を認め、数百に警官が一斉に敬礼をする。

その様は何とも言い難い。軍隊のように規律正しく、もしかしたら、怪盗の一人や二人捕まえるなど容易いことなのではないだろうかと思ってしまうほどだ。

僕が一人で感心していると、こちらに駆け寄ってくる者があった。

「警部」

ずいぶんと若い刑事だ。もしかすると、僕と同じ年なのではないかと思えるほど、若い。

ドルーエは彼の姿を認めると、眉を顰めた。

「なんだね？　スタンダール君」

「警部、ずっとダイヤを握り締めているつもりですか？ 普通のダイヤだって、そりゃーないですよ。まして、それは普通ではないんですからね」

容姿もさることながら、口調も少年のようだ。

——刑事の童顔って、仕事に差し支えないのかな。

そんなことをぼんやりと考えていた僕だったが、ふと、気付く。
どこかで見たような顔だ。

「これに入れてください」

スタンダードがドルーエに差し出したのは小さな小箱。どこにもあるような宝石箱だった。

「これに入れるのかね？ 君だって、こんな普通の箱を用意するではないか。もっとマシな物はなかったのかね？」

「なかったから、これなんですよ。早く入れてください」

二十歳は年上であろうドルーエに対し、この若い刑事は怯むことを知らない。まるで対等の友人のように話す。

——なんて気さくな……。あれ？ こんな感じ、どこかで。

僕は、ああつと心の中でそつと声を上げた。

——ギョームだ！ ギョームに似ているんだ！

一度そう思うと、スタンダードがルクレール家の庭師の息子、ギョームにしか見えなくなってきた。

「あ、あのう、ドルーエ警部」

「なんだね？」

ダイヤを小箱に入れながら、僕に振り返りもせずにドルーエが答える。

「彼は？　ずいぶん若いように見えるんですけど？」

「君の上司よりマシだと思いがね？」

ホール中央には両腕で抱えるほどのサイズの台が設置されて、ドルーエはその台のもとにゆっくりと歩み寄った。

いくつかのライトがそこに集中し、その場所だけ異様に眩しい。彼は小箱を台の上に置いてから、僕を振り返った。

「スタンダー君は異例の若さでパリ大学を卒業し、刑事となった。まあ、エリートだ。そこらのただ若い奴らとは違う」

ドルーエが言う『そこらのただ若い奴ら』の中には、おそらくフオークスも含まれているのだろう。

カチンと頭にきた僕が何か言い返してやろうと口を開きかけた時、それより早くに差し出されてものがあつた。

視線を落としてそれを冷静に見ると、スタンダーの手だった。

「よろしく、ジャン」

彼は唇の端の片側を軽く持ち上げて言った。つられて手を出し、彼と握手を交わした僕だったが、はたと記憶を巻き戻す。

——なんだって？　ジャン？

彼に名乗った覚えはない。しかも、ジャンと。

——まさか！

勢いよく顔を上げ、スタンダーの顔を見返す。

——本当にギョームなのか？

問いかける目を向けると、彼は僕だけに分かるほどわずかに肩を竦めた。それはまるで、秘密な、と言っているかのようなだった。

やはり、エリート刑事スタンダールというのは偽りの姿なのだ。

ギョームに、いや、怪盗Rにまんまと騙されているドルーエが滑稽で、僕は心の内で嘲笑う。フォークスをバカにした分だけ大いにそうとも知らず、ドルーエは、たった今、フォークスがいないことに気が付いたように声を荒げた。それがまったく、わざとらしい。

「今日は、とんと探偵殿のお姿をお見かけしないが、どうかなされたのかな？」

「フォークスは調べたいことがあると、外に出かけています」

「出かけている？ 今に怪盗が現れるというのにかね？ まさかとは思うが、恐ろしくなって逃げ出したのでは？」

意地の悪い顔で、僕を見下ろすドルーエ。

「違います！」

——ああ、もう。なんて嫌な奴なんだろう。フォークスを馬鹿にするなんて許せない！

憤った僕。だけど、次の瞬間、はっとしてドルーエの顔を見上げた。彼も僕を見つめており、にやりと笑うと、ついつと目を逸らした。どこか遠くを見つめる。

「あいつだけはわしの手で捕まえたいのだよ。あいつ——怪盗Rだけだな」

「ドルー工警部？」

彼は瞳を伏せた。

「怪盗Rは妙な奴でな。わしは怪盗Rのような怪盗を他に知らない。そもそも怪盗って奴は一種の愉快犯と言って、盗み自体を目的としていないのだよ。その目的は世間を騒がせること、自分に注目を集めること、警察とやり合ってスリルを味わうことなど様々だが、それらの目的の為に盗みにはいる前に予告状を出さなければならぬ。これがただの盗人と怪盗との違いだ。盗人の目的は一つ。金だ。盗む物自体に何らかの執心があって一時的に盗人になる場合もあるが、多くの盗人は生活に困って、他人の家に入る奴らだ。だから、奴らは金目の物であれば見境なく盗む。家に入ってから盗む物を探すのだから、予告状を出しようがないし、出さない方がより安全に盗めるというわけだ」

僕が彼の言葉に頷いたのを確かめて、ドルー工は言葉を続ける。

「怪盗Rを妙な奴だと言うのは、奴が怪盗らしくないからだ」

「らしくない？」

「ああ。どうやら奴は『怪盗』と言うよりも『盗人』に近いように、わしには思える。わしはな、奴が愉快犯だとは思えないのだよ。奴には奴なりの理由があるような気がする」

「理由ですか？」

「奴が盗みに入る家は、必ずその土地一、二を争う金持ちで、何らかの黒い噂がある家ばかりだ。汚い手で財を得たとか、その土地の

貧しい者たちに辛くあたっているとか。奴はそういった金持ちたちの一番大切になっている物を盗んでいく。それが金目の物だろうと、なかるうとな。まあ、そのついでなんだろう。ちゃっかり、金目の物も盗んで行くが」

ドルーエは苦笑した。

「だから、奴が盗みに入ると、その土地の、特に下級層の者たちが祭りのように騒ぎ、喜ぶ。怪盗Rが自分たちの仕返しをしてくれたと言ってな。しかも、少しずつだが、貧しい者の手に金を分けてくれる。こんなありがたい怪盗が他にいるかね？ 貧しい者たちにとって天上で見守っているだけの神より、よほど縋れるのだろうよ。あげくは、奴に協力して、匿ったりするのだからな」

ドルーエの語る怪盗R像は、僕の知るルクレール像と一致していた。

なゼルクレールは怪盗などやっているのだろうか、正体をうち明けられた時、疑問に思っていた。

——『善』の道を突き進む、太陽みたいな彼がなぜ？。

だけど、自分の欲の為ではなく、貧しい人たちに恵む為の資金が必要だったから盗みに入るのだと言われれば、なんて彼らしいのだと心から思う。

感心さえする。

「奴は愉快犯じゃない。怪盗とは言い難いのだよ。だが、もちろん盗人とも違う。予告状は出すわ。予告以外の物も盗むわ。世間を大いに騒がす困りものだが、必要に迫られてやっている。怪盗の中の怪盗であり、最も怪盗らしくない怪盗だ」

僕は黙って頷いた。

「奴が予告状を出すのは、警察に喧嘩を売る為じゃない。盗む家に対する礼儀のつもりなんだろうな。その証明になるかどうか知らないが、奴が初めて出した予告状にはこう書かれていた。『明晩二十四日、貴方の指輪をいただきますに伺いますが、どうぞお構いなく』ってな。まったくふざけた奴だ」

そう言つて笑うドルーエは、さすが怪盗Rを長年追いかけているだけある。本当に怪盗Rのことを良く知っている。

そんなドルーエだからこそ、聞いてみたいと思つた。なぜ、そこまで彼に関わるのか。なぜ、彼を追うのか。

「警部は彼を……。彼は本当に悪人だと思いますか？」

不意の問いかけにドルーエは黙つて、首を横に振る。

「だったら、なぜ、彼を捕らえようとするのですか？」

「奴が怪盗で、わしが警察だからだ」

「確かに、盗みは良くないことだと思います。けれど、彼は自分の欲の為に盗みを働いているのではなく、貧しい人の為に……」

「盗んでいることに変わりはないと思うがね」

「けど！」

ドルーエは再び、今度はゆっくりと首を振る。

「先程の答えを変えよう」

彼は僕から目を逸らす。遠く、ガラス張りの扉の方に目をやる。扉の外はバラ園だ。気が狂いそうなほど広く、遠くまで赤い絨毯が敷き詰められている。

「奴が怪盗だからとか、わしが警察とかだからではない。わしは奴とゆっくり話してみたいのだよ。直接、会ってな。奴は頭がいい。世の中に思ふこともある。こちらが考えもしないことを考えているかも知れん。思いがけない意見が聞けそうな気がするのだ」

ドルーエは苦笑する。

「それでも、お互いの立場はどうにもならん。わしが奴を捕まえんことにはゆっくり話などできんだろうな。そうなると、ますます、今のわしの最大の望みは、奴と酒を交わしながら、世の中の不条理さを議論することになる。もちろん、鉄格子越しでな」

ガハハハハと大笑いする彼に、僕もつられて淡く笑った。

叶うと良いですねなんて、ルクレールの友人の一人として、口が裂けても言えないが、彼の為に、いつの日か、そんな些細な願いが叶っても良いのではないかと、少しだけ思った。

12 僕のものに手を出すな。ただし、僕は君のものを使う。

フォークスが戻ってきたのは翌朝になってからだ。それも、太陽が昇る直前。空と海との境界線がほんのりと赤みがかった頃だ。当然、屋敷内は寝静まっており、呼んでも叫んでも玄関を開けてくれる者はなかったのだと言う。

それで仕方なく、気持ちよく眠っていた僕を、窓ガラスをガタガタ叩き、文字通り叩き起こしたのである。

フォークスは無事に部屋の中に入ることができて、めでたしめでたしだが、僕にとってはいい迷惑だ。

しかも、僕の災難はそれだけに止まらなかった。

疲れたと言って、フォークスは僕のベッドに潜り込んできたのだ。自分の寝室に行く気力もないと言って。

そして、更に、二人で寝るにはベッドが狭いと言い、僕を床に蹴り出した。

僕が文句を言うと、自分のベッドを使ってくれと言い、そのまま泥のように眠ってしまった。

仕方がなく、僕はフォークスの部屋に行き、彼のベッドで寝直すことになったというわけだ。

そんなフォークスが目覚めたのは、太陽が昇りきって、西に傾き、再び赤みかかったころだった。

これほど疲れてしまうなんて、いったいどこに行き、何をして来たんだろうか。

フォークスが目覚めるまでの時間、僕は何度かダイヤの様子を見にパーティーホールに足を運んでいた。

いつそこに行っても、ダイヤの回りには人が溢れていた。警官はもちろん、ダイヤを一目見ようとする者たちが人垣を作っている。

だが、肝心のダイヤはホルルの中央、台の上の小箱の中だ。触れることも、見ることもできない。

だが、今のところ、確かにダイヤはそこにあって、怪盗はまだ現れていないようだ。

目覚めたばかりのフォークスに濃く入れた紅茶を手渡すと、僕は昨日会った出来事をポツンポツンと語り出した。

リリアーナに言われてダイヤを探すことになってしまったこと。

そして、見つけてしまったこと。

珍しくフォークスは黙って僕の話聞いていた。漆黒瞳がじっと僕を映している。

僕の不用意な言葉で、人々が寄ってたかって、ジゼルの瞳を割り抜いたこと。その浅ましさを言葉にしている内に、僕の目は熱くなった。視野がぼやけていく。

「よりによつて、あんな場所で、あんな風に言うべきことじゃなかったんだ。せめて、君が帰って来るまで待っていれば良かった。なのに、僕が、ジゼルの瞳こそが『セイレーンの涙』だって言ってしまったから」

涙が零れた。ひどく熱い涙だ。

「イレーヌが泣いていたよ。僕のせいだ。ジゼルを……、ジゼルの体を傷つけてしまった。それに、マルキードがどんな想いで、あのダイヤを、死んでしまった愛しい娘に与えたのかと思うと……。その気持ちも、僕は、踏みにじってしまったんだ」

まるで黒い瞳に向かって懺悔しているかのように、僕はひたすら話続けた。

その声が涙で言葉にならなくなってきた頃、ようやくフォークスが口を開いた。

「それは違うな。ジョン、君はそんなに賢くない」

言われた言葉の意味が分からず、僕は顔を上げ、フォークスを見つめる。

彼は、フツと笑って、僕に歩み寄った。

「君はまんまと利用されたのさ。怪盗Rとその一味にね」

「ルクレールに？」

信じられないという顔した僕の頬を、フォークスは優しく撫で、そっと涙を拭った。

「君にキャッツアイを見せ、ジゼルの瞳を連想させたのさ。ジゼルの瞳が例のダイヤだと言わせる為にね」

「そ、そんな」

——信じられない。いや、信じたくない。

「そんなことさせて、ルクレールに何の得があるんだい？」

「得？——得の有無は分からない。だけど、あいつは優しい奴だから、きっと君以上に苦しんでいるはずだ。君に申し訳ない、と」

それでも、そうしなければならなかった理由があったのだと、フォークスは続けた。

「その理由が何であるのは、あいつ自身に説明させるとして……」。

「ああーっ！」

フォークスは拳を作り、唐突に叫んだ。

「アルの奴！絶対に許せないっ。いくらジョンがバカで、間抜けで、扱いやすいからって、利用するなんて！僕は絶対、アルのすることには手を貸さないとやったんだ。それは当然、僕の玩具であるジョンにも当てはまることで……。それを勝手に、僕がいないのを幸いとばかりに、利用するなんて！」

——玩具？

自分の玩具を勝手に遊ばれて怒っている幼児、いや、フォークスは、その仕返し計画に燃え出した。

よく眠ったおかげなのか、元気がいい。

そんな彼の、玩具発言にドツと疲れを感じた僕は、彼を横目にそつとため息をついた。



フォークスの本日初めての食事は夕食であつた。一人分の食事の支度を済ませたネリーがフォークスの姿を発見し、嫌味を含めて言

い放った。

「あら？ フォークス様、戻っていらっしやったの？」

僕が前もって話しておいたので、彼女はすること知っていたはずなのだが、昨日の朝食の事を思い出して、嫌味の一つくらい言いたくなったのだろう。

だが、すぐにもう一人分の用意をしてくれる。

「どこに行っていていらしたんですか？」

フォークスのグラスに葡萄酒を注ぎながら、ネリーは尋ねた。

「それを君が聞いてどうするんだい？ 主にでも報告するかい？」

「マルキード様は……」

「彼じゃない。本当の君の主だよ」

一瞬顔色を失ったネリーにフォークスはクスクス笑う。

「ご存じだったんですか？」

「いや、今、分かった」

「カマかけたんですね」

怒ったような、呆れたような表情をするネリー。僕は二人に会話に付いていけず、交互に彼らの顔を見た。

「いったい、なんのことだい？」

「何？ 大したことではないよ」

フォークスは僕に向き直り、笑う。

「アルが僕に会いに来ないわけだってことさ」

「え？」

「よくもまあ、遠く離れたところにいるこの僕を、あの彼がこうも放っておけるものだと感心していたんだけどね。実はそうじゃなかったんだ」

「はあ？」

「つまり、ネリーの本当の主はアルなんだ」

「はあ！」

「アルは彼女に、僕たちの監視を命じたのさ。わざわざ数ヶ月前からこの屋敷に潜入させておいてね」

「監視だなんて、そんな大げさですよ。ただ見守っていると言われているんです」

「逐一、行動を報告してか？ それに、君だろ？ リリアーヌに余計なことを吹き込んだのは。――アルも前もって吹き込んでいたのだろっけど、君が、予告状が届いてすぐあの御夫人に『都合良く探偵が屋敷に滞在しているから依頼してみたらどうだろう』とかなん

とか言っただろう」

フォークスの言葉にネリーはただ笑った。それを肯定と見て、彼は仰々しくため息をつく。

「アルはあの時そうそう容易に出歩ける状態になかったはずだから、どうもおかしいと思っていたんだ。早すぎるってね。あの夫人がパーティーの出席者全員の名前と職業を把握しているはずがないし、僕の名前をアルから聞いていたにしても、それを早急に思い出せるはずがないんだ。これは誰かが耳打ちしたに違いないって」

——ネリーが怪盗Rの一味だったなんて。

その衝撃は少なくない。信じられなかった。

だが、思い返せば、昨日、ルクレールにあった時、彼はフォークスがいらない理由を僕に尋ねてこなかった。彼なら一番先に聞いてきそうなもののに。

今ならそのわけが分かる。彼は知っていたのだ。ネリーから伝え聞いていたから、僕に尋ねるまでなかったのだ。

ギョームといい、ネリーといい、怪盗Rは本当に手回しが良い。

夕食を済ませた僕らは、相変わらず人垣を作っているパーティーホールに足を向けた。

正確にものを言えば、人垣はダイヤのすぐ回りにできているのではなく、ホールの入り口にできている。警察以外の者がホール内に立ち入ることを、ドルーエが禁じたのだ。

僕らは、遠巻きにダイヤを眺める人々を押し分けて、ドルーエを呼んだ。

彼はすぐに僕らの姿を認め、大股で歩み寄ってきた。

「これは、これは探偵殿とその助手殿。どうかなされましたかな？」

「怪盗はまだ現れていないようですね。警部のお働きを見学したいのですが、よろしいですか？」

表面上さわやかに微笑んだフォークスを、やはりニコニコと不気味に笑うドルーエがホール内に招く。

「もちろんですとも。大いに見学してください」

フォークスの後についてホール内に足を踏み入れた僕は、中央に置かれた台の上を見た。

やはり、昨夜のままに、どこにでもある小箱がポツンと置いてあった。

それを確認してから、ホールをぐるりと見回すが、こちらも特に変わった様子はない。

ギョームも、——いや、スタンダードも昨日同様、素知らぬ顔でドルーエの横にいる。

僕と目があった彼は、そつと、あくびをする真似をして見せた。そんな彼に僕は苦笑を返す。

こうして、ここですばらく変化の訪れを待つことになったのだ。



変わらぬ時は淡々と過ぎていく。人垣の中から、一人、また一人と消えていき、気が付くと辺りは重苦しいほどに静まりかえっていた。

壁沿いに立ち続けていた警官たちにも、疲れの色が表れ、その場にしゃがみ込む者も多い。

僕は、フォークスがぐるぐると振り回すステキの先をぼんやりと眺めていた。

時刻は二十三時五十五分。

あと五分で予告の時間が終わる。あと五分経って、なんの変化も見られなかったら、怪盗Rは現れなかったことになる。そして、ダイヤは守られたことになる。

そんなことを考えていると、突然、あのガラス張りの扉が開いた。側にいた者たちは誰が開けたのかと、お互いにお互いの顔を見合わすが、誰一人開けた者はなく、扉は勝手に開いたのだ。

「風だろうか？」

フォークスを振り返ると、彼も怪訝な顔をしていた。だが、その隣でスタンダーが笑いを堪えているのが目に入った。

その笑いの意味を尋ねようと口を開いた時、夜空をも切り裂く悲

鳴が館中に響いた。

「な、何事だ？」

その悲鳴はドルーエの予想外の場所から聞こえた。もちろん彼だけではなく、フォークスや僕にとっても予測外のこと、僕らは一瞬目線を交わし、悲鳴が聞こえた方に駆け出した。

「フォークス、今の……」

僕にはどうもその悲鳴がネリーのもののように聞こえたのだ。フォークスも同じ事を思ったのか、頷く。

「とにかく急ごう」

「うん」

ボーン、と低く、午後二十四時、同時に午前0時を知らせる時計の鐘の音が、どこからか響いてきた。

突線の叫び声に引き寄せられて、館中の者たちが次々と駆けつけてくる。

早くも眠りについてたのか、寝間着で駆けつけてくる野次馬。酒でも嗜んでいたのだろうか、赤い顔をした者。もちろん、ダイヤを心配していたのだろう、リリアーヌの姿もあった。

駆けつけた先は、思いがけず、マルキードの部屋であった。初めて入った部屋に僕は辺りをぐるりと見回した。

そこは、意外にも、質素な部屋だった。それはもちろん、この屋敷の豪華さに比べれば、ということだが。

リリアーヌの部屋のように、誰その名画、何とかの名作、ごく貴重な何々といったものが、ごった返している部屋とは異なり、

質素。

——いや、違う。

質素と言うのは誤りだ。趣味が良いのだ。

おそらく、一つ一つの家具はどれも、僕が想像を絶するほど高価な物であるに違いない。

だが、高価だと言うだけで買い集めたのではなく、一つの物が他の物と違和感なく同じ空間に有り続けることができるように、考えられて買い集めたという感じがあった。

一見古めかしい机と椅子を始め、ほとんどの家具は木材の物ばかりだ。

金、宝石類は見あたらず、変わりに数々の骨董品が棚を飾っている。なんだかホツとするような、くつろげる空間だった。

僕らの後ろから数人の部下を引き連れて駆けつけたドルーエは、ずかずかと部屋の奥に入り込むと、そこに突っ立っている少女に歩み寄った。

「君、大丈夫かね？　　いったい、何があったって言うんだ？」

少女——ネリーは、じつと一点を見つめたまま黙っている。ひどく何かに脅えているような表情だ。

フォークスと僕もネリーに歩み寄ると、それに習うようにリリアー又と野次馬たちも部屋に足を踏み入れた。

小刻みに震えるネリーの視線の先は、マルキードの寝室だった。

彼の寝室は、だだっ広い部屋に大きなベッドが一つあるだけの簡素なものだったが、

ゆっくに人が出入りできるほど大きい窓から差し込む月明かりが、なんとも神秘的な雰囲気を与えている。

ジッと思据えたまま動こうとしないネリーを諦めて、一同はマルキードの寝室に踏み込む。

三日前よりも、さらに大きく丸い月に照らされた寝室の中は、明

かりをつけていないのに十分に明るい。

今晩は満月だ。

僕はその明かりに引かれるように窓に目をやった。

すると、窓枠に軽く腰掛けた人影がその目に映る。月を背にしているため、はつきりとその顔は見えない。

ただ、黒いシルエットはくつきりとそこにあった。

シルクハットを被り、タキシードを着、膝裏まであるマントを羽織っている。

僕の胸の内で、『誰だ?』という疑問と『まさか!』という期待が交差した。

血が逆流しているかのように体が熱い。

その想いが僕だけのものではないことを、その場の緊迫した空気が知らせる。

息を吞んで、人々はそのシルエットを見つめた。

シルエットは、寝室になだれ込んできた人々の顔ぶれをぐるりと見渡し、ゆっくりとした動作で窓枠から降りた。

そして、

「こんばんは、皆々様」

と、上品にお辞儀をした。

13 月夜の怪盗の3つの目的

その優雅な動作に、目も、心さえも奪われてしまった人々の中で、いち早く我に返った者はドルーエだった。

「怪盗R！」

「お久しぶりです、ドルーエ警部」

「貴様っ！」

ドルーエが掴みかかろうと歩み寄ると、彼はサッと何かを突き出して、それを制した。

「それ以上近付かないでくださいよ。警部のおっかない顔に驚いて手を滑らせてしまいますから」

それは怪盗Rの手の中で黒光りした。

彼の優雅な動作から想像できない物を唐突に出され、それが拳銃だと分かるのに、僕は時間を有する。

だが、事実、彼は拳銃を片手にし、その銃口をベッドに横たわっているマルキードに向けていた。

どんなに時間をかけて見定めても、それは現実を起こっている事らしい。

なぜ彼がこんな真似をしているのか、僕にはまるで分からなかった。

「貴様の目的はダイヤだろう。血迷ったか、怪盗R！ダイヤはここにはないぞ」

ドルーエの言葉に彼は、くくくつと笑う。

「ダイヤ？　今回は、ダイヤが欲しくて伺ったんじゃないよ。予告状にもちゃんと書いてあったでしょう？」

「貴様の予告状は、毎度、毎度、意味がわからん」

彼は再び笑った。僕はそんな彼をじつと凝視する。

散々説明され、怪盗Rの正体はルクレールだと納得したはずだったのに、どうしても目の前の怪盗とルクレールが同一人物だとは、僕には思えなかった。

そのしゃべり方。声。ちよつとした仕草。まるで別人なのだ。だから、こうして、平気で姿を晒すわけだと、感心さえする。

怪盗Rがいくつもの顔を持つ、変装の名人だという噂もあながち嘘ではないようだ。ルクレールを知る者の前にも、平然と怪盗としての姿を見せ、しかもそれがばれずにいるのだから。

脅えるマルキードと目が合ったドルーエは、舌打ちして、数歩後退った。

怪盗紳士と自称するだけあって、怪盗Rはこれまでに殺人を犯したことはない。だが、この先もそうであるとは限らない。現に、人質を取り、銃口を向けているではないか。

ドルーエは、もしもの時を考えて自分の拳銃の在処を手探りで確認した。

その時、数人の警官が息荒く駆け込んできた。

「警部、ドルーエ警部、大変です！」

「なんだ？」

苛立ちながら返事を返したドルーエの目は、食い付くように怪盗を睨み付けたままである。

「ダイヤが。ダイヤが……」

「なんだ！ ダイヤがどうした！」

「盗まりました！」

「何！」

驚きのあまり振り返った彼は、知らせに駆けつけてきた警官を、信じられないものでも見るかのように見つめた。

「いったいどういう事だ？」

ドルーエは怪盗をギロリと睨み付けた。

「ダイヤには興味がないのではなかったのか？」

怪盗は肩を竦めた。

「興味ないと言った覚えはありませんね」

「貴様！」

「警部、いけません。人質が」

怪盗に掴みかかろうとしたドルーエをスタンダードルが後ろから羽交い締めにする。

「もっと冷静になってください」

「ぬっ」

低く唸り、力を抜いた彼にホツとして、スタンダールも力を抜く。

「私はホールの様子を見に行ってきます。警部、冷静にお願いしますよ」

と強く言い放ち、スタンダールは知らせに来た警官たちと寢室を去っていった。

ドルーエは乱れた衣類を正し、再び怪盗と対峙する。

「貴様の目的は何だ？」

「目的？　いくつかあるんですが……」

「いくつかあ？」

ドルーエの声が裏返る。どうも彼は冷静とは言い難い。その様子に怪盗は、くくくつと笑う。

「まずは返して貰う物を返して貰いましょうか」

銃口の先にいるマルキードを見下ろした。

マルキードは怯えながら頭を左右にブンブン振り回し、叫んだ。

「私は何も知らん！　お前に返してやるような物など」

「時計ですよ。懐中時計です」

「懐中時計？」

「ええ、あなたが持っていていらっしゃるのでしょうか？　銀色の、裏に『A・L』と刻まれている……」

彼の言う懐中時計とは、どうやらジゼルを殺害した犯人の遺留品とされた懐中時計のことらしい。

確かにあれはフォークスが友情の証としてルクレールにあげた物で、ジゼルに奪われた物。返してくれと言うのは、間違いではない。

「あの、あの時計はお前の物だったのか？」

信じられないという顔で怪盗を見上げるマルキード。

「ええ。返していただけですか？　あれは、私にとって、貴方のダイヤと同じくらい大切な物なんです」

「ダイヤと……」

頷く怪盗にマルキードは俯く。そして、この場にいるはずの執事に命じた。

「シャルダン、私の机の一番上の引き出しから、時計を持ってきてくれ」

だが、人々の群れから、誰一人動く気配しない。

「シャルダン？　いないのか、シャルダン？」

先程よりやや声を張り上げる。すると、しばらくあって、遠くの方から返事が返ってきた。マルキードは先程の言葉を繰り返す。

「机の一番上の引き出しだ。時計を取ってくれ」

「はい」

低い声が静かに寝室に響いた。

隣の部屋からいくつかの物音がし、すぐにシャルダンが戻ってくる。懐中時計を手にして。

マルキードはそれを受け取ると、そのまま怪盗に突き出した。

「確かに」

怪盗はそれを受け取り、上着の内ポケットに丁重にしまう。

そんな二人のやり取りを籠の外で見ていたりリアー又は、何やら全てを承知したような顔をして二人の前に躍り出た。

「つまり、その時計は怪盗R、貴方の物だったの？——ということとは、ジゼルを殺したのも貴方ってことなのね。なんて、恐ろしい」

彼女はハンカチを口元にあて、汚らしいものを見るかのように怪盗を睨んだ。

それには、怪盗は肩を竦めて答えた。

「妙な言いがかりはよしてください。時計は確かに私の物ですが、私が彼女を殺して何の得になりました？ 私ではありません」

「その時計は犯人の遺留品ですよ。それが貴方のだと言うのなら、

貴方が犯人だということになりませんか？」

怪盗Rは胸に手を置き、懐中時計を衣類の上から押さえつけた。

「夫人、そもそもこの時計が犯人の遺留品だということ自体が誤りなんですよ」

「なんですって？」

怪訝な顔できき返したりリアーヌに、怪盗は笑う。

「あなた方は私の言葉よりも、そこにいらっしゃる探偵の言うことを信じるのでしょうか？ 真実は彼に聞いてください」

怪盗の言葉にその場の者たちは一斉にフォークスを振り返った。僕も、急に話を振られた上、面倒を押しつけられ、怒りゲージを上げた探偵に、恐る恐る目を向けた。

「こんなところで僕に演説しろとも言うのか。……アルの奴、後で覚えていろよ」

ぼそつと吐き捨てるように呟いたフォークスの言葉は、おそらく僕にしか聞こえていなかったはずだ。

フォークスはステッキで、トントンと自分の肩を軽く叩くと、一同の顔をぐるりと見渡した。

「ご説明いたします」

彼はゆっくりと話し出した。

「まずジゼルの死因ですが、僕が見たところ、彼女の死因は毒針によるものです。殺害時に着ていた服にもそれらしき痕が見られました」

「毒針ですって？ それでは、本当に自殺ではないの？」

聞き返したりリアーヌに向き直り、フォークスは続ける。

「その通り、自殺ではありません。他殺です。このことは少し調べれば分かること。もしも警察が調べていたら、今頃このような騒ぎになることもなかったでしょう。——しかし、当初この屋敷には警察は足を踏み入れることができなかった。ボードレール氏が拒んだからです」

娘は死んではない、そう言っ

て。フォークスはマルキードをチラリと見やり、話を続けた

「死因が毒針であるのなら、これは事前に、彼女の洋服に毒針を仕込んでおけば良いもの。ジゼルが死亡していた現場にいる必要はない。いや、むしろその場にいない方が、都合が良い。そうだとは思いませんか？」

確かにそうだ。ジゼルが死んだ時その場にいた者がまず疑われるもの。いない方がいいに決まっている。

だからこそ、いつ彼女に刺さり、彼女を殺すか分からない毒針を殺害に使ったのだろう。

犯人にはジゼルがどこで死ぬか予想が付かなかった。だとすると――。僕はフォークスの次の言葉を予測しながら、口を閉ざして待った。

「もうお分かりですね。この事件に犯人の遺留品などあるはずがないのです」

言い切ってから、フォークスは、更に、と言い加えた。

「大方の者は懷中時計を上着の内側に仕舞います。そこは何かの拍子に落ちてしまうようなところではありません。万が一、落ちたとしても時計が落ちればそれなりに物音がしますよね？　いくら殺人を犯し、精神が異常な状態にあったとしても、気付かないわけがありません」

——確かに。

ジゼル部屋の床は全面板張りだ。

懷中時計ほどの重さがあるものが落ちれば、それなりに音がするだろう。

懷中時計を遺留品とするのは、些か無理なことだったのだ。

「無実証明かな？」

怪盗は、くくくつと笑った。

だけど、と怪盗の笑いを遮ったのはリリアーヌだ。彼女は己の頬に片手を置いて、夫を見やる。

「それなら、なぜあなたはその懷中時計が遺留品だとおっしゃったの？」

夫人は首を傾げる。当然だ。僕だって分からない。マルキードは、懷中時計が遺留品だと、半年経ってから突然言い出したのだ。

フォークスがぐるりとステッキを回した。

「その理由は、懐中時計の裏に刻まれたイニシャルにあります。――その懐中時計は、どこそのまぬけな怪盗がジゼルに奪われてしまった物だそうです。ですから、これはボードレール氏の勘違いなのですが、あなたはジゼルがイニシャル『A・L』の者に好意を抱いていると思い、その者を探し出そうとなさったのです」

後半はマルキードを見つめながら言い放たれた。

「一般的に、懐中時計は男性の持ち物です。少なくとも少女が持つような物ではない。それをジゼルが大切に保管していた。あなたが勘違いするのも止む得ないことだったでしょう」

フォークスが言葉を切り、少しの間、部屋はシーンと静まりかえった。その沈黙を破った者は意外にもマルキードだった。

「その通りだ。私はジゼルのその様子を見て、あの子は何者かに心を奪われているのだと思ったのだ。そして、懐中時計に刻まれたそのイニシャルこそ、その者のものだ」と

フォークスは頷く。

「そして、もう一人、あなたと同じように考えた人物がいます」

誰だろう、と僕が息を呑んだ時、怪盗が低く声を響かせた。

「二つ目の用件に移ろう」

「二つ目？」

怪盗の言葉にドルーエは嫌な顔をした。

「警部、いつもお世話になっているお礼に一つ手柄を差し上げますよ。私に比べれば小物ですが、ここに盗人がいます」

「何？」

ドルーエは訝しげに怪盗を見やった。僕も驚き、ルクレールを振り返る。その彼はフォークスに視線を向け、フォークスは細い眉を歪ませながら口を開いた。

「——ところで。僕は、この屋敷に来てすぐにある人物をジゼル殺しの犯人だろうと確信しました。けれど、動機が分からない。そこでヒントとなったのが、オンディーヌの存在です」

「ご存じですか、とフォークスはマルキードを見つめる。

「僕は昨日、とある街に行ってきました。海の近くにある活気に溢れた街でした。けれど、表通りの賑やかさに対して、裏通りにはゴミが溢れ、そのゴミに紛れて何人もの子どもが捨てられていました」

彼の声は静かに響く。そして、唐突に始められた話に誰もが戸惑った。だが、そんな中で唯一人、マルキードだけが幾度も頷いている。

フォークスは話を続けた。

「その街には小さな教会があり、近くに孤児院があります。数十年前その孤児院には、オンディーヌという美しい少女と、彼女と姉弟のように育った少年がいました。ある日、金持ちの男がやって来てオンディーヌを見初め、彼女を孤児院から連れ去りました。残された少年はその男を恨み、金持ちすべてを憎むようになりました。と

同時に、彼は金持ちから宝石を盗むことに喜びを覚え、多くの盗みを犯すようになったのです」

フォークスはチラリと辺りに視線を滑らせ、瞼を閉ざす。そして再び瞳を開いた時、言葉を紡ぎ出した。

「そして、その少年——いや、男は思い出したのです。数十年前、自分から愛しいオンディーヌを攫った金持ちの存在を。彼はその金持ちの家に入り込み、その家の秘宝を盗む計画を立てたのです」

もう『その金持ち』『その家』などという言い方は相応しくないだろう。金持ちとはマルキードことで、その家とはボードレール家のことだ。

そして、ボードレール家の秘宝とは、『セイレーンの涙』のことに違いない。

「男はオンディーヌを奪われた恨みを、ボードレール氏から秘宝を盗むことで晴らそうとした。ところが、ボードレール氏の手元に『セイレーンの涙』はない。聞くと、ジゼルに譲り渡されたのだと言う。そうして、彼はジゼルに近付いた」

「ところが、ここで男にとって誤算が生じる。ジゼルが彼に恋してしまったからだ」

フォークスの言葉に続いたのは、ルクレールの声だ。まさか、と皆の視線が怪盗に集まる。

「ジゼルの恋心を裏付ける証拠はない。だが、彼女と私は友人でね。私は彼女から相談を受けていた。オンディーヌの面影で追っている相手に、自分だけを見て貰うにはどうしたら良いか、ってね」

「そんなジゼルの様子を見て、思い違いをした男が二人。一人はボードレル氏、そして、もう一人はその男。彼らはジゼルに秘密の恋人ができたのだと考え、男は彼女がその者に『セイレーンの涙』を渡したのだと考えた。ジゼルの身の回りをいくら捜しても、紫のダイヤなんて物、見つからなかったものだからね」

「そうこうしているうちに、ジゼルが死に、男はますますダイヤの行方が分からなくなった。そこに遺留品の登場。その裏に掘られたイニシャルこそ、ジゼルの恋する相手だと、彼は思ったのだろう」

さて、とフォークスは杖で床を突いた。

「ボードレル氏に、ジゼル殺しの犯人のイニシャルはA・Lに違いないから、村中のイニシャルA・Lの者を集めるように助言した者がいます」

マルキードは驚いた表情でフォークスを振り返った。その顔からして、もはやその人物に心当たりがあるようだ。

「その男もボードレル氏も、懐中時計が犯人の遺留品でないことは承知していた。けれど、ジゼルの想い人を見つけ出したいという思いは共通しており、ボードレル氏はその男の提案に頷いた」

かくして、パーティーは開かれた。

フォークスの話に納得して頷いたドルーエは、ところでと言葉を
継ぐ。

「それで、その人物は、いったい誰なんだね？」

「それは……」

フォークスはぐるりと人々を見渡した。人々も固唾を呑んでフォークスの漆黒の瞳をじっと見つめ返す。いや、その中に一人だけ、彼の瞳を真っ直ぐに見つめ返せない者がいた。

フォークスはその存在に気付き、わずかに笑う。彼はスツテキの先をスツと持ち上げて、その人物を指した。

「貴方です。ジョゼフ・シャルダン」

静かに響いた彼の声に誰もが耳を疑った。

シャルダンはボードレール家の優秀な執事だ。いつも禁欲的に黒いスーツを着込んでいる。

口数少なく、目立つことなく佇む様子は影のようで、気が付くといつの間に側にいる、そんな人物だ。

「シャルダンが？」

「まさか！」

信じられるわけがないとばかりに声を張り上げたのは、リリアーヌ。そして、シャルダンと親しい使用人たちだ。

だが、一番驚きの表情を浮かべたのは、名指しされた当の本人だった。

14 探偵だけは驚かない

彼は一瞬顔色を失う。だが、すぐにもとの無表情に戻りギロリとフォークスを睨み付けた。

「何を根拠に私だとおっしゃるのですか？」

「証拠が必要だということならば、お見せしますが……」

「ぜひ」

どんなに睨まれても怯むことのないフォークスは、ついつとシャルダンから目を逸らし、ドルーエに振り返った。

「警部、彼の部屋を調べさせて下さい。特に彼のベッドの下を。少し力を込めると外れる床板があるんですよ」

フォークスに頷いたドルーエはすぐに部下をシャルダンの部屋に向かわせた。そして、怪訝な顔をフォークスに向ける。

「いったいそこに何があるんだね？」

「彼のコレクションですよ。失礼ながら、先日、勝手に入らせていただきました」

ふふっ、と笑うフォークスだが、何げに笑い事では済まされない事をやっている。

「そうしましたら、見つけるべくして見つけてしまいました。数々

の宝石を。——ところで、ボードレール夫人」

フォークスはリリアーヌに振り返った。急に話を振られた彼女は困惑しながらも彼の声に耳を傾ける。

「夫人はよく物をなくされるでしょう？　それも高価な宝石を」

「ええ。それが何か？」

「それもそのはずなのですよ」

首を傾げるリリアーヌにフォークスは笑って言った。

「彼が盗んでいるのですから」

言葉を失った夫人はフォークスを見、続いてシャルダンを振り返った。シャルダンは無表情のまま、黙ってそこに立っている。フォークスは、ふっと眼を細めた。

「さて、証拠ですが。貴方は皆より少し遅れてここに来ましたね」

フォークスはステッキで自分の肩を軽く叩く。そんな彼を横目で僕は、はてと考えた。

そう言えば、マルキードがシャルダンを呼んだ時、彼はすぐに返事をしなかった。それは、しなかったのではなく、できなかったのだ。

つい十数分前のことなので、記憶に新しい。確かに彼はその時その場にいなかった。

「遅れて来た。それがどうしたと言うのですか？　私はすでにあの

時間、部屋で休んでいました。悲鳴が聞こえ、すぐに目が覚めましたが、まさか寝間着のまま駆けつけるわけにもいかず、着替えをしていたのです。ですから、多少遅れてしまったと言っただけのこと」

「へえ、お休みになられていたんですか？ それは優秀な執事らしくない。主の秘宝が盗まれるかも知れないと言う時に呑気に寝てしまえるほど、どうしようもない執事を演じていたわけではないでしょう？」

フォークスがぐすくす笑った時、彼が待っていた物が到着した。

「警部、こんな物が！」

シャルダンの部屋を調べに行った警官が戻ってきたのだ。しかも、その手には小箱を持って。

「まさかそれは……」

小箱を受け取ったドルーエは恐る恐る蓋を開く。すると、中には二粒のダイヤが静かに収まっていた。

「『セイレーンの涙』がなぜ？ なぜ彼の部屋にこれが？」

ドルーエは中のダイヤを見せるように小箱をフォークスの方に傾けて、彼に振り返った。

「わけは簡単です。悲鳴が聞こえ、我々がホールから出た隙に、彼がダイヤを盗んだのです」

「しかし、ホールには部下を何人も残していた」

「それが何か？ ホールに残ったのは、予想外の出来事に浮き足立った下っ端の警官たち。警官服を着、どさくさに紛れてしまえば、実に簡単なことでしょう」

ドルーエは舌打ちをした。そして、手錠を手にシャルダンに大股で歩み寄った。

シャルダンの手首でカチャリと音がする。

その音を聞いて僕は、ほっと息を吐いた。事件は全て解決されたかのように思えた。

だが、僕は肝心な存在を失念していた。未だマルキードに拳銃を向けている人物の存在を。

彼はコホンと咳を一つ付いた。

「そろそろ腕が重くなってきたので、三つ目の用件を言わせて貰いますよ」

苦々しく笑い、シャルダンの身柄を部下に引き渡したドルーエに、すうつと腕を伸ばした。

彼が指差した先にあった物は、どこにでもありそうな小箱だった。ドルーエはどきつとして小箱をしっかりと持ち直した。その様子に怪盗は、くくくつと笑う。

「警部、そのダイヤ、偽者ですよ」

「何だと？」

「よく見てください。ただのガラス玉ではないですか？」

その言葉に驚いたのはドルーエだけではなかった。リリアーヌも

ちろん、僕さえも驚いて、怪盗と小箱を交互に見た。

「そんな馬鹿な！」

ドルーエは食い入るように小箱の中を見つめた。紫色に輝く二粒は彼の顔を小さく映している。

「『セイレーンの涙』がジゼルの瞼の中にあるという推理は、実に面白いものでした。正解は、瞼の中にある物ではなく、瞳だったんですよ」

なぞなぞのような怪盗の言葉にドルーエは首を傾げる。

「瞼の中にある物は瞳だろう。これは、ジゼルの瞳だったものだぞ」

その通りだと僕も思う。瞼の中にある物が瞳——眼球でなければ、何だと言うのか？

確かにジゼルの目を刮り抜いたのだ。それが、偽者であるはずがない。

そう思った時、ふと僕はフォークスに言われた言葉を思い出した。ルクレールが僕に、ダイヤの在処はジゼルの瞼の中だと言わせたのだという、今朝言われた言葉だ。

あの時の口調からして、フォークスもジゼルの眼球が本当の『セイレーンの涙』ではないと思っていろいろかのようにだった。

僕はフォークスの横顔をちらりと盗み見、それから、怪盗に向き直った。

「じゃあ、本物のダイヤはいつどこにあると言うんだ？」

「本物か」

怪盗も僕に振り向く。そして言い放った。

「ホンモノはない」

「え？」

「今はないと言うべきか、元からなかったと言うべきか……」

曖昧な言い方をする怪盗に僕は首を傾げる。

すると、適切な言葉を探しあぐねている怪盗の代わりに、探偵が口を開いた。

「それについては、元々の持ち主に聞いてみるという」

彼はステッキの先でマルキードを指した。

突然話を振られた彼は慌てふためき、その場から逃げ出そうとまでしたが、そのこめかみにコツンと重い物を突き付けられて頂垂れる。

そんな様子を目にして、彼の妻が黄色い声を張り上げた。

「あなた、もう白状なさって下さい。『セイレーンの涙』とはいったい何ですか？ 本当に実在するのですか？」

マルキードは光のない瞳でリリアーナを見上げた。そして、首を振る。

「まあ！ ダイヤは実在しないと今更言うのですか？ 散々私たちを振り回しておきながら、今更、ダイヤはないですって？ そんなことが許されるところでも思っているのですか！」

リリアーナの声に耳がキーンと鳴る。

「落ち着いてください、夫人。まずはボードレール氏の話を聞きましょう」

年若い探偵に宥められて、リリアーナはようやく息を整えた。そうして、人々の視線を集めたマルキードは観念したようで、ポツリポツリと言葉を吐き出した。

「『セイレーンの涙』は、ダイヤモンドでも、他のどんな宝石でもない。オンディーヌの紫の瞳のことだ。そして、ジゼルの瞳のこと」

信じられないという、人々の無言の叫びを感じて、フォークスはマルキードにゆっくりと歩み寄った。

フォークスは、月明かりのベールに飲み込まれ、僕を含めた他の者たちの位置から、その表情は逆光で見えなくなってしまった。

彼はベッドに横たわるマルキードを見下ろした。

「ボードレール氏、貴方はずいぶんとたくさんのアンティークをお持ちだ。さぞかし、古代文化に詳しくいらっしゃるのでしょうか？ 特にギリシアなどの……」

そう言って、言葉を切ったフォークスは僕に振り向いた。

「ジョン、あれを何と言ったかな？ 美しい声で人々を惑わせるとかいっ？ ギリシア神話に出てくる妖女」

わざとらしい問いに、今更何を言っているんだと僕はため息をつく。

「セイレーンだろ？」

セイレーンは海神の娘たちのことで、一人ではなく二、三人いることから複数形でセイレーネスと呼ばれることが多い。

その容姿については、様々な説がある。イギリスでは半人半鳥であると考え、フランスでは人魚だとされている。

どちらにせよ、海の孤島で人骨に囲まれて棲み、近くを通りかかる船の乗組員を歌声で魅了し、難破させてしまう妖女だ。

フォークスの意図が読めず、怪訝な顔をする僕。だが、すぐになるほどと低く唸った。

つまり、古代ロマン好きなマルキードは、孤児院でオンディーヌを見初めた時のことを、セイレーンの逸話に喩えたのだ。

「オンディーヌか。確か同じ名前の物語があつたな」

「ジロドウの戯曲だ。オンディーヌという水の精霊が人間の青年に恋をする話だ」

僕が言うと、フォークスは頷いた。

「オンディーヌはドイツ語でウンディーネとも言つ。このウンディーネの容姿は人魚のようだと聞きます。オンディーヌの名前と、彼女を見初めた孤児院が海に近かったことから、海の娘——セイレーンと連想した。違いますか、ボードレール氏？」

彼は頭を左右に振った。違わない、と。

そんな彼にフォークスは、ところで、と再び話題を変えた。

「セイレーンという名前は、ギリシア語の『縛る』『くつつける』

などの意味を語源としているそうですね。貴方は本当にロマンチストだ。オンディーヌとジゼルの瞳を『セイレーンの涙』と称したのは、本来ならば人間を惑わし、思い通りに操る側であるセイレーンを、貴方は束縛してしまっていたからでしょ？ 自由を奪われた彼女たちの悲しみを『涙』と称した。違いますか？」

マルキードの返答はない。

「僕は昨日、オンディーヌの墓にも訪れたんですよ。いえ、以前彼女の墓があつたところと言い直しましょうか？ 十数年前、彼女の墓を見つけた貴方は、すぐに彼女を掘り起こし、ボードレール家の墓場に移したのでしょうか？ 彼女の墓跡はまだそのままだに残っていましたよ。それで、一度掘られた跡を見つけました」

——墓を掘り返して、埋め直しただって？

僕はギョツとしてマルキードを見やった。彼は俯いている。

「束縛はオンディーヌよりむしろジゼルの方が強かつたのではないでしょうか？ 僕は最初から貴方に疑問を抱いていました。ジゼルの死を認めていないと言いながら、彼女の遺体をガラスケースに飾っている。まるで人形を飾るかのように。もしも貴方が本当に彼女の死を否定するのでしたら、ガラスケースではなく、生前そうしていたようにベッドに寝かせるべきだつたのではないのでしょうか？」

——言われてみればそうだ。

ガラスケースに入れられたジゼルは、もはや生きているとは言いがたく、むしろ最初から生きていなかった物のようだった。

「貴方がジゼルを溺愛するばかりに、彼女を屋敷から外に出さなかつたと聞いています。これはイレーヌから聞いた話です。ジゼルは

友達もできず、毎日一人で自分の部屋に籠もっていたそうですね。娘が部屋に籠もってばかりいる。そのことは普通の親なら悩みの種になるところだ。しかし、貴方にとっては好都合だった。ジゼルを誰の目にも触れさせずにしまっておける」

フォークスの鋭い目がマルキードを見据えた。

——異常だ！

僕は心の内で叫ぶ。

——娘を部屋に閉じ込めておいて、喜んでいるなんて！
信じられなかった。子を溺愛する親など、いくらでもいる。だが、マルキードは、彼の愛は、狂っている。

——そうだった。埋葬を拒否し、娘の遺体を蠟漬けにして保管していると聞いた時に気付いていたはずだったのだ。普通ではないと！
再び、フォークスが話し出した。

「ジゼルを閉じ込め、満足していた貴方だったが、ある日、彼女が何者かに恋をしているらしいと気が付いた。この時、貴方は、もはやジゼルを自分の娘とは思っていなかった。成長と共にオンディーヌに似てくる彼女を、まるで己の妻のように扱いだしていた」
リリアーナの顔が強ばる。そうして、そのことが真実なのだと知れた。

「ジゼルの何者かへの想いに、貴方は裏切りだと感じたのです。自分を裏切ったジゼルが許せず、また、自分以外の者を映し出す彼女の瞳が許せず、貴方はジゼルへの殺意を抱いた」

僕は驚いて、フォークスとマルキードを交互に見つめた。そして、フォークスの唇が、僕の予想通りの答えが発する。

「自分の物でなくなるのなら、いっそう消してしまおう。殺してし

まおう。そう思った貴方は、ジゼルの服に毒針を仕込んだのです」

静かに響いたフォークスの声は、人々の頭の中では何度もこだまして鳴り響いた。

——ジゼルを殺した真犯人がまさかマルキードだったなんて。

それは信じがたい真実だった。

フォークスは哀れみの色を浮かべた瞳で彼を見下ろした。

「貴方は愚かな人だ。ジゼルの遺体を見て、後悔しても遅い。彼女は死んでしまい、それを生き返すことは不可能なのです。いくら貴方が悔やんでも死体は死体だ。それが動くことはもう二度とない！」

フォークスの杖が床を付いた。彼は一つ息を吐いて、言葉を続けた。

「先程、貴方は言っていましたね。懐中時計に刻まれたイニシャルの持ち主こそジゼルの想い人だと思ったと。そう思っていた貴方は、犯人を捕まえる為にA・Lのイニシャルを持つ者を屋敷に集めようというシャルダンの策に乗った。——その真意は、ジゼルの想い人を自分の目で見定めること。場合によっては、ジゼル同様殺してしまおうと思っていたのでしょ？」

全てを言い当てられて観念したのか、マルキードは俯いた顔を更に下方向に動かし、頷いた。

それを見て、フォークスは重たい息を長く、ゆっくりと吐き出す。安堵したように……。

だが、まだ終わっていない。

「大変です！ ジゼル様が！」

悲鳴に近い叫び声を上げて、人々の集まる部屋に飛び込んできた者があつた。イレエヌだ。

彼女はマルキードの寝室の入り口までたどり着くと、その場に膝を着いて倒れ込んだ。

「何事ですか？」

彼女を助け起こそうと、ドルーエは歩み寄る。その足にすぐるようにイレエヌは声を張り上げた。

「ジゼル様のご遺体がないんです！」

「は？」

「私が少し目を離していた隙にジゼル様がなくなってしまったんです！」

人々は、皆、耳を疑った。何を言われたのか、即座に理解できなかった。

そんな中、くくくつと笑い声が静かに響いた。驚いて振り返ると、怪盗が一人で笑っている。

「警部、最後の用件を済ませてもよろしいですか？」

「何？」

ドルーエが聞き返すと、彼は、すうつと腕を真つ直ぐにイレエヌの方に伸ばした。いや、彼女ではなかった。彼女の後ろに佇む人物に伸ばしたのだ！

彼が指し出した手の先に目をやった人々は、驚きのあまり言葉を

失う。

そして、ある者は気絶し、また、ある者はその恐ろしさのあまり逃げ出した。

僕もまた、その人物を言葉なく、凝視していた。

黄金色の髪は腰まで、純白のドレスは足首まである。顔は、鼻下まで伸びた前髪でよく見えないが、異常なほど白い。

そう、まるで、蛾のように……。

「ジゼル」

それは誰が言い放った言葉だったのか。

恐怖に顔を引きつらせたリリアー又だろうか？

顔色蒼白なイレー又か？

少なくとも僕ではない。僕は言葉さえ失っているのだから。

「ジゼル」

それは、ベッドの上で上半身を起こしたマルキードのものだった。ジゼルは髪をふわり、ふわりと風に遊ばせながら、一步一步しっかりと足取りで、怪盗に差し出された手に近寄る。

人々は逃げるように、彼女の道をあけた。

ふわり、ふわり。白いドレスが揺れ動く。月の欠片が彼女の髪を流れる。

それは幽霊とか、ゾンビとかいうモノの類とはほど遠い。きれい。美しい。いや、神秘的。不思議な感じだった。

半年も前に死んだはずの少女が目の前にいて、しかも自分の足で歩いている。

僕は何度も瞬きをする。こんなことがあって良いはずがなかった。人々が固唾を呑んで見守る中、ジゼルは怪盗の手に自分の手を近付ける。

だが、怪盗の手を取る前に、チラリとマルキードに冷たい視線を投げやった。

「ジゼル。ああ、生き返ってきてくれたのか」

ジゼルがやっと自分を見てくれたと素直に喜んだ彼は、その視線にすぎた。

だが、彼女はそれを鼻で嗤う。

「さようなら、お父様」

それは少女にしては低い声だった。そして、ひどく冷たく、残酷だった。

彼女の手をうやうやしく取った怪盗は、そのまま腕の中に彼女を引き寄せて、その腰を抱いた。

「海の娘の凍りついた時間、ご覧の通り、解かしてみせた」

そう言ったかと思うと、怪盗は素早く拳銃をしまい、窓枠に駆け寄った。

そして、ジゼルもろとも闇の中に姿を消したのだ。

15 紳士というものはね、

やはり慣れているからなのだろう。

怪盗が消えた部屋の中で、いち早く我に返ることができたのは、この時も、ドルーエだった。

「お、おお、追え！ 追うんだ、馬鹿者！」

呆然とする部下たちに怒鳴り散らし、自らも鉄砲玉ごとく駆け出した。

だが、闇へと消えた怪盗の姿は、どんなに目を凝らしても欠片も見つからず、追いようがない。

困り果てたのは彼の部下たちだった。右往左往と駆けずる警官を横目に、フォークスは僕の袖を引いた。

「行こう」

「え？ どこへ？」

「アルのどこ。すぐに荷物をまとめるんだ。この館にはもう用はないからね」

そう言うと、彼は僕を半ば引きずるようにして、僕らの為に用意された客室に足を向けた。

ところが、部屋の前まで来て、僕らは顔を見合わせる。扉の前に鞆が二つ置いてあったのだ。

「どういうことだと思う？」

「すぐに来いってことだろうね」

鞆は僕らの物で、中にはもちろん、僕たちの荷物がきちんと収まっていた。

おそらく、ルクレールの命令でネリーがやったことだろう。

これは感謝するべきなのか、どうなのか、やや疑問を持ちながら、僕は鞆を手にする。

屋敷を出ると、またも二人の為に馬車が用意されていた。それには、フォークスは呆れ、僕は苦笑する。

——これは感謝するべきなんだろうな。

僕らに乗せた馬車は暗闇を黙々と走った。

目的地は遠いのだろうか。そう思った時、その思いがそのまま顔に出てしまったのだろう、フォークスがくすくす笑いながら言った。

「眠ければ、寝て良いよ。結構遠いからね。着くのは、きっと明け方近くになる」

「いったいどこに行くんだい？」

ルクレールの所とは言われたが、それがどこであるか、はっきりと聞かされていない僕は不安げに尋ねた。すると、

「墓地だよ」

と、さらに不安にさせるような答えが短く返ってきた。

これ以上聞いて、ますます不安になるのは嫌だと思い、僕はそれっきり黙って瞼を閉じた。



フォークスに揺り起こされて、僕はいつの間にか馬車が止まっていることに気付いた。どうやら目的地に着いたらしい。

馬車から降り立ち、僕は絶句する。フォークスの言葉通り、そこは墓場だった。

「な、なんで、こんなところに？」

暗闇にうつすらと見える何百もの十字架。それらは規則正しく並んでいる。その一つ一つが地下に眠る遺体の数を暗に表していた。おっかなびっくりしながらフォークスを振り返った僕に、彼は無言でカンテラを突き出した。どうやら、持てということらしい。

僕が黙ってそれを受け取ると、彼はスタスタと歩き出した。慌てて後を追う。

しばらく歩くと、やたら眩しい光が見えてきた。何だろうかと思っている、その光は、ある一つの墓の回りを皓々と照らしていた。フォークスはその光を目指しているようだ。

更に近付いてみると、光の中に人影がちらちらと見えた。

一人ではない。四人、いや、五人だ。だが、そのうちの一人はぐ

ったりとしていて、もう一人の腕の中に抱きかかえられていた。

「アル」

その人影を見て、フォークスが声を上げた。駆け寄ると、フォークスの言う通り、その人影は紛れもなくルクレールだった。

彼は怪盗Rの姿のまま、にっと笑い、二人に片手をあげた。

「早かったな」

「おかげさまでね」

近付いてよく見てみると、ルクレールの腕の中にいる人物はジゼルだった。

あの生き返った少女、ジゼルだ！

だが、どうも、様子がおかしい。マルキードの寝室で見た時の彼女の髪は、月明かりにキラキラと輝いていた。

だが、今、ルクレールの腕の中にいる彼女の髪は、人形のもののようにはパサパサで、キラリともしない。それどころか、櫛さえ通りそうにない。

加えて、何よりも不可解な点は、先程は彼女がルクレールの腕の中でぐったりとしていると言いつたが、『ぐったり』という表現は相応しくない。彼女の体は直立したままの格好で、カチンコチンに固まって、ルクレールに抱き支えられていた。

もっとよく見ようと、僕が彼に歩み寄った時、ずいぶんと下の方で声が聞こえた。

「ルクレール様、掘れましたよ」

驚き、そちらの方に目をやると、体格の良い男が地面を掘ってい

た。

シャベルを杖代わりにして、見上げた彼をルクレールは労う。

「ありがとう」

「いえ。すぐに棺の用意をしましょう」

その男が、自分で掘った穴から這い上がってくると、立ち替わるようにルクレールがその穴にゆっくりと歩み寄った。

何をする気なのだろう？ と僕が首を傾げた時、不意に彼は振り返った。

そして、僕は見てしまった。

彼の腕の中にいたのは、確かに、半年前、死んだジゼルだった。蟬で固められた人形のような顔。

先程、マルキードの寝室で見た時も、白すぎるほど白い顔だと思ったが、今のそれは白いどころではない。

死人の顔、いや、元から生きていなかったモノの顔だった。気味が悪いとさえ思ってしまった。

「リシャール、紹介する。ジゼルだ」

ルクレールは苦々しく笑った。

「ジゼル。彼が、俺に懐中時計をくれた、リシャールだ」

やはりそうきたか、とフォークスはわずかに肩をすくめ、仰々しく彼女にお辞儀をしてみた。

それに見やり、彼はジゼルに語りかけた。

「確かに紹介したよ。懐中時計を返して貰ってもいいだろう？」

ルクレールの問いに、彼女は頷かない。身動き一つしない。まるで蠟人形のようにじっとしている。沈黙しているのだ。それもそのはずだった。なぜなら、彼女は死んでいるのだから。

「生き返ったなんて、あり得ない」

ポツリと言葉をこぼしたフォークスを僕は振り返った。

「彼女はずっとこのままだったよ。身動き一つしない。話さない。そう、ずっと彼女は沈黙していた」

「だけど、さっき見たジゼルは？」

彼女は確かに歩いていた。自分の足で歩き、怪盗Rの手を取った。

「どうやって、その死体を動かしたんだい？」

そう尋ねると、ルレールは心外だと言わんばかりに声を高めた。

「死体に仕掛けをするような奴を『紳士』とは言えないだろ？」

「じゃあどうやって？」

彼は目線を動かした。それを追って僕も目を動かすと、そこに見知った少年が立っていた。

セルジュ・ボードレール。

——なぜ彼がここに？

頭の中にクエスションマークを漂わせる僕。だが、隣の人物は、やはりと呟いていた。

「セルジュ、君だったんだろ？ あの子は」

「ええっ」

僕は思わず大声を出した。

——だって、彼は男の子だし。そりゃあ、背は低めで、華奢だけど、いくらなんでも女の子には……み、見えるかもしれない。

弟だけあって、ジゼルとよく似た顔立ちをしているし、同じ金髪だ。

あんぐりと口を開いた僕を、ルクレールは笑い、フォークスに向かって頷いた。

「その通り。セルジュがジゼルを演じていたんだ。ずっとね」

「ずっと？」

「僕を呼び出すためだろう？ なんて手の込んだ嫌がらせなんだ」

フォークスは、ドンツ、と杖で地面を突いた。

「セルジュにジゼルの格好をさせ、夜中、村を歩かせた。まるで死んだはずのジゼルが彷徨っているかのようにね。たちまちそのことは噂となり、ボードレール氏やシャルダンも事を起こしやすくなる。加えて、僕の興味を引いて、ここまで連れてくることに成功できたってわけだ」

確かに、死体が動くと言けば『そんなはずがない！』と反論したくなるフォークスの心理をうまくついている。

「それで？ 結局、君らは何をしたかったんだ？」

不機嫌そうな声が響き、ルクレールは苦笑する。

「ジゼルの遺体をきちんと埋葬したかったんだ」

「そして、父さんとシャルダンを懲らしめてやりたかった」

セルジュを見やると、彼は唇を噛みしめている。今頃、娘殺しの罪で逮捕されているだろう父親を思ってか、握り締められた拳は震えている。

カンテラの明かりがチラチラと、そんな彼の表情を照らしている。

「姉さんは屋敷から出たがっていた。オンディーヌだって、本当はボードレール家の者に口汚く言われて屋敷を出て行ったわけじゃない。自分の意思で逃げ出したんだ。必死の思いで、あの屋敷から！」

彼の咽がごくりと鳴った。

「せつかく自由を得たのにオンディーヌは、姉さんを生んであつてなく死んでしまった。そして、姉さんは、自由を得られないまま……」

言葉を詰まらせたセルジュに僕は首を傾げる。

——自由？

確かに、ジゼルのように屋敷に閉じ込められ、一步も外に出られないなんて嫌だ。けれど、孤児のオンディーヌは金持ちに見初められ、妻に望まれたのだ。まるでグリムやアンデルセンが得意とするおとぎ話みたいじゃないか。

オンディーヌは、おとぎ話のお姫様みたいに幸せにはなれなかつ

たのだろうか。

そんな僕の考えをどうやって読みとったのか。口に出して言った覚えがないのに、フォークスはちゃんと僕の疑問に答えをくれる。

「ジョン。人は、それぞれ異なったカタチの幸せを欲しているものなんだ」

驚いて彼を振り向くと、彼は唇の端を軽く上に引く。

「まして、金さえあれば幸せってわけじゃないし、愛さえあれば幸せになれるとは限らない」

彼はステッキをクルクルと手の内で弄びながら、続けた。

「リリアー又なんかとは違って、オンディーヌやジゼルにとっての幸せは、でかい屋敷に住んで、絹のドレスを着、宝石を眺めて暮らすことじゃなかったってわけだよ」

「じゃあ、彼女たちの幸せって？」

「さあね。それは僕の知る所じゃない」

「だけど、普通は……」

「なんだよ、その普通って！」

普通は、金がないよりあった方が幸せだし、きれいな服が着られた方が幸せだ。

毎日いいものをお腹一杯に食べて、ふかふかなベッドで眠る。これ以上の幸せがあるだろうか。

しかし、フォークスは首を振る。

「僕は、毎日どこかしらで事件が起きて、誰かが死んで、警察が犯人を捕まえるのに困難していて、そうして僕を退屈させないでいてくれれば、それで幸せだよ。いくら金があっても、権力を持っても、全く幸せじゃない」

「そんなの、フォークスただだよ。君が変わり者だから……」

「なんだって？」

失敗だったと思う。だが、一度言葉にしてしまったものはどうしようもない。

それにしても、いったい何が原因で彼と言い争う羽目になったのだろう。

怒りに顔を赤らめフォークスが次の罵声を飛ばそうと口を開いた時、待ったの声が掛かった。

「やめないか、二人とも。まったく、いつもそうなのか？ リシャールが誰かと言い争っているのを初めて見たぞ」

呆れ顔のルクレールにフォークスは愚痴る。

「ジョンが頑固なんだ」

「頑固なのはフォークスだろ」

すかさず言い返した僕に、どうしたのだろうか、彼は俯いて呟いた。

「ジョンなら分かってくれると思ったのに……」

危つく聞き逃しそうになった、その言葉の意味を量りかねて僕は聞き返そうとする。

だが、僕が口を開く前に、フォークスは、ついつと僕から目を逸らし、ルクレールに向き直った。

「弟なら顔が似ているはずだし、背丈も女装に無理がない程度だ。なるほどね。ジゼルをよく知るマルキードやリリアー又たちが驚いたわけだ。ジゼルが生き返ったとは思えなかっただろうよ」

くすくすとフォークスが笑うと、つられるようにルクレールも笑った。

そして、彼は再び話し出した。

「セルジュとジゼルとは、以前からの知り合いでな。セルジュが困っていると知って、俺は自分が怪盗Rだと言うことを打ち明けたんだ。そして、ネリーにボードレール家に潜んで貰い、ギョームには警察の方に潜伏して貰った。俺としても、懐中時計を取り返さなきゃいかなかったし、ジゼルの遺体がいつまでもガラスケースの中についているのもな、可哀想だし。それに何より、ジゼルの仇も討ちたかったんだ。けど、その時はまだ犯人が分からなかった。実を言うと、俺はシャルダンだと思っていた。でなければ、リリアー又かと……」

ルクレールは頭を掻いた。

「ジョンから、毒針の話を聞いて、マルキードが真犯人だとわかったんだ。それで、マルキードからジゼルの自由を勝ち取りたくて、セルジュに彼の前でジゼルの格好をしてくれるように頼んだ」

生き返ったジゼルがマルキードに別れを言い、怪盗の手を取った光景は、マルキードにとってどれほど衝撃を与えたことだろう。想像に容易い。

その時、何か重い物を引きずるような音が聞こえた。

振り向くと、先程穴を掘っていた男が大きな箱のような物を運んできていた。人がすっぽり入るその大きな箱は、棺桶だった。

ルクレールはその棺桶の中にそっとジゼルを横たわらせる。

彼の手がジゼルから離れると、入れ替わるようにネリーが箱の中に手を差し入れて、ジゼルの衣服の乱れを直した。

「アル、これを」

と言ったのはギョームで、彼はバラの花束をルクレールに手渡す。目を伏せるルクレール。それは、白バラ。

彼が静かにそれをルイーズの胸元に置くのを、皆で黙って見守った。重たい音を鳴らし、棺桶の蓋が閉められた。

ジゼルが生き返ることは、もはや二度とないだろう。

棺桶は掘られた穴に棺桶が沈められ、その上に少しずつ、少しずつ、冷たい土が被せられていく。

その様子を見ながら、不意に呟く者があつた。セルジュだった。

彼はルクレールに苦笑する。

「白なんだね。姉さんは以前、君から赤バラを貰いたいと言っていたよ」

「じゅめん」

「うつん、いいんだ。姉さんもよく分かっていた。だから、姉さん

はシャルダンに心を許してしまったんだ……」

バラの色。ギョームも気にしていたことだ。

——赤バラの行方を尋ねたら、アルの口から君の名前が出てきたことがあつてね。それで覚えていただけたよ。

ギョームのその言葉から推測するところ、ルクレールが赤バラを送る相手は限られているらしい。

どうして彼がそこまでバラの色にこだわるのかは、僕は知らない。だけど、予告状に使うのはもちろん、普段、人に贈るものも白バラと決めているらしい。

彼から赤バラを貰える人物は、この世でたった一人。彼の親友だけだ。

ギョームの手によって最後の土が被せられた時、セルジュは再び口を開いた。

「これを。依頼料だっただろ？」

ルクレールに差し出した手の平には、蜂蜜黄色の石がコロンと転がっていた。キャッツアイだ。

だが、ルクレールは受け取ろうとしない。黙って、彼を見つめている。

「なんだよ。アル、ずっと欲しがっていたじゃないか」

「まあ、そうだけど。でも、貰えない」

「なんでさ？」

歯切れ悪く答えるルクレールに、セルジュは首を傾げた。

ルクレールはセルジュの手の平に自分の手を合わせ、彼の手にキ

ヤッツアイを握らせる。

「報酬は貰えないからだ」

「シャルダンと逮捕されたし、姉さんはこうして埋葬できたのに？」

「けど、ジゼルの遺体に、俺は傷を付けてしまった」

「傷？」

「眼球を刮り抜いた」

正確に言えば、リリアー又たちに『セイレーンの涙』だと偽って、刮り抜かせたのだ。

「本当に悔やんでいる。まさか彼女たちがあそこまでジゼルの遺体を粗雑に扱うとは思わなかった」

——何を言っているんだ。ルクレールは！

僕は目を見張る。

——だって、『セイレーンの涙』がジゼルの瞳だと言ったのは僕じゃないか。確かに、そう言うように彼が仕向けたかも知れないけれど。ルクレールがそんなに申し訳なさそうにしていたら、僕はどうやってジゼルやセルジュに謝ればいいんだ！

何か言おうと口を開きかけた僕を、フォークスのステッキが制した。

具体的に言えば、口を開きかけた僕の腹を、フォークスがステッキで思いつ切り突き刺し、黙らせたのだ。

「フォ、フォークス！」

「いいから、君は黙っている」

何か言いたくとも、そのあまりの痛さに何も言えず、黙ってルクレールとセルジュを見守っていると、どうやら彼は納得したようで、キャッツアイを自分の力できつく握り締めた。

「あれでいいのさ」

と、フォークスは僕の耳に小さく囁いた。

そうこうしている間に、長い夜は明けようとしている。

暗闇だったはずの東の空がいつの間にかオレンジ色に染まっていた。同様にオレンジに染まった海が薄ぼんやりと見え始め、その存在を知らしめるかのように、潮の香りが辺りに漂う。

波の声。そうか、ここは海の近くだったのか。そう、僕は思った。

16 君は君、俺は俺。そして、彼は彼

ルクレール家に戻り、一息入れたフォークスは、唐突にイギリスに帰ろうと言い放った。

用は済んだわけだし、これ以上授業を欠席するのも気が引けたので、僕も賛成する。

持ってきた物はわずかで、荷造りと言ってもそう時間はいらぬ。難なく終わらせて時計を確認すると、まだ正午前だった。僕は鞆の上に腰を下ろした。

とたん、大きくあくびが出る。それもそのはず。昨夜は馬車の中で寝たのみだった。

ジゼルを弔い、ルクレール家に戻ってきたのは、太陽が昇りきった後だった。

さんさんと、照り輝く太陽を横目にベッドで寝る気になれず、コーヒ―を啜ることにしたのだ。

二度目のあくびをし、勢いをつけて僕は立ち上がった。



荷物を手に外に出ると、ルクレールが用意したのだろう、馬車が止まっていた。

「ジョン、遅い」

馬車に荷物を積み込んだフォークスがステッキを片手に言い放つ。

「君のせいで、ロンドンに着くのは夜中になりそうだ」

「ごめん」

こういう時は、とにかく早めに謝った方が良い。更に付け加えて文句を言おうとしたフォークスの口を塞ぐように、僕は短く謝罪の言葉を述べた。

そして、自分の荷物も馬車に積み込む。

「あれ？」

馬車の中を見て、僕は首を傾げた。馬車の中には、今まさに積み込んだ自分の鞆とフォークスの鞆が隅の方に置いてある。だが、もう一つあるはずの鞆がどこにも見あたらないのだ。

「ルクレールは？ まだなのかい？」

振り返りざまにフォークスに尋ねると、彼は、さあね、と肩を竦めた。

その時、噂をすれば……というやつだ、ルクレールが姿を現せた。だが、その姿を見て、僕はもちろん、フォークスも絶句する。

彼のその格好はどう見ても外出向きの格好ではなかった。

そして、鞆の代わりに手にしていたものは、大きなバラの花束で、

それをバサアツとフォークスに投げやった。
その粗雑な扱いに赤い花びらが散る。

「どういづつもりだ」

花束を両手で受け取ると、フォークスはキツとルクレールを睨んだ。だが、彼は怯んだ様子もなく、低めの声で言い放った。

「俺は、行かない」

「何？」

「ここに残る。ここ、フランスに」

——なんだって！

僕は耳を疑った。驚きのあまり声さえでなかった。口をパクパクさせ、フォークスを振り返ると、彼はぎゅっと唇を噛み締めて、じっとルクレールを睨んでいた。

「ロンドンの霧の多さには、いい加減うんざりしたんだ。やはり、俺の国は、ここ、フランスだ。それに、リシャール、お前にはもう俺は必要ないだろ？」

感情のない言葉が寒々しく辺りに響き渡った。

そして、それに対するフォークスの答えも凍り付くようなものだった。

「勝手にすればいいさ。僕には関係ない。君の好きにすればいいだろ？　今までだってそうだったじゃないか。何を今更、僕に断りを入れるんだい？　第一、僕がいつ君を必要した？　端っから必要な

かった」

言い放つと、フォークスは花束を片手で握り締めて、ルクレールの脇を通り抜けた。

「フォークス、どこへ？」

「忘れ物！」

すかさず尋ねた僕に怒鳴り声を上げると、彼は屋敷の中に姿を消す。

ボタンと閉まった玄関をしばらく唾然と見つめていた僕だったが、ふと思い出したようにルクレールを見る。

すると、彼も僕に振り返って、苦笑した。

その笑みがとてもきれいで、ひどく寂しそうだった。

泣きたくなったのは、傷ついたはずの彼ではなく、それを見つめる僕の方だ。

僕にも分かった。フォークスにひどい言葉を言わせたのは、彼自身だ。

ロンドンの霧の多さにうんざりしたなんて嘘だ。さも今までフォークスには自分が必要だったかのように言えば、フォークスはそれに反発して、ああ言うのは明白だった。

わざと言わせたんだ。彼から自分を引き離すために……。

そして、そのことをフォークスも分かっていた。忘れ物だなんて嘘だ。今頃、ルクレール家の屋敷のどこかで、一人物思いに更けているのだろう。

「ルクレール。君はそれでいいのかい？」

不覚にも涙が零れた。彼は苦笑する。

「俺を必要とする奴は他にも大勢いるんだ。必要としないリシヤール一人にいつまでも構ってられない」

「フォークスは君を必要としているよ」

「いや」

ルクレールの黒髪が、悪戯好きな風に吹かれて左右に揺れ動いた。

「今のリシヤールが必要としているのは俺じゃない。お前だよ、ジヤン。俺は今まで、あいつが、あまりにも人に馴染まないものだから、俺がいつも側にいてやらなきゃと思っていた。だから、イギリスにもついて行った。——けど、違ったんだ。俺が側にいるから、あいつは他の誰とも仲良くなろうとしない」

僕は黙って彼を見つめた。彼の言葉は口から放たれたと同時に大気に溶けていく。まるで儚い。

「寮の部屋も違うし、授業もほとんど同じにならなかった。その上、俺は仕事のために度々どこかに出かけなきゃならない。そうなると逢える時間もずいぶん減ってしまった。始めは不安で堪らなかったよ。俺がいない時間、あいつは何をしているんだろう、ってな。妙な薬に手を出しているんじゃないか。きちんと食事を取っているだろうか。夜はちゃんと寝られているだろうか……」

「妙な薬については、ちょっと……だけど、ちゃんと食べてるし、寝過ぎなほど寝ているから大丈夫だよ」

僕の言葉に彼は苦笑する。

「ああ、そうだな。リシャールは大丈夫だった。ジャンという友達も自分で作れたし。俺の心配なんて全部取り越し苦労だった」

その寂しそうな表情に、僕は慌てて言い加える。

「けど、やっぱり、フォークスには君が必要だよ。なんだかんだ言っ
て君を一番頼りにしているんだ。だから、ずっと側にいてあげて
よ。仕事って、怪盗のこと？ それをやめたら、ずっとイギリスに
いられるのかい？ フォークスの側に……」

「怪盗をやめる気はない」

きっぱりと言い放つルクレールに僕は涙を拭い、しっかりと見つめ返した。

分かっていた。彼が怪盗をやめられないということは。

「この家も他の別邸も、俺の父親がどこから盗んだ物売り払ってできた金で建てたものだ。そして、ルクレール家で働く者たちは皆、同様の金で働いてくれている。俺を育てた金もそうだ。父親が死んで、収入源がなくなると、使用人たちは皆、俺に期待の目を向けた。早く大きくなって立派な怪盗になってくれと言われて育ったんだよ、俺は。そして、皆の期待通りの怪盗になった俺は、ルクレール家の使用人に払う給料以上の金を手にできるようになった。それで、孤児や貧しい者たちにその金を分けてやることにした」

ルクレールは僕から目を逸らし、遠くの方を見つめる。そこにはいくつかの民家がまばらに見えていた。

「俺の金で、子どもの首を絞めずに済んだと泣いて喜ぶ夫婦がいた。

何日も物を食べていないという孤児はこれでパンが買えるとお礼に笑顔くれた。分かるだろ？ 俺を必要としてくれる者がこの国には溢れているんだよ」

彼は息を重たく吐き出した。

「俺はリシャル一人を特別に扱えない。たとえリシャルが俺の腕の中にいて、今にも泣きそうな顔をしていても、俺の目の端で泣いている奴がいれば、俺はそいつに駆け寄って手を差し伸べる。リシャルを特別扱いできない。そうしたいという気持ちはあるんだから、余計に苦しい」

そうしたいという気持ちの表れは、おそらく、バラの花にあるのだろう。

唯一の特別扱い。フォークスだけに与える赤バラ。けれど、ルクレールにはそれだけの特別しか、フォークスにしてやれない。

「ジャンはリシャルの側にいてやってくれ」

「そりゃあ、僕はそのつもりだけど。けど……」

「ジャン。俺は別にリシャルと縁を切るなんて言っていないぞ。そんなに悲痛な顔をしないでくれ」

「だって」

「俺はリシャルの親友をやめる気はないし、これからあいつは俺にとってこの世で一番大切な奴だよ」

ルクレールは僕に漆黒の瞳を向ける。そして、見惚れてしまうほど、きれいに微笑む。

「ずっと側にいることが大切することとは違うだろ？ 友情のあり方だって、人それぞれに違っていいんじゃないのか？」

そういえば僕は元々、二人の友情について疑問を持っていた。

普通の友人関係のように常に一緒に行動したり、ふざけあったり、出かけたりしない二人なのである。それは、端から見て、特別に仲が良いように見えないほどだ。

普通、友人同士ならばこうするものだろうと僕が思うようなことをいっさいしない二人を見てみると、思わず首を傾げたくなる。

「人それぞれ違っているのが、よく分からない」

「だろうな」

ルクレールは苦笑する。

「その昔、この世界には唯一絶対の神がいた」

「え？」

いきなり何を言い出すのかと、ルクレールを見上げる僕に、彼は唇の端を上引く。

「唯一人の神が決めた正解はただ一つだ。友情とはこうあるべきだ。神がそうだと決めたことを、人間は常識だと言って、普通はこうするべきだと言いつつ。海の果てには怪物がいる。太陽は地球の周りを回っている。人間は神が自身の姿に似せて造った。一昔前までは、

それらは常識だったんだ。だが、地球は丸く、海には果てがない。太陽が地球の周りを回っているのではなく、地球の方が太陽の周りを回っている。一昔前の常識が誤りだったということは、今や誰もが知っている。――さて、ジャン。君は信じないかもしれないが、ダーヴィンの説によると、人間は猿から進化したらしい」

「なんだって、猿？」

「なかなかおもしろい説だろう？ 実に興味深い。だが、重要な点はその説を信じる、信じないというところではない。人間が猿から進化したなんて言えるのは、その人が神の存在を信じ切れないようになっていいるからだ。当然だな、地球は丸いんだからな。昔むかしに、そうだと神が定めたことが、科学によって一つずつ誤りだったとされてきている。神の存在そのものを疑いだす者が現れても仕方がない」

「ルクレールも、神はいないと思っているのかい？」

「いないとは思っていない。むしろ、一人しかいないとは思えないんだ。俺は、神って存在は一人の人間につき、一人いると思っている。つまり、一人一人に自分だけの神がいるんだってこと。それは、自分だけの正解があるということだ」

「自分だけの？」

「さっきも言ったとおり、科学が進歩して、いろんなことが分かってきた。分かってきたことが増えるにつれて、人々は唯一絶対の神に疑問を持つようになった。その疑問はこれからますます大きく膨らんでいく。そうして、いずれ唯一絶対の神は死んでしまうだろう。その代わりに誕生するのが……」

「自分だけの神？」

「そうだ。そういう世界がいずれ来る。近いうちに必ず。俺とリシヤールは、ただ、少し早かったただけだ。だから、理解されない。けど、俺もリシヤールもジャンだけには分かって貰いたいんだ」

僕は大きく頷いた。

——そうか。それでだったのだ。

『普通、何々すべきだ』という類の言い方をしたから、フォークスはむきになって言い返してきたのだ。

君の『普通』を僕にまで押し付けないでくれ、と彼は言いたかったのだろう。

君に『正義』があるように、僕にも『正義』がある。君の『神』と僕の『神』は、まるで別のモノなんだよ、と。

「二人は離れていても、親友なんだね？」

「ああ」

「わかった」

納得して再び頷く。

そんな僕の耳に、カチャリと軽い音が聞こえてきた。

振り返るとフォークスが玄関の扉を開けて外に出てきたところだった。

その表情はさっぱりとして、先程の怒気はない。

「忘れ物は見つかったか？」

ルクレールの問いにフォークスは苦笑して首を左右に振った。

「見つからなかった。見つけたら、君が持っていてよ」

ルクレールは微笑んで頷く。

それから、短い別れを言い、フォークスと僕は馬車に乗り込んだ。



ゆっくり、ゆっくり、馬車は走り出す。次第に小さくなっていくルクレールの姿。彼の家。小さな村。波のざわめき。

僕はそれらを何度も何度も振り返り、消えて見えなくなってしまふまで見つめた。

「やっぱり、寂しいよ」

「何？」

「ルクレールがいないと寂しいって言ったんだ。フォークスは寂しくないのかい？」

「まったく」

そんなはずはないと言い返そうとした僕に、彼は手の内で弄んでいた花束を僕の鼻先に突き出す。

甘いバラの匂いが僕の鼻腔をくすぐった。

「すごい臭いだろ？ バラの匂いって、アルの匂いっぽいよね？」

「……」

「アルって、何考えているんだか分からないよ」

花束を自分の胸の中に戻すと、フォークスは窓の外を眺めながら、大きくため息をついた。

17 それでも、君だけを特別に想う。

お前が善で、俺が悪だなんて、
いったい誰が言ったんだ？

俺は、ただ、自分の思う通りに生きているだけ。

それを『善』だの、『悪』だの、
そんな大層な言葉に置き換えないで欲しい。迷惑だ。

自分の行動を、いちいち他人に善悪つけられては、
自分の生き方そのものが、

どうしようもなく安っぽく思えてしまうんだ。

A・L



それから数日後。フランスに行っている間、——いや、風邪をこじらせて寝込んでいる間に欠席するしかなかった講義の埋め合わせとして、教授から、ありがたくも頂いた課題をようやく済ませたと思ったら、進級試験が間近に迫っていた。

「フォークス、なんで君はそんなに落ち着いていられるんだい？」

早朝から机にかじり付いている僕は、新聞を片手に優雅極まりなく紅茶を飲んでいるフォークスが幻覚なのではないかと、何度も目をこすった。

だが、それはまぎれもなく実体であるようだ。

「君こそ、何をそんなに慌てているんだい？」

「そりゃー慌てるよ。進級がかかっているんだ。僕はもう一度同じ学年をやる気はないよ」

「僕もだ」

しゃあしゃあと言い放つフォークスが憎い。

——だったら、少しは勉強したらどうだい！

そう怒鳴りたくなる。だが、ここは我慢だ。これくらい我慢できないようでは、この先、彼とは付き合っていけない。

僕は一呼吸付くと、努めて穏やかな表情でフォークスに振り向く。

「それにしても余裕そうだね」

だが、それに対する彼の返事に、その表情をそのまま凍りつかせた。

「余裕だからね」

彼は、ずずつと紅茶を啜った。

「君が僕より、勉強していたとは思えないけど？」

「僕は要領がいいんだ」

「……」

ジトつと彼を睨み付けると、彼は仕方がないなあと言って、重い腰を上げた。

「特別に教えてあげよう。いいかい？ フランク教授の試験は毎年、五択問題だ。そして、その正解パターンは、一問目がBで、二問目がC、その次がEで、Aで、Bで、B、C、A、D……」

「ちょっと待った！」

「なんだい？」

「フォークス、君……」

「過去の試験問題を調べたら、全てそうになっていたんだ」

「本当に？」

信じられないという顔をフォークスに向ける僕だが、すぐに頭を横に振った。

「そうじゃなくって。もしかして、フォークス、勉強しないで、正解パターンを丸暗記しているのかい？」

「そうだけど？」

僕はがつくりとうなだれた。

「ああ、でも、ちゃんと勉強している教科もあるよ。けど、フランス教授のつまらない講義の勉強を、寮に帰ってまでしたくないじゃないか。正解パターンが分かっていたら尚更だ」

かなりその意見に賛成したいが、学生として、賛成していいものなのだろうか？

頭の中をぐるぐると悩ませている僕にフォークスは追い打ちをかける。

「他の教授のパターンも聞ukai？ 誰がいい？」

ルクレールが学校を去って数日が過ぎた。

彼は、イギリスに戻らないと僕らに言い放った通り、退学届けでさえ郵送で済ませた。

だから、皆にとって、急にいなくなってしまったという感じがあ

る。

彼と仲が良かった者たちはどう思っただろう。彼らも、離れしまつてもルクレールとはいつまでも友人だと言い切ってくれたら、どんなに良いことだろうと思う。

僕は言い切ることができる。ルクレールは友人だ。

その彼は、時々来る手紙によると、今はパリの学校に通っているらしい。怪盗業も順調らしく、よりいっそうに世間を騒がせている。一方、フォークスの探偵業は相変わらずで、退屈を持て余すこともしばしばあった。だが、彼はこれからなんだと思う。

彼の少年という容姿が探偵業の妨げになっているのだとしたら、これからなのだ。

僕が書く小説のように大人になったフォークスならば、イギリスだけではなく、世界中に名を知られる名探偵になるだろう。

その時も、きっと自分は彼の側にいる。

彼の不機嫌の的になったり、良い玩具になったりしながらも、誰よりも近くで彼の推理を見守っていくつもりだ。彼の友人として。

「ところで、ジョン」

珍しく、あのフォークスが僕に紅茶を入れてくれながら、尋ねてきた。

これは、何かあるのだろうか？ と、不安に思いながらも、カッブを受け取る。

——まさか、毒？

僕は自分の考えに苦笑する。

「なんだい？」

「勉強もいいけど、小説は書けているのかな、って思ってね」

「う、うん、まあね」

歯切れの悪い返事にフォークスは首を傾げる。

「この間のジゼルの一件を参考に書いてみたんだけど、探偵と怪盗が実は親友っていうのは、世間には受け入れられないと思うんだ」

「だろうね」

「だからって、怪盗の存在を消してしまいたくないし、単なる怪盗として登場させるのは、もっと嫌なんだ」

僕の言葉にフォークスも頷く。

「今の社会では、探偵は善、怪盗は悪だからね。その二人が実は仲良しっていうんじゃあ、世間は納得しないだろうね。神と悪魔が手をつないでいるようなもんだ。嫌悪される可能性だってある」

善と悪がはっきりと区別される世界なのだ。今はまだ、白か黒かの世界。

だけど、ルクレールが言っていた世界では、灰色が許される。

人それぞれ。怪盗だって、極悪非道な怪盗もいれば、善人な怪盗だっている。そういう世界にもうじきなっていくのだ。

「あと数年、いや、数十年たったら、その小説も日の目が見られるよ」

「うん」

その時まで閉まっておこう。机の引き出しの一番奥に……。

ずずっと紅茶を啜り、僕らは顔を見合わせてくすくす笑い合った。



その日の午後、フォークス宛てにちよつとした荷物が届いた。

彼はそれを見て、くすぐったそうに微笑んだ。甘い匂いが辺りに漂う。

僕はその香りに酔いそうになりながらも、フォークスに歩み寄った。

「ルクレールから？」

「アル以外の誰がこんなものを寄こすと言っただい？」

「それもそうだね」

フォークス宛てに届いた荷物は、真っ赤なバラの花束。だが、そのどこにも差出人の名前がなかったのだ。

それでもフォークスは、差出人がルクレールであることに疑いを持っていないようで、彼がフランスから持ち帰った枯れかかったバラの花々を花瓶から抜き取り、代わりに今届いたバラを差し入れる。と、その時。ひらりと何かが舞い落ちる。

「フォークス、何か落ちたよ」

「え？」

それは花束から床に落ち、床をすうーっと滑って僕の足下にやって来た。

僕はゆっくりとかがみ、それを拾い上げる。カードのようだ。

「なんて書いてある？」

フォークスはバラから目を離さずに、僕に尋ねる。仕方なく、僕はカードに目を落とした。

「えーと。……ええっ？」

「何？」

僕の驚きの声にフォークスは振り返った。僕は無言で彼にカードを見せた。そこには、ただ一つのアルファベットが書かれている。

ただ、『R』と……。

フォークスは息を吹き出した。

「ホント、何考えているんだか」

呟くように言って、赤バラの中に埋めた顔は、僕の気のせいか、赤く染まっているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2230/>

沈黙の人形

2010年10月8日15時06分発行